

『朱子語類』卷一四～一八 訳注(三)

宇佐美文理・小笠智章・古勝亮・焦堃・孫路易・中純夫・福谷彬

『朱子語類』卷一五「大学」二(1～85条)

大学二 經下

1条

器遠問。致知者、推致事物之理。還當就甚麼樣事推致其理。曰。眼前凡所應接底都是物。事事都有箇極至之理、便要知得到。若知不到、便都沒分明。若知得到、便著定恁地做、更無第二著、第三著。止緣人見道理不破、便恁地苟簡、且恁地做也得、都不做得第一義。曹問。如何是第一義。曰。如為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝之類、決定著恁地、不恁地便不得。又如在朝、須著進君子、退小人。這是第一義。有功決定著賞、有罪決定著誅。更無小人可用之理、更無包含小人之理。惟見得不破、便道小人不可去、也有可用之理、這都是第二義、第三義、如何會好。若事事窮得盡道理、事事占得第一義、做甚麼剛方正大。且如為學、決定是要做聖賢。這是第一義、便漸漸有進步處。若便道自家做不得、且隨分依稀做些子、這是見不破。所以說道、

不以舜之所以事堯事君、賊其君者也。不以堯之所以治民治民、賊其民者也。謂吾身不能者、自賊者也。 賀孫

卓錄云。曹兄問格物窮理、須是事事物物上理會。曰。也須是如此、但窮理上須是見得十分徹底、窮到極處、須是見得第一著、方是、不可只到第三第四著便休了。若窮不得、只道我未窮得到底、只得如此、這道合則從、不合則去。也有義不可得而去者、不可不知。又云、如不以舜之所以事堯事君、賊其君者也。不以堯之所以治民治民、賊其民者也、這皆是極處。 以下致知

〔校勘〕

- 「有箇極至之理」 「箇」を朝鮮古写本は「个」に作る。
- 「便要知得到」 朝鮮古写本は「這便是要知得到」に作る。
- 「得」 万曆本・和刻本はすべて「得」に作る。
- 「若知不到」 朝鮮古写本は「若知不得」に作る。
- 「便著定恁地做」 成化本は「便決定着恁地做」に、朝鮮古写本は「便決定着恁地做」に、朝鮮整版本は「便決定着」に作る。

- 「著」すべて成化本・万曆本・朝鮮古写本・和刻本は「着」に作る。
- 「決」すべて成化本は「決」に作る。
- 「這是第一義」の後 朝鮮古写本は「合如此」の三字有り。
- 「做甚麼」成化本・朝鮮古写本・朝鮮整版本は「做甚麼様」に作る。
- 「這は見不破」朝鮮古写本は「這都是見不破」に作る。
- 「卓録云」朝鮮古写本は「按卓録略云」に作る。
- 「須是事事物物上理會」「事事」を万曆本、和刻本は「事匕」に作る。
- 「曰也須是如此」朝鮮古写本は「先生云也須是如此」に作る。
- 「窮到極處」朝鮮古写本は「處」を「処」に作る。
- 「第三第四著」朝鮮古写本は「第二第四着」に作る。
- 「過」成化本は「過」に作る。
- 「事堯事君」朝鮮古写本は「事堯者事君」に作る。
- 「治民治民」朝鮮古写本は「治民者治民」に作る。
- 「以下致知」朝鮮古写本はこの四字を欠く。

〔訳〕

曹器遠が問うた。「知を致すとは、事物の理を推し極めることですが、それではどのような事についてその理を推し極めるべきでしょうか。」（先生は）言われた。「眼前に接するものはすべて物である。事事すべてにそれぞれ一つの窮極の理があり、それを認識しなければならぬ。もし認識できなければ、それでももうすべて明瞭でなくなる。もし認識できさえすれば、必ずそのようにやってゆくのであり、これより他に二番手三番手はない。ただ人は道理を見極められないからこそ、あの

ようにいい加減になる。しばらくはそのようにしてやっていけても、（それでは）全く第一義のことをなすことはできない。曹が問うた。「どのようなのが第一義でしょうか。」（先生は）言われた。「『大学』にいう『人君たれば、仁に止まる。人臣たれば、敬に止まる。人子たれば、孝に止まる』の類は、必然的にそうであり、そうでなければダメなのだ。また、もし朝廷にあれば、君子を推挙し小人を退けなくてはならない。これが第一義だ。功績があれば必ず賞し、罪過があれば必ず誅する。小人が用いられる理は全く無く、小人を許容する理は全く無い。ただ（この道理を）見極めることができなければ、小人を遠ざけるべきではないとか、彼を用いるべき理もある、などと言うわけだが、それはすべて第二義第三義のことで、良いはずはない。もし事に道理を窮め尽くすことができれば、事に第一義をものにするこゝとができたのだから、何をしようと剛方正大だ。たとえば学問をする場合、必ず聖賢になろうとする、これが第一義で、それでこそ次第に進歩するところがあるのだ。もし安易に、自分は聖人にはなれないから、自分なりに少しだけやってみる、と言うのなら、それは（第一義を）見抜けないからだ。だから（孟子は）『舜の堯に事ふる所以を以て君に事へざるは、其の君を賊ふ者なり。堯の民を治むる所以を以て民を治めざるは、其の民を賊ふ者なり。』と言ったのだ。自分をできないと言う者は、自分を損なう者である。」葉賀孫録

黄卓の記録に云う。曹さんが質問した。「格物窮理は事事物物に即して取り組まなければなりません。」（先生は）言われた。「やはりそうでなくてはならない。ただ、窮理の上で十分に底のところまで見、

窮極のところまで窮め、一番手を見る事ができて初めてよしだ。三番手四番手に至っただけでおしまいにしてしまつてはいけない。もし(一番手を)窮められずに、ただ、私はまだ底のところまでは窮められません、このようにする他はありません、と言うのなら、それは自分を抑えるす言ひ訳であり、やはり上手い窮理のやり方ではない。たとえば君主に仕えるのならば、必ず『進みては忠を尽くさん』ことを思ひ、退きては過ちを補はんことを思ふ』のでなければならず、『道が合えば従い、合わなければ去る』のだ。しかし、義として去ることができない場合もあることは、わきまえなければならぬ。また(黄卓の記録に)云う。(先生が言われた)『舜の堯に事ふる所以を以て君に事へざるは、其の君を賊ふ者なり。堯の民を治むる所以を以て民を治めざるは、其の民を賊ふ者なり』というのは、これはどちらも窮極の処である。』以下、致知について

〔注〕

(1)「器遠」曹叔遠、器遠は字。瑞安の人。少くして陳傅良に学んだ。『語類』には二十三条に登場する。李閔祖録一条、記録者無記のもの一条、黄卓録の本条に追記されたもの以外にも三条に、「曹兄」として登場する。それ以外はすべて葉賀孫の記録である。『宋史』卷四一六に伝がある。他『宋元學案』卷五三、陳榮捷『朱子門人』一九四頁。なお、葉賀孫録から、本条に近いものを挙げておく。『語類』卷五九、七二条(IV 139A)「器遠問。平旦之氣、緣氣弱、易為事物所勝、如何。曰。這也別無道理、只是漸漸捱將去、自有力。這麼

只是志不果。復說第一義云、如這箇、只有箇進步捱將去底道理、這只是有這一義。若於此不見得、便又說今日做不得、且待來日。這事做不得、且備員做些子、都是第二、第三義。」

(2)「便著」既出。「便」に同じ。卷一四、八五条、注(11)を参照。

(3)「第二著、第三著」最上策に対する第二策、第三策。また第一義に対する第二義、第三義。「著」は「着」に通じ、元來は將棋などにおける指し手を意味するが、転じて策、方法の意にもなる。『語類』卷一七、三三条、廖德明録(II 359)「陸子靜從初亦學佛、嘗言、儒佛差處是義利之間。某應曰。此猶是第二著、只它根本處便不是。」

(4)「苟簡」いい加減だ。『語類』卷一〇、六七条に「今人所以讀書苟簡者、緣書皆有印本多了。」とある。三浦國雄『朱子語類抄』一七頁参照。

(5)「見道理不破」「見不破」は、見極められないの意。「見得破」(見極められる)の例は卷一四、四四條、余大雅録「聖人不令人懸空窮理、須要格物者、是要人就那上見得道理破、便實。」に既出。

(6)「決定著」きつと…だ、決ま…だ。卷一四、一四四條、注(9)を参照。

(7)「第一義」仏教語で、言葉によつては捉えられない窮極の真理を意味する。「第一義諦」「真諦」「勝義諦」に同じ。下の「如何是第一義」は、『景德伝灯録』卷一九、福州南禪契璠禪師に、「時寺僧問。如何是第一義。師曰。何不問第一義。曰。見問。師曰。已落第二義也。」とある。

(8)「為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝」『大学』

伝三章。『語類』卷一四、二四條に既出。

- (9) 「進君子退小人」『貞觀政要』卷五「貞觀十一年：魏徵因上疏曰。臣聞為人君者、在乎善善而惡惡、近君子而遠小人。善善明則君子進矣、惡惡著則小人退矣。：為國家者急於進君子而退小人、乃使君子道消、小人道長、則君臣失序、上下否隔、亂亡不卹、將何以理乎。」
- (10) 「有功決定著賞、有罪決定著誅」『管子』「七法」「有功必賞、有罪必誅。」
- (11) 「依稀」かすかに。似る。『老子』一四章「視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希。」
- (12) 「些子」いささか。わずか。三浦國雄『朱子語類抄』三四六頁。
- (13) 「不以舜之所以事堯事君、賊其君者也。不以堯之所以治民治民、賊其民者也。」『孟子』「離婁」上。ただし、「賊其君者也」は原文では「不敬其君者也」に作る。
- (14) 「自賊者」『孟子』「公孫丑」上「人之有是四端也、猶其有四體也。有是四端而自謂不能者、自賊者也。」
- (15) 「便休」おしまい。終わり。卷一四、一一三条、葉賀孫録「新民、不是只略略地新得便休。」また、三浦國雄『朱子語類抄』三九頁。
- (16) 「自恕」『二程遺書』卷五「游廬山集」卷三「師語二」、『近思錄』卷五「改過遷善克己復禮篇」「責上責下而中自恕己、豈可任職分。」湯淺幸孫氏は、「恕己」を「がんらい己の心で推測して他人をおしはかる」という意味であるが、ここでは己をゆるすの意味」と指摘される（『近思錄』下、三四頁、朝日出版社、中国文明選第五卷、一九七四年）。

(17) 「進思盡忠、退思補過」『春秋左氏伝』宣公一二年「士貞子諫曰。：林父之事君也、進思盡忠、退思補過。社稷之衛也。若之何殺之。」また、『孝經』「事君章」第一七「子曰、君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡。故上下能相親也」

(18) 「道合則從、不合則去」『礼記』内則「四十始仕、方物出謀發慮、道合則服從、不可則去。」

(19) 「有義不可得而去者」箕子や王子比干のことを指すか。箕子は殷の紂王の一族で、紂王を諫めたが聞き入れられず、人から去ることを勧められて「臣下でありながら諫言が聞き入れられないからといって国を去るのは、主君の悪をさらし、自分の人気が得ようとすることで、私は去るに忍びない」と言った。王子比干も紂の一族。「死を賭して諫めなければ人民を苦しめるだけだ」と言って紂王を諫め、怒りを買って殺された。いずれも『史記』卷三八「宋微子世家」にある。

(20) 「以下致知」本条以下六条まで、「致知」をテーマとした問答である。便宜のために、『大学』及び朱熹章句の当該部分を挙げておく。『大学』経「古之欲明明徳於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」朱熹章句「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」

2条

致知所以求為真知。真知、是要徹骨都見得透。 道夫

〔校勘〕

○諸本異同無し。

〔訳〕

致知は知が真知となることを求める手だてだ。真知は、とことんすべてを見透してしまおうとすることだ。 楊道夫録

〔注〕

(1) 「真知」『莊子』大宗師「有真人、而後有真知。」また、『二程遺書』卷二上「真知與常知異。常見一田夫、曾被虎傷、有人說虎傷人、衆莫不驚、獨田夫色動異於衆。若虎能傷人、雖三尺童子莫不知之、然未嘗真知。真知須如田夫乃是。故人知不善而猶為不善、是亦未嘗真知。若真知、決不為矣。」同、卷一八「知有多少般數、煞有深淺。向親見一人、曾為虎所傷、因言及虎、神色便變。傍有數人、見佗說虎、非不知虎之猛可畏、然不如佗說了有畏懼之色、蓋真知虎者也。學者深知亦如此。且如膾炙。貴公子與野人莫不皆知其美、然貴人聞者便有欲嗜膾炙之色、野人則不然。學者須是真知、纔知得是、便泰然行將去也。」

(2) 「要徹骨都見得透」『碧巖錄』一九、本則評唱「也須是徹骨徹髓

見透始得。」なお、朱熹が「徹」字を好んだことなど、三浦國雄『朱子語類抄』一九六頁に解説がある。

3条

問。致知莫只是致察否。曰。如讀書而求其義、處事而求其當、接物存心察其是非邪正、皆是也。 寓

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

問う。「致知とはただ察を致すということではないですか。(先生は)言われた。」たとえば、読書して書に表された義を求め、事に対処して当を得るように求め、外物に接したり自己の心を存養したりするに際して心の是非正邪を察する、どれもこのことである。」 徐寓録

〔注〕

(1) 「致知」と「読書」「応事」「接物」『二程遺書』卷一八に「或問。進修之術何先。曰。莫先於正心誠意。誠意在致知、致知在格物。格至也、如祖考來格之格。凡一物上有一理、須是窮致其理。窮理亦多端、或讀書、講明義理、或論古今人物、別其是非、或應接事物而處其當、皆窮理也。或問。格物須物物格之、還只格一物而萬理皆知。曰。怎

生便會該通。若只格一物便通衆理、雖顔子亦不敢如此道。須是今日

格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」とある。

(2)「致察」『伊洛淵源録』卷一三「胡文定公」「行状略」「公諱安國、

嘗答頼川曾幾書曰。窮理盡性、乃聖門事業。物物而察、知之始也。

一以貫之、知之至也。」「語類」卷一八、一一〇条、楊道夫録(Ⅱ

178)「問。物物致察、與物物而格、何別。曰。文定所謂物物致察、

只求之於外。如所謂察天行以自強、察地勢以厚德、只因其物之如是

而求之耳。初不知天如何而健、地如何而順也。」

(3)「存心」『孟子』「尽心」上「孟子曰。盡其心者、知其性也。知

其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。」、同じく「離婁」

下「孟子曰。君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心。以禮

存心。」

〔参考〕

『黃氏日抄』卷三七、読本朝諸儒理學書、晦庵語類、大学「物莫不

有理、人莫不有知。不説窮理却言格物、理無捉摸、言物則理自在。如

讀書而求其義、處事而求其當、接物存心察其是非邪正、皆是也。」

4条

因鄭仲履之問而言曰。致知乃本心之知。如一面鏡子、本全體通明、

只被昏翳了。而今逐旋磨去、使四邊皆照見、其明無所不到。蓋卿

〔校勘〕

○「全體通明」「體」を万曆本、和刻本は「体」に作る。

〔訳〕

鄭仲履の質問にちなんで言われた。「知を致せばそれは本来の心の知なのだ。一面の鏡のように、本来、その全き本体はすべてに通じる明瞭さを有しているのであつて、ただ昏まされ蔽われてしまつてに過ぎないのだ。今、逐一手だてを講じて磨いてゆき、まわりのものすべてを映して照らし出されるようにしてやれば、その明らかさは至らないところはない。」襲蓋卿録

〔注〕

(1)「鄭仲履」詳細は不明。『語類』には六条に登場。陳榮捷『朱子門人』三四一頁。

(2)「本心」『孟子』「告子」上「郷為身死而不受、今為宮室之美為之。郷為身死而不受、今為妻妾之奉為之。郷為身死而不受、今為所識窮乏者得我而為之、是亦不可以已乎。此之謂失其本心。」また、朱熹『中庸章句』序「精則察夫二者之間而不雜也、一則守其本心之正而不離也。」

(3)「如一面鏡子」以下、心のあり方や働きを鏡を用いて喩えること、及び「全体」については、卷一四、七四条を参照。

(4)「逐旋」順を追つて。逐一。『語類』に用例は多い。一つ挙げておく。卷一〇、四八条、余大雅録(1167)「讀書是格物一事。今且

須逐段子細玩味、反來覆去、或一日、或兩日、只看一段、則這一段便是我底。脚踏這一段了、又看第二段。如此逐旋捱去、捱得多後、却見頭頭道理都到。」既出の卷一四、二九条、三三三条の「逐段」に同じ。

5条

致知有甚了期。方

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は、この条を欠く。

〔訳〕

致知にはいつたい、いつ終わる時が有ろうか。楊方録

〔注〕

(1) 「有甚了期」 終わりはない。きりがない。文脈によって肯定的にも否定的にも解釈できる。たとえば、『語類』卷一八、七一条、萬人傑録(Ⅱ 406)「今若於一草一木上理會、有甚了期。但其間有積習多後自當脫然有貫通處者為切當耳。」では、「脱然貫通」を見据えて、一々つかまえていたのでは「きりがない」の意。同、卷三三、六三条、潘時拳録(Ⅲ 843)「博施濟衆、是無了期底事。故曰。堯舜其猶病諸。然若得果無私意、已有此心。仁則自心中流出來、隨其所施之大小自可見矣。」では、「終わりなく続ける」の意。本条では、「致知」の

必要を強調するものとして「いつまでも続けなさい」の意に解した。

6条

致知工夫、亦只是且據所已知者、玩索推廣將去。具於心者、本無不足也。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は、この条を欠く。

〔訳〕

致知の工夫は、やはりただ自分の既に知っていることから熟読玩味し推し拡げて行くのみ。心に具わっているものに、もともと足らないものは無いのだ。

〔注〕

(1) 本条は、『朱文公文集』卷五〇「答周舜弼」六にほぼ同じ文言がある。「致知工夫、亦只是且據所已知者、玩索推廣將去。具於心者、本自無不足也。」周舜弼、名は謨は、「朱子語錄姓氏」所収。南康軍建昌の人。『宋元学案』(及び同補遺)卷六九。また、『孝亭淵源録』卷一六に黄榦撰墓誌銘を引く。

(2) 「據所已知者」『大学章句』伝五章「莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。」

(3)「玩索」 熟読玩味して考究する。『中庸章句』題下子程子曰「善

讀者玩索而有得焉、則終身用之、有不能盡者矣。」

(4)「推廣將去」「推廣」は卷一四、七二条の注(4)を参照。「：將去」は「：してゆく」。卷一四、六条、金去偽録「遂段子耕將去」等に既出。

(5)「具於心者、本無不足也」『中庸章句』第一章「道也者不可須臾離也。可離非道也」の朱注に「道者、日用事物当行之理、皆性之徳而具於心、無物不有、無時不然、所以不可須臾離也。」とある。

7条

格物者、格、盡也、須是窮盡事物之理。若是窮得三兩分、便未是格物。須是窮盡得到十分、方是格物。 賀孫 以下格物、兼論窮理

〔校勘〕

○「以下格物兼論窮理」 朝鮮古写本はこの八字を欠く。

〔訳〕

格物とは、格は尽くすことである。かならず事物の理を窮め尽くさなければならぬ。二、三割窮められたというのは、まだ格物ではない。十割まで窮め尽くすことができ、初めて格物である。 葉賀孫録 以下、格物について、兼ねて窮理を論じる。

〔注〕

(1)「格物者、格、盡也」「格、盡也」は珍しい。『大学章句』では「格、至也。物、猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也。」「大学或問」では「格者、極致之謂、如格于文祖之格、言窮之而至其極也。」とある。

(2)「三兩分」「十分」 窮理の深さを示す同様の言葉に、卷一四、一〇六条、董誥録「又問。既曰明德、又曰至善、何也。曰。明得一分、便有一分。明得十分、便有十分。明得二十分、乃是極至處也。」同、一〇〇条、鍾震録「至善是个最好處。若十件事做得九件是、一件不盡、亦不是至善。」卷一八、七一条、萬人傑録(II 40)「又云。所謂格物者、常人於此理、或能知一二分、即其一二分之所知者推之、直要推到十分、窮得來無去處、方是格物。」などがある。

8条

(3)「以下格物、兼論窮理」 以下、四〇条まで「格物」と「窮理」をテーマとする。『大学』経の当該箇所は一条の注(20)を参照。

○「四方八面去」 朝鮮古写本は「四面八達」に作る。

〔校勘〕

居甫問。格物工夫、覺見不周給。曰。須是四方八面去格。 可學

〔訳〕

居甫が質問した。「私の格物の工夫は、行き渡っていないように感じます。」（先生は）言われた。「必ず四方八方、あまねく至らなければならぬ。」 鄭可學録

〔注〕

(1) 「居甫」 徐寓。居甫（父）は字。永嘉の人。『語類』の記録者のうちの一人。卷一五、三九条、鄭可學録（I 280）に「居甫問。格物窮理、但理自有可以彼此者。…」とあるが、朝鮮古写本では「徐居甫問、…」とする。

(2) 「覺見」 思われる。感じられる。『語類』卷一三、一三二条、楊方録（I 242）「以小惠相濡沫、覺見氣象不好。」卷一二〇、二六条、葉賀孫録（VII 282）「覺見持敬不甚安。」また、「覺得」もほぼ同じ。卷九一、二三条、林夔孫録（VI 232）「後人覺得不安。」

(3) 「周給」 あまねくゆきわたる。

(4) 「四方八面」 四方八方あまねく。『語類』での用例は非常に多い。卷五、三二条、輔廣録（I 85）「四方八面皆如此光明祭爛、但今人亦少能看得如此。」など。

9条

格物。格、猶至也、如舜格于文祖之格、是至于文祖處。 芝

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は、この条を欠く。

〔訳〕

格物について。「格」はちようど「至る」のような意味である。『書経』舜典の「舜、文祖に格る」の「格」のようなもので、これは（堯の喪が明けると、舜は本式に天子となったことを報告するために）堯の文祖の廟に至ったのである。 陳芝録

〔注〕

(1) 「格、猶至也」 『爾雅』「積詰」に「格、至也。」とある。また、本条にも触れる『書経』虞書「舜典」の「舜格于文祖」の孔安国伝に「故復至文祖廟告」とある。また、『史記』卷一「五帝本紀」に「於是舜乃至於文祖」とある。

(2) 「如舜格于文祖之格」 『書経』虞書「舜典」「月正元日、舜格于文祖。」孔伝「月正、正月元日上日也。舜服堯喪三年畢、將即政。故復至文祖廟告。」『大学或問』に「故致知之道、在乎即事觀理、以格夫物。格者極至之謂、如格于文祖之格。言窮之而至其極也。」とある。

10条

問。格物、還是事未至時格、事既至然後格。曰。格、是到那般所在。

也有事至時格底、也有事未至時格底。芝。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷十五は、この条を欠く。

〔訳〕

問う。「物に格いたるとは、やはり事が未だ至らない時に格るのでしょ
うか、(それとも)事が既に至つてから格るのでしょうか。」(先生は)
言われた。「格るは、それ(事物)があるところに到る。事が至る時
に格るといふのもあり、事が未だ至つてない時に格るといふのもあ
る。」陳芝録

〔注〕

(1)「到那般所在」「到那般事所在」「到那般物所在」の意。「般」は
量詞。

11条

格物者、如言性、則當推其如何謂之性。如言心、則當推其如何謂之心、
只此便是格物。 砥

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は、この条を欠く。

〔訳〕

物に格るとは、もし性を論ずるなら、どのようなものを性というの
かを推究しなければならぬ。もし心を論ずるなら、どのようなもの
を心といふのかを推究しなければならぬ。これこそがとりもなおさ
ず物に格ることである。 劉砥録

〔注〕

(1)「如言性」以下 このような考え方は、卷一四、一〇八条、楊道
夫録で、「論語」の「学而時習之」や「有朋自遠方来友」を挙げて、「学」
や「時習」を一つ一つ考究しなければならないとするのと同じであ
る。

12条

窮理格物、如讀經看史、應接事物、理會箇是處、皆是格物。只是常
教此心存。莫教他閑沒勾當處。公且道如今不去學問時、此心頓放那處。
賀孫

〔校勘〕

- 「箇」 朝鮮古写本は、すべて「个」に作る。
- 「閑」 朝鮮整版本は「閒」に作る。
- 「閑沒勾當處」 朝鮮古写本は「閑没个勾當處」に作る。

〔訳〕

窮理格物は、經典を読み史書を読み、事物に接し応じて、(一)一つのことからの(二)これで正しいというところを理解し會得する、これらはすべて格物である。ただ常にこの心を保つようになさい。そいつを暇で無為にさせておくな。君、ためしに言ってみなさい、学問に向かわないその時には、この心はどこに置くのか。葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「只是常教此心存」 朱子学では涵養・居敬・存心と進学・致知・窮理とが工夫論において車の両輪の如く重視されるが、ここでは格物窮理が存心の工夫にもなることが説かれている。この点については以下を参照。『語類』卷一一、三条、周蓋卿録(Ⅰ 176)「人常讀書、庶幾可以管攝此心、使之常存。横渠有言。書所以維持此心。一時放下、則一時德性有懈。其何可廢。」なお『語類』卷一一四、三二条、潘時挙録(Ⅶ 176)、卷一一九、八条、黄義剛録(Ⅶ 287)参照。張載の語は『經学理窟』「義理」(『張載集』所収)
- (2) 「勾當」 仕事、役目。三浦國雄『朱子語類抄』二二九頁。
- (3) 「公」 二人称。君。
- (4) 「頓放」 置く。「安頓」に同じ。卷一四、九一条注(12)、一四七条注(3)参照。また、三浦國雄『朱子語類抄』一〇四頁。
- (5) 「那處」 どこ。「那」は「どの」「どんな」。

13条

格物、須是從切己處理會去。待自家者已定疊、然後漸漸推去、這便是能格物。 道夫

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物は、己に切なるところから取り組んで行かなければならない。自分の心が安定するのを待って、それから次第に推し抜けて行く。これこそ格物することができる。 楊道夫録

〔注〕

- (1) 「切己」 工夫を論じるのに盛んに用いられる。『語類』卷一八、三八条、廖德明録(Ⅱ 400)「且窮實理、令有切己工夫。若只泛窮天下萬物之理、不務切己、即是遺書所謂遊騎無所歸矣。」なお、「遊騎無所歸」は『二程遺書』卷七の、致知についての条の語。
- (2) 「定疊」 安定する。卷一四、一四三条注(10)参照。
- (3) 「能格物」 用例を挙げる。卷一四、一〇七条、廖德明録「大學須自格物入、格物從敬入最好。只敬、便能格物。」

14条

格物二字最好。物、謂事物也。須窮極事物之理到盡處、便有一箇是、一箇非、是底便行、非底便不行。凡自家身心上、皆須體驗得一箇是非。若講論文字、應接事物、各各體驗、漸漸推廣、地步自然寬闊。如曾子三省、只管如此體驗去。 德明

〔校勘〕

○「箇」 朝鮮古写本は、すべて「个」に作る。

〔訳〕

「格物」の二字は最もよい。物は、事物を言う。事物の理を極まり尽きるところまで窮めなければならぬ。そうすれば一つの是、一つの非があり、是なるものは行い、非なるものは行わない。およそ自分の心身においては、みな必ず一つの是非を身をもって検証しなくてはならない。書物を考究したり、事物に接し応じたり、それぞれ身をもって確かめ、次第に推し拡げれば、自分の地歩は自然に広々としてくる。曾子の三省のように、ひたすら身をもって検証せよ。 廖徳明録

〔注〕

(1) 「體驗」 繰り返し身をもって確かめる。『朱子語類』訳注(卷十 学四 読書法上 卷十一 学四 読書法下 興膳宏・木津祐子・齋藤希史訳注、四三頁)の卷一〇、三五条、林夔孫録(1-35)の注

に詳述されている。また、卷一四、九〇条、葉賀孫録に「將心體驗」とある。同条の注(4)も参照。

(2) 「地步」 地歩、足場。学問の階梯や進歩をこのような語をもって喩えた例に、卷一四、六条、金去偽録の「大學譬如買田契、論語如田畝闊狹去處、逐段子耕將去。」同、一〇条、潘時拳録の「如人起屋相似、須先打箇地盤。地盤既成、則可舉而行之矣。」などがある。
(3) 「曾子三省」 孔子の弟子曾參が一日に三度我が身を反省したことを。『論語』学而「曾子曰。吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。」

15条

文振問。物者、理之所在、人所必有而不能無者、何者爲切。曰。君臣父子兄弟夫婦朋友、皆人所不能無者。但學者須要窮格得盡。事父母、則當盡其孝、處兄弟、則當盡其友。如此之類、須是要見得盡。若有一毫不盡、便是窮格不至也。 人傑

〔校勘〕

○「文振問」 朝鮮古写本は「鄭文振問」に作る。
○「夫婦朋友」 「友」を万曆本、和刻本は「交」に作る。
○「學者」 朝鮮古写本は「學着」に作る。
○「窮」 万曆本、和刻本は前後それぞれ「窮」と「窮」に作る。
○「盡其友」 「友」を万曆本、和刻本は「交」に作る。

○「毫」成化本は「豪」に作る。

〔訳〕

鄭文振が問うた。「物というのは理のあるところであり、(その理とは)人が必ず具えていなくてはならないものですが、そのうちでも何が最も切実なものでしょうか。」(先生は)言われた。「君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友などの理は、すべて人にとってなくてはならないものであるが、ただ学ぶ者はこれらの理を窮め、それに格りきらないといけない。父母に仕える時は孝を尽くさなければならず、兄弟と交わる際には友を尽くさなければならぬ。このようなことは、すべて認識し尽くさなければならぬ。もし少しでも認識し尽くしていないところがあれば、それはつまり理を窮めてそれに至ることがまだ徹底していないことなのである。」万人傑録

〔注〕

(1)「文振」鄭南升、文振は字。陳榮捷『朱子門人』三四三頁。底本及び成化本、万曆本、和刻本の『朱子語録姓氏』は字を文相に作る。朝鮮整版本は「字文振」に作り、考異に「振一作桓」とする。『考亭淵源録』卷一四、『朱子実紀』卷八は字文振に作っている。

(2)「人所必有而不能無者」『論語或問』「述而第七」「蓋志、據、依、游、人心之所必有而不能無者。」「大学或問」「則夫外物之誘人、莫甚於飲食男女之欲、然推其本、則固亦莫非人之所當有而不能無者也。」
(3)「君臣父子兄弟夫婦朋友」『孟子』「滕文公」上「聖人有憂之、

使契為司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」

(4)「處兄弟則當盡其友」『尚書』「周書」「君陳」「王若曰、君陳、惟爾令德孝恭、惟孝友于兄弟、克施有政。」「書集伝」「言君陳有令德、事親孝、事上恭、惟其孝友於家、是以能施政於邦。」「論語」「為政」「或謂孔子曰、子奚不為政。子曰、書云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政、是亦為政、奚其為為政。」朱注「書、周書君陳篇。書云孝乎者、言書之言孝如此也。善兄弟曰友。書言君陳能孝於親、友於兄弟、又能推廣此心、以為一家之政。孔子引之、言如此則是亦為政矣、何必居位乃為為政乎。」

16条

格物、莫先於五品。 方子

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物にもっとも大切なのは五品(家庭内の五つの人間関係)である。
李方子録

〔注〕

(1) 「五品」『尚書』「虞書」「舜典」「帝曰、契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五教、在寬。」孔安国伝「五品謂五常。」孔穎達正義「品謂品秩。一家之内、尊卑之差、即父母兄弟子是也。教之義慈友恭孝、此事可常行、乃為五常耳。」

17条

格物、是窮得這事當如此、那事當如彼。如為人君、便當止於仁、為人臣、便當止於敬。又更上一著、便要窮究得為人君如何要止於仁、為人臣如何要止於敬、乃是。 銖

〔校勘〕

- 朝鮮古写本卷十五は本条を収録しない。
- 「窮」 万曆本、和刻本は「窮」に作る。
- 「著」 成化本、万曆本、和刻本は「着」に作る。
- 「為人君如何要止於仁」「爲」を和刻本の該箇所は識別できない。

〔訳〕

格物とは、このような場合はこういうふうにするべきであり、あのような場合はあのようにするべきである、ということ窮めることなのだ。たとえば主君である場合は、仁に止まるべきであり、臣下である場合は、敬に止まるべきである。更に一歩進んで、主君である場合はいか

にして仁に止まらなければならぬのか、臣下である場合はいかにして敬に止まらなければならぬのか、というところまでを窮めてこそ、初めて正しいやり方だと言えるのだ。 董銖録

〔注〕

(1) 「為人君、便當止於仁、為人臣、便當止於敬」『大学』伝三章「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝。為人父、止於慈。與國人交、止於信。」

(2) 「上一著」「二著」は一手。「上一著」は一手を進める、一歩を進める。前出の本巻一条に「第二著」「第三著」「第一著」「第三第四著」などの用例があるのを参照。

(3) 「如何要」 いかにして…しなければならぬのか。卷一四、一六六条、徐寓録に既出。

18条

格物者、格其孝、當考論語中許多論孝、格其忠、必將順其美、匡救其惡、不幸而仗節死義。古人愛物、而伐木亦有時、無一子不到處、無一物不被其澤、蓋緣是格物得盡、所以如此。 節

〔校勘〕

○「仗節死義」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「伏節死義」に作る。

〔訳〕

格物というのは、たとえば孝に至ろうとする時は、『論語』にある孝についてのたくさんの論説を考察しなければならず、忠に至ろうとする時は、必ず「主君の良い所は助成し、主君の悪いところは矯正して制止し」なければならず、最悪の場合には節操を守って正義のために死ぬのも辞さないのだ。古人は物を愛し、定められた時期にしか林木を伐採しない。その愛は至らないところがなく、その恩恵を受けない物は一つとしてなかったのは、彼らが格物を徹底的に成し遂げたから、こういうことができたのだ。 甘節録

〔注〕

(1) 「將順其美、匡救其惡」 『孝經』「事君章」第一七「子曰、君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡。」 「將順其美」 玄宗注「將、行也。君有美善、則順而行之。」 「匡救其惡」 玄宗注「匡、正也。救、止也。君有過惡、則正而止之。」

(2) 「仗節死義」 『後漢書』卷一八「吳漢伝」「賊衆雖多、皆劫掠羣盜、勝不相讓、敗不相救、非有仗節死義者也。」 なお「仗節死義」に先だつて「守節死義」、「伏節死難」および「伏節死義」などの用例も存在する。『史記』卷一二〇「汲黯伝」「淮南王謀反、憚黯、曰、好直諫、守節死義、難惑以非。」「春秋繁露」「天地之行」第七八「伏節死難。不惜其命、所以救窮也。」「漢書」卷八六「王嘉伝」「吏士臨難、莫肯伏節死義。」

(3) 「愛物」 『孟子』「尽心」上「孟子曰、君子之於物也、愛之而弗仁、

於民也、仁之而弗親、親親而仁民、仁民而愛物。」 朱注「物、謂禽獸草木。愛、謂取之有時、愛之有節。」

(4) 「伐木亦有時」 『周礼』地官「山虞」「山虞掌山林之政令、物為之厲、而為之守禁。仲冬、斬陽木、仲夏、斬陰木、凡服耜、斬季材、以時入之、令萬民時、斬材有期日。」「礼記」「月令」「孟春」「禁止伐木。毋覆巢、毋殺孩蟲。」「礼記」「月令」「仲冬」「日短至、則伐木、取竹箭。」

(5) 「被其澤」 『孟子』「離婁」上「今有仁心仁聞而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也。」

19条

格物、須真見得決定是如此。爲子豈不知是要孝、爲臣豈不知是要忠。人皆知得是如此。然須當真見得子決定是合當孝、臣決定是合當忠、決定如此做、始得。 寓

〔校勘〕

○「寓」 朝鮮古写本は「淳」○按寓録同」に作る。

〔訳〕

物に至ろうとする時は、是が非でもそのようにするのだということ、切実に知らねばならない。子供は（親に）孝であるべきだと知らないことがあるのか。臣下は（主君に）忠であるべきだと知らないこ

とがあるうか。しかし、子供は是非でも孝でなければならず、臣下は是非でも忠でなければならず、是が非でもそのように実践しなければならぬのだということを、切実に認識しなければならぬのだ。

徐寓録

〔注〕

(1) 「真見得」 確実に(切実に) ……を認識する。

(2) 「決定是」 きつと、必ず、是が非でも。

20条

如今説格物、只晨起開目時、便有四件在這裏、不用外尋、仁義禮智是也。如才方開門時、便有四人在門裏。 側

〔校勘〕

○「側」 成化本、万曆本、呂留良本、伝経堂本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「側」に作る。

〔訳〕

今、格物について語るならば、たとえば朝起きて目を覚ます時に、すでに四つの理が自分自身に有り、他の所に探し求める必要がない。それはつまり仁、義、礼、智である。これはあたかも、門を開けたとたん、四人の人間がもう既に門の中にいた、というようなものである。

沈側録

〔注〕

(1) 「不用外尋」 『景德伝灯録』卷三〇「銘記箴歌」「慕道真士、自觀自心、知佛在內、不向外尋、即心即佛、即佛即心。」

(2) 「仁義禮智」 『孟子』「公孫丑」上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。」「告子」上「惻隱之心、人皆有之。羞惡之心、人皆有之。恭敬之心、人皆有之。是非之心、人皆有之。惻隱之心、仁也。羞惡之心、義也。恭敬之心、禮也。是非之心、智也。仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也、弗思耳矣。」

(3) 「才方」「才」と同じで、…したばかり。

21条

子淵説。格物先從身上格去、如仁義禮智發而爲惻隱、羞惡、辭遜、是非、須從身上體察、常常守得在這裏、始得。曰。人之所以爲人、只是這四件、須自認取意思是如何。所謂惻隱者、是什麼意思。且如赤子入井、一井如彼深峻、入者必死、而赤子將入焉。自家見之、此心還是如何。有一事不善、在自家身上做出、這裏定是可羞、在別人做出、這裏定是惡他。利之所不當得、或雖當得而吾心有所未安、便要謙遜辭避、不敢當之。以至等閑禮數、人之施於己者、或過其分、便要辭將去、遜於別人、定是如此。事事物物上各有箇是、有箇非、是底自家心裏定道是、

非底自家心裏定道非。就事物上看、是底定是非、非底定是非。到得所以是之、所以非之、却只在自家。此四者、人人有之、同得於天者、不待問別人假借。堯舜之所以爲堯舜、也只是這四箇。桀紂本來亦有這四箇。如今若認得這四箇分曉、方可以理會別道理。只是孝有多少樣、有如此爲孝、如此而爲不孝。忠固是忠、有如此爲忠、又有如此而不喚作忠、一一都著斟酌理會過。 賀孫

〔校勘〕

- 「禮」 朝鮮古写本は「礼」に作る。
- 「發而爲惻隱羞惡辭遜是非」 「辭」を成化本は「辭」に作る。万曆本、和刻本は「辭」に作る。朝鮮整版本は「辭」に作る。
- 「常常守得在這裏」 朝鮮古写本は「常常守得在這裏」に作る。
- 「深峻」 「深」を呂留良本は「澁」に作る。「澁」は「深」の古字。
- 「便要謙遜辭避」 「便要」を成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「便自」に作り、万曆本、和刻本は「便是」に作る。劉氏伝経堂叢書本卷末附載「朱子語類正譌」に「便要謙 原作是、據周本改。」とある。
- 「便要謙遜辭避」 「辭」を万曆本、和刻本は「辭」に作る。朝鮮整版本は「辭」に作る。
- 「等閑禮數」の「閑」 朝鮮整版本は「閒」に作る。
- 「便要辭將去」の「辭」 万曆本、和刻本は「辭」に作る。朝鮮整版本は「辭」に作る。
- 「箇」 朝鮮古写本は「个」に作る。
- 「却」 伝経堂本は「卻」に作る。

○「同得於天者」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「同得於天」に作る。万曆本、和刻本は「同得於天下」に作る。

○「著」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。

〔訳〕

林子淵が述べた。「物に至ろうとする時は、まずは我が身に即して至るべきです。たとえば仁、義、礼、智がそれぞれ惻隱、羞惡、辭遜、是非として立ち現れてくるような場合についても、是非とも我が身に即してそれを体得し、常に（仁、義、礼、智を）しっかりと保持してこそ、それではじめてよいのですね。」（先生は）おっしゃった。「人間の人間である所以も、ただこの四つ（仁、義、礼、智）にある。その意義はどのようなものなのかを、是非とも確かめなければならぬ。いわゆる惻隱というのは、どういうことなのか。たとえば赤ん坊が井戸に落ちそうだとしよう。井戸はかくも深くて険しく、落ちた者は必ず命を落とす。そのような井戸に、赤ん坊が今にも落ちようとしているのだ。それを見たら、自分自身の気持ちはどうなるのか。何かの悪事があると、それを自分自身が行った場合、この心の中で必ずそれを恥ずかしく思うだろう。それを他の人が行った場合、この心の中で必ずその人を悪むだろう。受け取るべきではない利得、或は受け取ってもいいけれど（もし受け取れば）自分の心が落ち着かないような利得は、謙讓し辭退して受け取らない。どうでもいいような些細な礼節でも、人が自分に対して行った場合に、それが自分にとって分不相応であるならば、それを辭退し、よりふさわしい人に譲るなど、きつと

そのようにすべきなのだ。事事物物には必ず是があり非がある。是に對しては自分の心の中でも必ず是だと叫び、非に對しては自分の心の中でも必ず非だと叫ぶ。事物に即して見るならば、是は必ず是なのであり、非は必ず非なのである。しかしなぜそれを是とするのか、なぜそれを非とするのかというと、その判断の根拠はただ自分自身にあるのだ。仁、義、礼、智の四つは人々が備えており、皆が同じく天から与えられているものであり、誰かから借りてくる必要がない。堯、舜の堯、舜である所以も、ただこの四つであり、桀、紂もともとこの四つを備えていた。今もしこの四つについて明瞭に認識したならば、その上でこそはじめて他の道理にも取り組むことができるのだ。たとえ孝にしても、そのあり方は様々であつて、このようにすれば孝になる場合もあれば、同じようにしても不孝になる場合もあるのだ。忠であることに変わりはなくとも、このようにすれば忠になる場合もあれば、同じ事をして忠とは言えない場合もあるのだ。このようなさまざまな状況は、それぞれ考えを加え、一つ一つ探究しなければならぬ。」 葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「子淵」 林子淵。陳榮捷『朱子門人』一四四頁。
 (2) 「仁義禮智發而爲惻隱、羞惡、辭遜、是非」 本卷二〇条注(2)を参照。諸本が「辭讓」を「辭遜」に作るのは、英宗の実父趙允讓の諱を避けた結果であると思われる。卷一四、八二条、黄卓録の校勘を参照。

- (3) 「人之所以爲人」 『礼記』「冠義」 「凡人之所以爲人者、禮義也。」
 (4) 「須自認取意思是如何」 「須自」は「須」に同じ。卷二二、一四三条、劉砥録(I 218) 「且如涵養致知、亦何所始。但學者須自截從一處做去。」
 (5) 「認取」 認識する。卷三〇、三五条、葉賀孫録(III 111) 「如看這一章、只認取不遷怒、不貳過意思是如何、自家合如何、便是會做工夫。」
 (6) 「赤子入井」 『孟子』「公孫丑」上 「所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。」
 (7) 「有如此爲孝、如此而爲不孝」 卷一四、八一一条、葉賀孫録に「如博弈好飲酒、不顧父母之養、是不孝。到能昏定晨省、冬溫夏清、可爲孝。然而從父之令、今看孔子說、却是不孝。須是知父之命當從、也有不可從處。蓋與其得罪於鄉黨州閭、寧熟諫。論父母於道、方是孝。」とある。
 (8) 「一一都著斟酌理會過」 「著」は着手する、つける、行う。卷一四、三〇条、葉賀孫録に既出。

22条

問。格物最難。日用間應事處、平直者却易見。如交錯疑似處、要如此則彼礙、要如彼則此礙、不審何以窮之。曰。如何一頓便要格得恁地。且要見得大綱。且看箇大胚模是恁地、方就裏面旋旋做細。如樹、初間且先斫倒在這裏、逐旋去皮、方始出細。若難曉易曉底、一齊都要理會得、也不解恁地。但不失了大綱、理會一重了、裏面又見一重、一重了又見

一重。以事之詳略言、理會一件又一件、以理之深淺言、理會一重又一重。只管理會、須有極盡時。博學之、審問之、慎思之、明辨之、成四節次第、恁地方是。 寓

〔校勘〕

○「却」 伝経堂本は「卻」に作る。

○「窮」 万曆本、和刻本は「窟」に作る。

○「箇」 朝鮮古写本は「个」に作る。

○「慎思之」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「謹思之」に作る。「慎思」を「謹思」に作るのは南宋孝宗の諱「昚」を忌避してのことである。 卷一四、一六九条参照。

〔訳〕

（ある人が）問うた。「格物は最も難しいです。日常において事に応じるとき、通常の事柄であれば、いかに応じるべきかは分かりやすいですが、入り組んでいて紛らわしい事柄ならば、このように応じようとすれば、あのような妨げが生じ、あのように応じようとすれば、またこのような妨げが生じます。このような場合は、いかに理を窮めればよいでしょうか。（先生は）おっしゃった。「どうして一回きりでもうそんなふうに至ろうとするのか。まずは（格物の）大筋を把握しなければならぬ。全体の大きな枠組みがこのようなものであると捉えてこそ、その上でその枠に即して少しずつ細かいところに対処していくのだ。たとえば木の場合は、まずはしっかりと切り倒して、そし

て一枚一枚皮を剥いでこそ、はじめて細く整った材木ができあがるのだ。もし難しい道理も、簡単な道理も、一遍に把握しようとしたら、そんなことはとても無理だ。ただ大筋を失わずに、一重の道理を把握したら、さらにその奥にある一重の道理が見えてきて、一重を把握したらさらに一重が見えてくる。事柄の詳略で言えば、略から詳へ一件一件対処して行く。道理の深淺で言えば、浅い道理から深い道理へ一重一重把握していく。こういうふうにはたすら把握していけば、必ずすべての道理を把握し尽した時がやって来る。広く学び、詳しく尋ね、入念に考え、はつきりと弁別するというのも、四段階の手順を成しているのであって、そのように（手順を踏んで段階的に）やっていってこそよいのだ。」 徐寓録

〔注〕

（1）「一頓」 もとは一回の食事のことだが、ここでは「一頓便：」で「一回きりでもう：をやりきる」という意味合いで使われている。もう一つ例を挙げれば、卷一二四、一三条、万人傑録（VIII 2970）に「陸子靜説良知良能、四端等處、且成片舉似經語、不可謂不是。但説人便能如此、不假修為存養、此却不得。：又如脾胃傷弱、不能飲食之人、却硬要將飯將肉塞入他口、不問他喫得與喫不得。若是一頓便理會得、亦豈不好。然非生知安行者、豈有此理。便是生知安行、也須用學。」とある。

（2）「大坯模」 卷一四、六条、金去偽録に既出の「大坯模」と同義の語であろう。「鑄型」、「大枠」、「荒削りの骨格」。

(3) 「旋旋」 少しずつ。

(4) 「逐旋」 逐一。本巻第四条に既出。

(5) 「不解」 できない、無理である。「解」は「会」と同じく「〜でさる」。巻一四、二〇条、黄義剛録に既出。

(6) 「理會一重了、裏面又見一重」 巻一〇、一一條、寶從周録（I 162）「聖人言語、一重又一重、須入深去看。若只要皮膚、便有差錯、須深沉方有得。」同、一二條、沈備録（I 163）「人看文字、只看得一重、更不去討他第二重。」同、八〇條、輔廣録（I 172）「為學讀書、須是耐煩細意去理會、切不可粗心。若曰何必讀書、自有簡捷徑法、便是快人底深坑也。未見道理時、恰如數重物色包裹在裏許、無緣可以便見得。須是今日去了一重、又見得一重。明日又去了一重、又見得一重。去盡皮、方見肉。去盡肉、方見骨。去盡骨、方見髓。使粗心大氣不得。」

(7) 「博學之、審問之、慎思之、明辨之」 『中庸章句』二〇章「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」

23条

或問。格物は學者始入道處、當如何著力。曰。遇事接物之間、各須一一去理會、始得。不成是精底去理會、粗底又放過了。大底去理會、小底又不問了。如此終是有欠闕。但隨事遇物、皆一一去窮極、自然分明。又問。世間有一種小有才底人、於事物上亦能考究得仔細、如何却無益於己。曰。他理會底、聖人亦理會、但他理會底意思不是。彼所爲者、

他欲人説、他人理會不得者、我理會得、他人不能者、我能之、却不切己也。又曰。文武之道未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉。聖人何事不理會、但是與人自不同。 祖道

〔校勘〕

- 「著」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。
- 「精底去理會」 「會」を万曆本、和刻本は「会」に作る。
- 「大底去理會」 「會」を万曆本、和刻本は「会」に作る。
- 「欠闕」 朝鮮古写本は「欠欵」に作る。
- 「窮」 万曆本、和刻本は「窮」に作る。
- 「仔細」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「子細」に作る。
- 「却」 伝経堂本は「卻」に作る。
- 「無」 万曆本、和刻本は「无」に作る。
- 「他理會底」 「會」を万曆本、和刻本は「会」に作る。
- 「聖人亦理會」 「會」を万曆本、和刻本は「会」に作る。
- 「他欲人説」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「但欲人説」に作る。

〔訳〕

ある人が問うた。「格物は学ぶ者が道に入ろうとする時の第一の手順ですが、ここではいかに力を入れるべきでしょうか。」（先生は）おっしゃった。「事物と出会ってそれに応じる際には、是非ともそれぞれ

中の道理を一つ一つ探究してこそよいのだ。まさか、精微な道理は探究するが疎略な道理は放置する、重要な道理は探究するが些細な道理は不問に付す、等ということがあってよいはずが有ろうか。そんなことでは結局のところ、遺漏を生ずるのだ。ただ事物と遭遇する際に、その全てについて一つ一つと道理を窮めていけば、自ずとはつきりとなってくる時があるのだ。」また問うた。「世の中には一種の少しく才能のある人間がいて、彼らもまた事物において対処法を詳しく探究することができると、それが自分自身に無益であるのはなぜでしょうか。」(先生は)おっしゃった。「彼らが探究するものを、聖人もまた探究するが、ただし彼らは探究するその動機が間違っている。彼らがやっていることはと言えば、ただ、他の人には取り組めないことを自分たちは取り組めるのだ、他の人にできないことを自分たちはできるのだ、と他人に言われたいだけなのであり、その取り組みは自分自身にとつて何ら切実なものではないからだ。」またおっしゃった。「文王、武王の道は、なお地を払っておらず、まだ人々に覚えられているのだ。賢しい者はその重要な部分を覚えていられ、賢しくない者もそのさほど重要ではない部分を覚えていられるから、文武の道は確乎として存在するのである。聖人には探究しない事柄がないというが、なぜ探究するのかということとは、ほかの人々とおのずから違ふのだ。」曾祖道録

〔注〕

- (1) 「不成」 まさか…ではあるまい。卷一四、二四條、黃營録に既出。
(2) 「文武之道未墜於地」 『論語』「子張」「衛公孫朝問於子貢曰、仲

尼焉學。子貢曰、文武之道未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有。」

24條

傳問。而今格物、不知可以就吾心之發見理會得否。曰。公依舊是要安排。而今只且就事物上格去。如讀書、便就文字上格。聽人說話、便就說話上格。接物、便就接物上格。精粗大小、都要格它。久後會通、粗底便是精、小底便是大、這便是理之一本處。

而今只管要從發見處理會。且如見赤子入井、便有怵惕惻隱之心、這箇便是發了、更如何理會。若須待它自然發了、方理會它、一年都能理會得多少。聖賢不是教人去黑泮泮裏守著。而今且大著心胸、大開著門、端身正坐以觀事物之來、便格它。 夔孫

〔校勘〕

- 朝鮮古写本卷一五は本條を収録しない。
○「黑泮泮裏守著」以下、本條に三出する「著」を成化本、万曆本、和刻本は全て「着」に作る。
○「心胸」成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「胸」を「胷」に作る。

〔訳〕

傳がお尋ねした。「今、格物を行うには、自己の心の発現したとこ

るに即して取り組むべきなのでしようか。」先生。「君は相変わらず余計な計らいをしようとしている。今はただ、まずは事物に即して格いたつていくことだ。例えば読書する時は、その文字に即して格る。人の話を聴く時には、その話に即して格る。事物に対応する時には、その事物に対応するという場に即して格る。(理の)精粗大小、その全てに格らないといけない。(そのようにして格物に取り組んでいけば)やがては全てに貫通することができ、(理の)粗なるものも精なるものと一つになり、小なるものも大なるものと一つになる、これがとりもなおさず理の一本たる所以だ。

今、(君は)専ら心の発現した場に即して(格物に)取り組もうとしている。しかし例えば赤ん坊が井戸に落ちそうなのを見れば、すぐに怵惕惻隱の心を生ずる、これが発現することなのであって、それ以上いったい何に取り組もうというのか。もしも必ず心が自然と発現するのを待つて、それではじめてその格物に取り組むのだ、というのであれば、まる一年の間にいったいどれほど(格物に)取り組めるといいのか。聖賢は決して人に対してそんな頑迷な態度を固守するようには教えていない。今はとりあえず心胸を大きく広げ、大いに門を開き、身を整え正坐して事物のやってくるのを観察し、そうして(その事物に即して)格物していくのだ。林夔孫録

〔注〕

(1)「傳問」傳姓の門人は複数存在するので、『朱子門人』頁二二八以下)、特定し難い。ただ本条と同じく林夔孫録に「傳敬子説明明德」

で始まる条があり(卷一四、九一条)、傳定、字敬子である可能性のあることを指摘しておく。

(2)「就吾心之發見理會」「發見」とは、内なる理が目に見える形で顕現発現すること。例えば仁が惻隱の心として発現する、等。卷一四、三八条、注(7)参照。なお自己の心の発現に即して格物を行うという実践方法に対して本条では否定的見解が示されているが、逆に肯定的に言及される例もある。『語類』卷一八、五三条、廖德明録(II 402~403)「若今日學者所謂格物、却無一箇端緒、只似尋物去格。如齊宣王因見牛而發不忍之心、此蓋端緒也、便就此擴充、直到無一物不被其澤、方是。致與格、只是推致窮格到盡處。…須是因此端緒、從而窮格之。未見端倪發見之時、且得恭敬涵養。有箇端倪發見、直是窮格去。亦不是鑿空尋事物去格也。又曰。涵養於未發見之先、窮格於已發見之後。」格物の対象を心の発現処に限定すると工夫に遺漏が生じ(「一年都能理會得多少」、かといって自己の心を離れて外界の事物のみを格物の対象とすれば切己の工夫から遠ざかってしまう(「鑿空尋事物去格」、というのが朱熹の意図であろう)。

(3)「依舊」「依然として、やっぱり。」「(三浦國雄『朱子語類抄』頁四五九)。卷一四、一五八条に既出。

(4)「安排」「人為の賢しらによってあれこれ処置することをいう。」「(三浦國雄『朱子語類抄』頁三九八)。卷一四、一六条、三八条、一四五条に既出。

(5)「精粗大小」格物の対象としての「精粗大小」に関する議論は

前条にも見えるが、その代表的な用例としては以下を参照。『大学章句』「伝五章」「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到。」この場合の「表・粗」とは具体的個別的な道理、「所当然之則」を、「裏・精」とはより統括的・大綱的な道理、「所以然之故」を、それぞれ指す。『語類』卷一六、五四条、葉賀孫録(Ⅱ 324)「理固自有表裏精粗、人見得亦自有高低淺深。有人只理會得下面許多、都不見得上面一截、這喚做知得表、知得粗。又有人合下便看得大體、都不就中間細下工夫、這喚做知得裏、知得精。」同、五五条、董銖録(Ⅱ 325)「須是表裏精粗無不到。有一種人只就皮殼上做工夫、却於理之所以然者全無是處。又有一種人思慮向裏去、又嫌眼前道理粗、於事物上都不理會。」同、五一条、黃義剛録(Ⅱ 323)「問。表裏精粗無不到。曰。表便是外面理會得底。裏便是就自家身上至親至切、至隱至密、貼骨貼肉處。」卷一八、九四条、輔廣録(Ⅱ 314)「凡事固有所當然而不容已者、然又當求其所以然者何故。…今之學者、但止見一邊。…且如為忠為孝為仁為義、但只據眼前理會得箇皮膚便休、都不會理會得那徹心徹髓處。」

(6)「會通」個々の理が有機的結びつきを持って全体が一理で貫かれること。「貫通」に同じ。『語類』卷一八、九条、楊道夫録(Ⅱ 392)「曰。格物最是難事。如何盡格得。曰。程子謂。今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後豁然有貫通處。某嘗謂、他此語便是真實做工夫來。他也不說格一件後會通、也不說盡格得天下物理後方始通。只云。積習既多、然後豁然有箇貫通處。」

(7)「理之一本處」「理一分殊」の理一に相当する。『論語』「里仁」第四「夫子之道、忠恕而已矣」に対する朱注に「蓋至誠無息者、道之體也、萬殊之所以一本也。萬物各得其所者、道之用也、一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實、可見矣。」理一分殊とは、万物がそれぞれに種々の理を備えながら(万殊)、しかも全体を通して一理である(理一)ということ。『語類』卷一、八条、林夔孫録(Ⅰ 2)「問理與氣。曰。伊川說得好。曰。理一分殊。合天地萬物而言、只是一箇理。及在人、則又各自有一箇理。」

(8)「赤子入井、便有怵惕惻隱之心」『孟子』「公孫丑」上。「怵惕惻隱」は、はっと驚き傷み哀れむこと。卷一四、三八条、七八条等に既出。

(9)「若須待它自然發了、方理會它」「須::方」は「必ず::して、それではじめて」なお「須(是)::始得」の用例は卷一四、一二条に既出。

(10)「黑淬淬」「黑淬淬地」に同じ。真つ黒、真つ暗、暗黒、暗愚、頑迷等の意を表す。『語類』卷一、三一条、沈僩録(Ⅰ 6)「天明、則日月不明。天無明。夜半黑淬淬地、天之正色。」『語類』卷四、九六条、沈僩録(Ⅰ 80~81)「只是當時吾道黑淬淬地、只有些章句詞章之學。」『語類』卷四二、二一条、葉賀孫録「此前面說敬而不見得。此便是見得底意思、便是見得敬之氣象功效恁地。若不見得、即黑淬淬地守一箇敬、也不濟事。」

(11)「大著心胸、大開著門」「著」は動作の持続を著す助字。『語類』卷一一、三四条、李儒用録(Ⅰ 18)「觀書、須靜著心、寬著意思、沈潛反覆、將久自會曉得去。」興膳宏・木津祐子・齋藤希史『朱子

語類訳注 卷十〜十二 頁一七〇参照。

25条

世間之物、無不有理、皆須格過。古人自幼便識其具。且如事君事親之禮、鐘鼓鏗鏘之節、進退揖遜之儀、皆目熟其事、躬親其禮。及其長也、不過只是窮此理、因而漸及於天地鬼神日月陰陽草木鳥獸之理、所以用工也易。

今人皆無此等禮數可以講習、只靠先聖遺經自去推究。所以要人格物主敬、便將此去體會古人道理、循而行之。如事親孝、自家既知所以孝、便將此孝、心依古禮而行之。事君敬、便將此敬心依聖經所說之禮而行之。一一須要窮過、自然浹洽貫通。

如論語一書、當時門人弟子記聖人言行、動容周旋、揖遜進退、至為纖悉。如鄉黨一篇、可見當時此等禮數皆在。至孟子時、則漸已放棄。如孟子一書、其說已寬、亦有但論其大理而已。 個

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五是本条を収録しない。

○「且如事君事親之禮」成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「事君事親」を「事親事君」に作る。

○「鐘鼓鏗鏘之節」「鐘鼓」を成化本、万曆本、和刻本は「鍾鼓」に、朝鮮整版本は「鍾鼓」に作る。

○「禮數」本文中に二出する「禮數」の「數」を 万曆本、和刻本

は「數」に作る。

○「只靠先聖遺經」「聖經所說」万曆本、和刻本は「經」を「経」に作る。

〔訳〕

世間の物で、理を備えないものはないから、その全てに格^{いた}つておくべきだ。古人は幼い時からそれらをつぶさに知っていた。例えば君に事え親に事える際の礼、鐘や太鼓を高らかに奏でる際のリズム、進んだり退いたり会釈したり譲ったり威儀など、全てその事柄を見慣れていたし、その礼を自ら行ってもいた。長ずるに及んでも、ただそれらの理を窮め、そこから更に天地鬼神・日月陰陽・草木鳥獸の理へと少しずつ（窮理の対象を）広げていくに過ぎなかつたので、だからその実践も容易であつたのだ。

今の人は皆、これらの礼節について学んだり習つたりする機会もなく、ただ先聖の遺された経書を頼りに自ら推測講究する他はない。だから格物と主敬の（両方の）工夫が必要とされるのであつて、それらの実践を通して古人の道理を体得理解し、その道理に従つてこれを実地に行わねばならないのだ。例えば親に事えるには孝という場合、孝はいかにあるべきかを既に知つたならば、その孝の心を、古礼に基づき実地に実践するのだ。君に事えるに敬という場合、その敬の心を、聖人の経書の教えに基づいて実地に実践するのだ。そのようにして必ずその一つ一つについて窮めていくべきなのであつて、そうすれば自ずと（窮めた理が）自分の（心身の）隅々にまでしみ渡り行き渡るよ

うになる。

例えば『論語』という書物は、当時の門人弟子が聖人（孔子）の言行を書き記したものであって、その動作・容儀・応対、会釈したり譲ったり進んだり退いたり様子の様子について、実に繊細詳細に描写している。「郷党」の一篇など、当時それらの礼節が全て現に存在していたことがわかるのだ。孟子の時代になると、（それらの礼節は）次第にうち捨てられていった。（だから）『孟子』という書物は、（礼節に関する記述が厳密ではなく）緩やかであり、専ら大枠の道理を説いているに過ぎないという面がある。 沈憫録

〔注〕

(1) 「皆須格過」 この「過」は「皆」と呼応し、動作がその対象の全てに及ぶ語気を示す。次の例における「過」は逐一と呼応している。『語類』卷一〇、八三条、李方子録（INT3）「又曰。讀書者譬如觀此屋。若在外面見有此屋、便謂見了、即無緣識得。須是入去裏面、逐一看過、是幾多間架、幾多窗櫺。看了一遍、又重重看過、一齊記得、方是。」

(2) 「鐘鼓鏗鏘」 『礼記』「樂記」「鐘聲鏗」孔穎達疏「鐘聲鏗者、言金鐘之聲、鏗鏗然矣。」後漢書「卷四〇下「班固」太師秦樂、陳金石、布絲竹、鐘鼓鏗鏘、管絃擘攄。」注「鏗音苦耕反、鏘音楚庚反。擘攄、盛貌也、攄音育。」『文選』卷一、班固「東都賦」は「鐘鼓鏗鏘」に作る。

(3) 「進退揖讓」 『礼記』「仲尼燕居」「若無禮、則手足無所錯、耳目

無所加、進退揖讓無所制。」濮王趙允讓（英宗父）の諱を避けて「讓」を「遜」としたのである。なお卷一四、八二条の「如惻隱羞惡辭讓是非」に対する校勘記を参照。

(4) 「皆目熟其事、躬親其禮」 古人は小学の実践を通してこれらの事柄に慣れ親しんでいた、という趣旨。

(5) 「講習」講議研習。『易経』「兌」象曰、麗澤、兌。君子以朋友講習。」

(6) 「今人皆無此等禮數可以講習、∴所以要人格物主敬」 今は小学という学習課程が存在しないから、敬によってその欠を補う必要がある、という趣旨。卷一四、一九条の「今人不會做得小學工夫、一旦學大學、是以無下手處。今且當自持敬始、使端慤純一靜專、然後能致知格物。」及びその注を参照。

(7) 「體會」 単に知識として理解するのではなく、身を以て体験的に理解すること。一四条の「體驗」、二一条の「體察」と共通の語気を含む。『語類』卷五、六一條、余大雅録（INT3）「却是漢儒解天命之謂性、云木神仁、金神義等語、却有意思、非苟言者。學者要體會親切。」（ここでの「漢儒」は『礼記』「中庸」の鄭玄注）

(8) 「一一須要窮過」 この「過」も「一一」と呼応し、動作が対象の全てに及ぶ語気を示す。

(9) 「浹洽貫通」「浹洽」は道理などが身心にすつきりしみこむこと。卷一四、五条に既出。「貫通」はここでは、隅々にまで行き渡ること。

(10) 「動容周旋」 『孟子』「尽心」下「動容周旋中禮者、盛德之至也。」

(11) 「如鄉黨一篇」「郷党」が孔子の挙措を門人が詳細に描写したも

のであることについては、以下にも言及がある。『語類』卷三七、一条、湯泳録（Ⅲ 386）「郷黨記聖人動容周旋、無不中禮。」同、三条、記録者名欠（Ⅲ 391）「郷黨一篇、自天命之謂性至道不可須臾離也、皆在裏面。許多道理、皆自聖人身上迸出來。惟聖人做得甚分曉、故門人見之熟、是以紀之詳也。」

(12)「亦有但論其大理而已」『論語』の教えが個別的具体的であるのに対して『孟子』の教えは大綱的であるという対比に関しては、以下を参照。『語類』卷一九、一二条、程端蒙録（Ⅱ 456）「孟子教人、多言理義大體。孔子則就切實做工夫處教人。」

26条

問竇從周。曾看格物一段否。因言、聖人只說格物二字、便是要人就事物上理會。且自一念之微、以至事事物物、若靜若動、凡居處飲食言語、無不是事、無不各有箇天理人欲。須是逐一驗過。雖在靜處坐、亦須驗箇敬肆。敬便是天理、肆便是人欲。如居處、便須驗得恭與不恭。執事、便須驗得敬與不敬。

有一般人專要就寂然不動上理會、及其應事、却七顛八倒、到了又牽動他寂然底。又有人專要理會事、却於根本上全無工夫。須是徹上徹下、表裏洞徹。如居仁、便自能由義。由義、便是居仁。敬以直内、便能義以方外、能義以方外、便是敬以直内。 徳明

〔校勘〕

○「問竇從周」朝鮮古写本は「問」の上に「先生」の二字有り。

○「無不各有箇天理人欲」「亦須驗箇敬肆」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「如居處」朝鮮古写本は、以下「便須驗得恭與不恭執事」の十文字を欠く。

○「能義以方外、便是敬以直内」朝鮮古写本は「能」字を欠く。

〔訳〕

（先生が）竇從周にお尋ねになった。「格物の一段は読んだことがあるか。」そのついでに言われた。「聖人はただ格物の二文字を説いたに過ぎないが、それはつまり、事物に即して取り組むことを我々に求めておられるのだ。例えば、一念の萌しという微細なものから事事物物に至るまで、静であれ動であれ、家にいたり飲食したり話をしたり、その全てがその事（＝格物の対象としての事物）でないものはなく、その各々に天理と人欲（の岐路）が含まれているのだ。それらは是非とも逐一、実地に点検していかなねばならない。静かな所に坐っている場合でさえ、その敬か放恣かを点検せねばならない。敬ならばそれは天理であり、放恣ならばそれは人欲である。家にいる場合でも、その恭か不恭かを点検せねばならない。事柄を執り行う場合でも、その敬か不敬かを点検せねばならない。

ある種の人は専ら寂然不動のところ（格物に）取り組もうとし、いざ何かの事態に対処せねばならぬいう段になると右往左往するばかり

りで、結局のところ、かの寂然たるものをもかき乱してしまう。またある人は専ら事物に即して（格物に）取り組もうとし、根本のところには全く工夫を欠いている。（この両者はどちらもだめなのであって）是非とも上下双方に通徹し、表裏あわせて洞徹せねばならない。（その徹上徹下、表裏洞徹のあり方とは）例えば仁に身を置けば自ずと義に拠って行動することができるし、義に拠って行動しているならば、それは取りも直さず仁に身を置くことでもある。敬によって内面を直せば、自ずと義によって外面を方正にすることができるし、義によって外面を方正にすることができれば、それは取りも直さず敬によって内面を直すことでもある。 廖德明録

〔注〕

- (1) 「竇從周」竇從周、字文卿。『朱子語錄姓氏』所収。
(2) 「須是逐一驗過」「過」は「逐一」と呼応し、動作が対象の全てに及ぶ語気を表す。前条参照。
(3) 「敬肆」「敬」は当面している事柄に対して一意専心に取り組むこと。卷一四、一九条、注(3)参照。「肆」は放恣、放縱。『胡宏集』「知言」「復義」「天理存亡、在敬肆之間爾。」周敦頤『太極図説』「君子修之吉、小人悖之凶」に対する朱熹『太極図説解』「修之悖之、亦在乎敬肆之間而已矣。」なお卷一四、一〇七条にも「提撕便敬、昏倦便是肆、肆便不敬。」とある。
(4) 「居處」「執事」「論語」「子路」「樊遲問仁。子曰。居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也。」

(5) 「有一般人」「一般」は「ある種の」「一種の」。卷一四、二五条に既出。

(6) 「寂然不動」『易経』「繫辭上伝」「易、無思也、無為也。寂然不動、感而遂通天下之故。」朱熹『周易本義』に「寂然者、感之體。感通者、寂之用。」とあるように、「寂然——体、感通——用」という対概念を構成する。寂然不動は外物と接触しない時の、心の静謐な状態。下文の「應事」と対を為す。

(7) 「七顛八倒」混乱を極めること。卷一四、一六五条に既出。

(8) 「到了」結局のところ、畢竟するに、とどのつまり。『詩詞曲語辭匯釈』卷三「到了、猶云到底也、畢竟也。」

(9) 「牽動」引き動かす、呼び覚ます、触発する。『語類』卷一五、一一六条、記録者名欠(I 305)「或問。意者心之所發、如何先誠其意。曰。小底却會牽動了大底。心之所以不正、只是私意牽去。意才實、心便自正。」なお『朱子語類考文解義』はこの箇所に対して「應事失當、則所謂寂然者、亦隨而散亂。是動不能救其靜也。」との解釈を施している。

(10) 「徹上徹下」最上端から最下端まで。一辺に偏ることなく、全てを包括網羅して遺漏がないこと。『語類』卷七、一一一条、葉賈孫録(I 126)「器遠前夜説、敬當不得小學。某看來、小學却未當得敬。敬已

是包得小學。敬是徹上徹下工夫。」
(11) 「居仁」「由義」『孟子』「離婁」上「孟子曰。自暴者、不可與有言也。自棄者、不可與有為也。言非禮義、謂之自暴也。吾身不能居仁由義、謂之自棄也。仁、人之安宅也。義、人之正路也。曠安宅而

弗居、舍正路而不由、哀哉。」『孟子』「尽心」上「居惡在、仁是也。路惡在、義是也。居仁由義、大人之事備矣。」

(12)「敬以直内」「義以方外」『易經』「坤卦」文言「君子敬以直内、義以方外。」

27条

才仲間。格物、是小學已有開明處了、便從大學做將去、推致其極。曰。人也不解無箇發明處。才有些發見處、便從此挨將去、漸漸開明。只如一箇事、我才發心道、我要做此事、只此便是發見開明處了、便從此做將去。

五代時、有一將官、年大而不識字。既貴、遂令人於每件物事上書一名字帖之、渠子細看、久之、漸漸認得幾箇字。從此推將去、遂識字。

隣

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「也不解無箇發明處」万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

○「年大而不識字」成化本は「字」を「家」に作る。

〔訳〕

才仲がお尋ねする。「格物とは、小学の段階において既に通曉するところが有った上で、大学の段階からその実践を始め、(格物の対象

に即して) 極限まで推し致^{きむ}めていく、ということなのでしょいか。」先生「人にだつて(小学に頼らずとも自力で何事かを) 明らかにすることが、必ず有つて然るべきだ。そうして少しでも理解できるところが有れば、そこから推し及ぼしていき、次第に通曉していく。例えば何か一つの事柄について、自ら一念発起して「私はこの事柄を成し遂げよう。」と言つたとすれば、それが取りも直さず理解して通曉したところなのであつて、あとはそこを起点としてやつていくのだ。

五代の時、一人の将官がいた。彼は既に年齢が高かつたのに字を識らなかつた。尊貴の身となつてから、人に命じて物の上に一々その名称を記したものを貼り付けさせた。彼は丹念にそれに見て、久しい後には、少しずついつくかの文字を覚えていった。そしてそこから推し抜けていくことで、結局は文字を識るようになったのだ。 藤隣録

〔注〕

(1) 「才仲」魏丙、字才仲(材仲)。卷一四、二二条に既出。

(2) 「小學已有開明處了」古人は(小学の段階で) 種々の礼節に習熟する機会を持つていた、という二五条の記述を参照。

(3) 「開明」明らかにする、明らかにする、わかる。以下に見える「發明」「發見」もほぼ同方向の語彙。

(4) 「從大學做將去」「從…去」は動作の目指す方向を表す場合と動作の起点を表す場合が有るが、ここでは後者の意に解釈しておく。

三浦國雄『朱子語類抄』頁三〇八、四〇七参照。

(5) 「推致其極」『大学章句』經の「致知」に対する朱注に「致、推

極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」とある。

(6) 「發明」 明らかにする。卷一四、八条、八三条に既出。

(7) 「不解無」「不可無」に同じ。ないわけにはいかない。有って然るべきである。「解」は「会」と同じく「〜できる」。卷一四、二〇条、一一七条に既出。

(8) 「挨將去」推し及ぼしていく。順次に突き詰めていく。「挨」は「推」

(卷一四、二九条に既出)に通じる。『語類』卷三二、二七条、陳淳録(IV 1203)「楊問。程子曰。近思、以類而推。何謂類推。曰。此語道得好。不要跳越望遠、亦不是縱橫陡頓、只是就這裏近傍那曉得處挨將去。

如這一件事理會得透了、又因這件事推去做那一件事、知得亦是恁地。

如識得這燈有許多光、便因這燈推將去、識得那燭亦恁地光。如升階、

升第一級了、便因這一級進到第二級、又因第三級進到四級。只管恁

地挨將去、只管見易、不見其難、前面遠處只管會近。若第一級便要

跳到第三級、舉步闊了便費力、只管見難、只管見遠。…如讀書、讀

第一段了、便到第二段、第二段了、便到第三段。只管挨將去、次第

都能理會得。若開卷便要獵一過、如何得。」

(9) 「只如」 例えば。卷一四、四四条に既出。

(10) 「發心」 一念發起する。『語類』卷二三、九九条、林子蒙録(II

556)「吾十有五而志于學。古人於十五以前、皆少習父兄之教、已從事小學之中、以習幼儀、舞象舞勺、無所不習。到此時節、他便自會發心去做、自去尋這道理。」

(11) 「五代時、有一將官」 『舊五代史』卷一五、梁書「韓建」「韓建、字佐時、許州長社人。…唐軍容使田令孜…補(建)為神策都校・金

吾將軍、出為潼關防禦使兼華州刺史。…建比不知書、治郡之暇、日課學習、遣人於器皿・牀榻之上各題其名、建視之既熟、乃漸通文字。俄遷華商節度・潼關守捉等使、累加檢校太尉・平章事。』『冊府元龜』(宋版)卷八一、總録部「晩学」の「梁韓建」の項もほぼ同様の記事を収録する。なお『群書考索』別集、卷一八「樞密使」「五代以武官為樞密使。武臣或不識字、故置樞密直學士、令文臣為以輔之。故奏子皆得武臣。宋朝因而不廢。文公語録」とある。

28条

問。格物則恐有外馳之病。曰。若合做、則雖治國平天下之事、亦是己事。周公思兼三王、以施四事。其有不合者、仰而思之、夜以繼日、幸而得之、坐以待旦。不成也說道外馳。

又問。若如此、則恐有身在此而心不在此、視而不見、聽而不聞、食而不知其味、有此等患。曰。合用他處、也著用。

又問。如此、則不當論内外、但當論合為與不合為。先生頷之。節

〔校勘〕

○「夜以繼日」 万曆本、朝鮮古写本は「繼」を「繼」に作る。

○「聽而不聞」 万曆本、和刻本は「聽」を「聽」に作る。

○「合用他處、也著用」 「著」を成化本、朝鮮古写本は「着」に、万曆本は「看」に作る。

〔訳〕

質問。「格物には、心が外に馳せるといふ弊害が有るのではないのでしょうか。」先生「それが為すべき事であるなら、たとえ治国平天下であつても、やはり己が分内の事柄になるのだ。周公は三王（禹、湯、文王・武王）の治績を兼ね、（三王それぞれの行った）四つの事柄を実践しようとした。（三王の行ったままのやり方では）時勢に合わない点があると、天を仰いで思索し、夜を日に継いで考え続けた。幸にして妙案を得ると、（早く実践したくて）坐つたまま夜が明けるのを待った。とあるが、（君は）まさかこの周公（の心）が外に馳せ向かつていた等と主張するつもりではあるまいな。」

またお尋ねした。「もしそうであるなら、我が身はここに在つて心はここに在らず、目をこらそうとしても目に入らず、耳を傾けようとしても耳に入らず、ものを食べてもその味がわからない、といったこととなる心配はありませんか。」先生「それが心を注ぐべき場合であるならば、やはり注ぐべきだ。」

またお尋ねした。「それならば、（心の）内外を問題にすべきなのではなく、それが為すべき事柄か否かをこそ問題にすべきなのですね。」先生はうなずかれた。 甘節録

〔注〕

（1）「外馳」 心が（自己の内面をなおざりにして）外に馳せ向かうこと。『語類』卷九、八八条、楊道夫録（I 20）「務反求者、以博觀為外馳。務博觀者、以内省為狹隘。墮於一偏、此皆學者之大病也。」語

類』卷六一、七三条、余大雅録（IV 147）「孔子以他心一向外馳、更不反己、故以為德之賊。」（文中の「他」は「郷原」を指す。）

（2）「雖治國平天下之事、亦是己事」 為政者のように直接治国平天下に携わることのない一士人にとつても、やはり自己分内の事柄になるということ。卷一四、七〇条の「明明德乃是為己工夫。那个事不是分内事。」及びその注を参照。

（3）「周公思兼三王」 『孟子』「離婁」下「孟子曰。禹惡旨酒而好善言。湯執中、立賢無方。文王視民如傷、望道而未之見。武王不泄邇、不忘遠。周公思兼三王、以施四事。其有不合者、仰而思之、夜以繼日。幸而得之、坐以待旦。」朱注「三王、禹也、湯也、文武也。四事、上四條之事也。時異勢殊、故其事或有所不合、思而得之、則其理初不異矣。坐以待旦、急於行也。」

（4）「不成」 まさか…ではあるまい。卷一四、二四條等に既出。

（5）「也著用」 「著」は「須著」の二文字で「必ず…すべきである」の意を表すが（卷一四、三二條、六九條、単独でも「…すべきである」の意を表す。『詩詞曲語辭匯釈』卷三「着（著）」「着猶得也、要也。」（6）「視而不見」 『大学章句』「伝七章」「心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。」

29条

若格物、則雖不能盡知、而事至物來、大者增些子、小者減些子、雖不中、不遠矣。 節

〔校勘〕

○「若格物、則雖不能盡知」成化本、万曆本、朝鮮古写本は「則」を「而」に作る。呂晚村句読本、劉氏伝経堂叢書本、朝鮮整版本、和刻本は底本と同じく「則」に作る。なお朝鮮整版本卷末「考異」に「物則 則一作而」とある。

○「事至物來」万曆本、和刻本は「來」を「來」に作る。

〔訳〕

格物を実践する場合、たとえ（ある対象に関して）その全てを知り尽くすことはできなくとも、その事物が出現した際、大きめものに対しては量り方を少し重めにしてやり、小さめのものに対しては量り方を少し軽めにしてやる、というようにすれば、「中らずと雖も遠からず」なのである。 甘節録

〔注〕

（1）大者増些子、小者減些子 秤はかりでもものの軽重を量る場合、大きく重い物に対しては分銅の重さを増してやり、小さく軽い物に対しては分銅の重さを減じてやれば、たとえ秤竿の完全な平衡は得られずとも、およその重さを知ることができる。それと同様に、格物において対象に関する全てを知り尽くすことは不可能でも、その大体を知ることができる、という意味に解釈した。なお重さを計量する文脈での「増些子」云々に類する表現としては以下を参照。元、劉因撰『四書集義精要』卷一八、論語子罕二九章（「可與立。未可與權」）

「稱得不可增加些子、是經。到得物重衡昂移退、是權。依舊得平、便是合道。故反經亦須合道也。」因みに中国国家計量総局主編、山田慶児・浅原達郎訳『中国古代度量衡図集』（みすず書房、一九八五年）には春秋時代から清朝に至るまでの秤の実物写真（竿、分銅など一部分のみも含む）が掲載されている（頁二〇～三四九）。

（2）「雖不中不遠矣」『大学章句』伝九章「康誥曰。如保赤子。心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。」

30条

問。格物工夫未到得貫通、亦未害否。曰。這是甚說話。而今學者所以學、便須是到聖賢地位、不到不肯休、方是。但用工做向前去、但見前路茫茫地白、莫問程途、少問自能到。如何先立一箇不解做得便休底規模放這裏了、如何做事。且下手要做十分、到了只做得五六分。下手做五六分、到了只做得三四分。下手做三四分、便無了。且諸公自家裏來到建陽、直到建陽方休。未到建陽、半路歸去、便是不到建陽。聖賢所為、必不如此。如所謂君子鄉道而行、半途而廢。忘身之老也、不知年數之不足也、俛焉日有孳孳、斃而後已。又曰。舜為法於天下、可伝於後世、我由未免為鄉人也、是則可憂也。憂之如何。如舜而已矣。

卓

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載本条。

○「半途」「半」朝鮮整版本作「中」、「途」成化本、万曆本、和刻本作「塗」、朝鮮整版本作「道」。

○「舜為法於天下」万曆本「爲」下有空一格。

〔訳〕

質問した。「格物の工夫は、貫通まで到達していなくても、害はないでしょうか。」先生がおっしゃった。「そんな話があるか（なんてことを言うのだ）。今の学ぶ者が学ぶ理由は、聖賢の境地に到達することとがとめられるのであり、そこに到達できなければ決してやめることはない、そうであってはじめてよいのだ。ただ工夫をおすすめていけば、前方の道が白くかすんでほんやりしていて、どのように進めばよいかわからなくとも、しばらくすればおのずと到達することが出来るのだ。どうしてあらかじめ出来なければやめてしまおうというような計画をここにたててしまうのか。それでどうしようというのか。たとえ十分の十をなしとげようと思っても、結局ただ五六分をなし得るに止まるものであり、五六分をなそうと思つたら、なし得るのは三四分のみ。三四分しかしようとしなければ、何もなしで終わつてしまふ。たとえばきみたちが自分のところから建陽にやってくるとして、まっすぐ建陽にたどりついてはじめて歩みをとめるだろう。建陽に到達していないのに、道半ばで帰ってしまったら、それでは建陽に到達したことはない。聖賢というものはそういうやりかたは絶対しないのだ。それはたとえ「君子道に郷ひて行き、半途にして廢す。身の老いたるを忘るるなり。年数の足らざるを知らざるなり。俛焉と

して日び孳孳たる有り、斃れて而る後に已む。」であり、また「舜は法を天下に為り、後世に伝ふべし。我れ由ほ未だ郷人爲るを免れざるなり。是れ則ち憂ふべきなり。之を憂ひて如何せん。舜の如くするのみ。」というのがそれだ。 黄卓録

〔注〕

- (1) 「害」『論語』「為政」「子曰、攻乎異端、斯害也已。」
- (2) 「這是甚說話」 そんな話があるか。『語類』卷二四、葉賀孫録（II 389）「始到他説此一章、却云子張平日專務多聞多見、故夫子告以闕疑、是不欲其多聞多見、此是甚說話。」
- (3) 「做向前去」 しつづける。『語類』卷二八、鄭南升録（II 723）「學者只有箇恕字、要充擴此心、漸漸勉力做向前去。」
- (4) 「前路茫茫地白」「茫茫」は、ほんやりとしたさま。『法言』「重黎」「神怪茫茫、若存若亡、聖人曼云。」「文苑英華」卷一〇三、釋靈一「哭魏尚書」「前路茫茫向誰問、感恩空有淚沾襟。」「河南二程遺書」卷一五「率性之謂道、率循也。若言道不消先立下名義、則茫茫地何處下手、何處著心。」茫茫白、とは、ほんやりとかすんでいるさま。『白氏長慶集』卷一三「宿禿亭驛」「月明何所見、潮水白茫茫。」
- (5) 「如何先立一箇不解做得便休底規模放這裏了、如何做事」『西山読書記』卷二二は、この部分を引用して、「如何先立一个不解到得便休底規模在此」に作る。
- (6) 「立く規模」 計画を立てる。『韓昌黎文集』卷四〇「黄家賊事宜状」「今所用嚴公素者、亦非撫御之才、不能別立規模、依前還請攻討。」

(7) 「諸公」 諸君。弟子に対する二人称の呼びかけ。卷一四、二八条に既出。

(8) 「君子郷道而行云々」 『礼記』 「表記」 「子曰、詩之好仁如此、郷道而行、中道而廢、忘身之老也。不知年數之不足也。俛焉日有孳孳、斃而后已。」 陳氏集說「中道而廢、言力竭而止。若非力竭則不止也。不足、少也。人老則未來之歲月少矣。俛焉、無他顧之意。孳孳、勤勉之貌。斃、死也。」

(9) 「到了」 結局。本卷二六条参照。

(10) 「舜為法於天下」 『孟子』 「離婁」 下の文。朱注「郷人、郷里之常人也。君子存心不苟、故無後憂。」

31条

人多把這道理作一箇懸空底物。大學不說窮理、只說箇格物、便是要人就事物上理會、如此方見得實體。所謂實體、非就事物上見不得。且如作舟以行水、作車以行陸。今試以衆人之力共推一舟於陸、必不能行。方見得舟果不能以行陸也。此之謂實體。 德明

〔校勘〕

○「如此方見得實體」 「體」 朝鮮古写本作「躰」。下同。

〔訳〕

人はよくこの道理というものをなにか事物を離れて存在するもので

あると考えている。大学が窮理を説くのではなく、ただ格物を説いているのは、とりもなおさず人に事物に即して理解することを要請するためであって、そうであってこそ、真に体認するということの何たるかがわかるのだ。真に体認するといっても、具体的な事物に即するの作って陸を行くとする。さてそこで試みに多くの人の力をあわせて舟を陸でおし進めてみても、当然舟は進めない。そこではじめて舟というものが確かに陸を行くことはできないということがわかるのだ。これが真に体認するということだ。 廖徳明録

〔注〕

(1) 「懸空」 事物を離れて存在すること。卷一四、四四条に既出。

(2) 「不説窮理、只説箇格物」 本卷三四条、また卷六二、七二条、沈艷録(IV 238) 「大學所以説格物、却不説窮理、蓋説窮理則似懸空無捉摸處。」参照。

(3) 「要く方く」 くしてはじめてくだ。三浦國雄『朱子語類抄』三七頁参照。

(4) 「實體」 名詞として使われるときには、内実を持つ本体。『中庸章句』第一章題解「右第一章、子思述所傳之意以立言。首明道之本原出於天而不可易、其實體備於己而不可離。」外典にも『初學記』卷一引陸機浮雲賦「有輕虚之艷象、無實體之眞形」などに見えるが、仏教の語彙としてより一般的である。『大智度論』卷七四(大正二五、五八一下)「是空相、是一切諸法實體、不因内外有。」「出三藏

『記集』卷八、僧叡（大正五五、五七中）「法華經後序」「法華經者、諸佛之祕藏、衆經之實體也。」ただし、朱子は「実体」を上記『中庸章句』のように名詞的に使うと同時に、『語類』の中では「実体スル」という「体認」に近い言葉として用いることが多い。本条もその意味で解する。『語類』卷二六、二九条、潘時舉録（II 267）「聖人言語、豈可以言語解過一遍便休了。須是實體於身、灼然行得、方是讀書。」

(5) 「作舟以行水、作車以行陸」『周礼』「考工記」「燦金以爲刃、凝土以爲器、作車以行陸、作舟以行水、此皆聖人之所作也。」同じたとえは『語類』卷四、二九条、曾祖道録（I 92）にも見える。

(6) 「衆人之力」『淮南子』「主術訓」「夫乘衆人之智、則無不任也、用衆人之力、則無不勝也。」

(7) 「推一舟於陸」『莊子』「天運」「是猶推舟於陸也、勞而無功。」『尚書』「益稷」「罔水行舟、朋淫于家。」孔伝「丹朱習於無水陸地行舟。」

32条

問、道之不明、蓋是後人舍事跡以求道。曰、所以古人只道格物。有物使有理。若無事親事君底事、何処得忠孝。 節

〔校勘〕

○「事跡」成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本「跡」作「迹」。

○「曰」朝鮮古写本作「先生曰」。

〔訳〕

質問した。「道が明らかでない」のは、思うに後の人が実際の事柄をすてて道を求めようとするからでしょうか。」先生がおっしゃった。「だから古人はただ格物を言うのだ。物があれば理がある。もし親に事え君に事えるということがなかったら、どこで忠孝の理を得られるのか。」 甘節録

〔注〕

(1) 「道之不明」『中庸章句』第四章「子曰、道之不行也、我知之矣、知者過之、愚者不及也。道之不明也、我知之矣、賢者過之、不肖者不及也。」

(2) 「後人」『尚書』君奭「告君、乃猷裕、我不以後人迷。」

(3) 「有物使有理」なにか物事があればそこに必ず理がある、は、朱子の基本的な考え方のひとつ。『語類』卷六二、三九条、鄭可学録（IV 1487）「故曰。天生烝民、有物有則。物乃形氣、則乃理也。」『語類』

卷一一〇、三五条、葉賀孫録（VII 2892）「天生烝民、有物有則。有一箇物、便有一箇道理。所以大學之道、教人去事物上逐一理會得箇道理。」『語類』卷四、二八条、甘節録（I 67）「問枯槁有理否、曰、才有物使有理。」「有物有則」については卷一四、一〇五条、注（3）参照。

(4) 「事親事君」『語類』卷一四、八〇条注（4）、一四七条注（4）

を参照。

33条

窮理二字不若格物之爲切、便就事物上窮格。如漢人多推秦之所以失、漢之所以得、故得失易見。然彼亦無那格底意思。若格之而極其至、則秦猶有餘失、漢亦當有餘得也。又云、格、謂至也。所謂實行到那地頭。如南劍人往建寧、須到得郡廳上、方是至。若只到建陽境上、即不謂之至也。 德明

〔校勘〕

○「二字」 成化本、朝鮮古写本作「一字」。

○「南劍人」 成化本、万曆本、朝鮮古写本「劍」作「劍」。

〔訳〕

窮理の二文字は、格物が切実であるのおよばないのであって、格物とは事物に即して窮め至ることだ。たとえば漢の人がさまざまに秦が失敗した理由と、漢が成功した理由を考えたので、その得失は見やすくなった。しかし、彼らはやはりあの「格」をしようという気持ちを持っていなかったのだ。もしこれを「格」してその極地までたどり着いたら、秦についてはなおそれ以上に失敗点を見つけられ、漢もまたそれ以上の成功点を見出すことができたはずだ。またおっしゃった。「格」とは「いたる」ということだ。実際にその場所に到達すること

を言っているのだ。たとえば南劍の人が建寧に行こうとするときには、建寧の役所にたどりついて、はじめてついたといえるのであって、もした建陽の郡境まで来ただけでは、これでは「至」ったとはいえないのだ。 廖德明録

〔注〕

(1)「秦之所以失」『史記』卷九七、陸賈伝「高帝不懌而有慙色。廼謂陸生曰、試爲我著秦所以失天下、吾所以得之者何、及古成敗之國。」また賈誼「過秦論」(『漢書』陳勝項籍伝贊、「文選」卷五一、「新書」過秦) 参照。

(2)「易見」「難知」と対となる語。『論語或問』為政「人之易見者莫如行事、難知者莫如用心。」

(3)「餘得、餘失」 餘得、餘失の「餘」についての発想は、以下の『周易』にもとづく。『周易』坤、文言伝「積善之家、必有餘慶。」

(4)「南劍、建寧、建陽」 南劍州は建寧府の南側に隣接する州。丁水沿いにさかのぼる行程を取るとして、南劍州と建寧府との州境を越えて建寧府の郡庁までは直線距離でさらに三〇キロほどある。なお、「建陽境上」の「建陽」は、「建寧」の誤りであろうと思われる。(建寧府の北に建陽県があるが、朱子の存命中には嘉禾県と呼ばれている。『宋史』卷八九、地理志五、福建路「建寧府」参照。)

(5)「地頭」 地点、場所、立場、場面。『語類』卷三七、三八条、黄義剛録(Ⅲ 88)「問經、權。曰。權者、乃是到這地頭、道理合當恁地做、故雖異於經、而實亦經也。且如冬月便合著綿向火、此是經。」

忽然一日煖、則亦須使扇、當風坐、此便是權。」

34条

格物、不説窮理、却言格物。蓋言理則無可捉摸、物有時而離。言物則理自在、自是離不得。釋氏只說見性、下梢尋得一箇空洞無稽底、性亦由他說、於事上更動不得。 賀孫

〔校勘〕

○「空洞」 万曆本、和刻本「空」作「實」。

〔訳〕

(大学の) 格物とは、窮理を言わずに、あくまで格物と言っているのだ。思うに、理と言えば、模糊としてとらえられなく、事物から離れてしまうことがある。物と言えば、理はおのずからそこにあり、当然のことながら離れてしまうことはない。仏教の人達はただ「見性」を言うばかりで、結局は空っぽで荒唐無稽なものを探求しているだけであって、性を彼らの説にもとづいて考えるならば、実際の事物を前としては、身動きが全く取れないのだ。 葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「捉摸」 捉える。把握する、把握する。卷一四、九一条に既出。
(2) 「見性」 本性を見つめとらえること。「見性成仏」とよく言われ

るように、禪の文脈で常見の概念。『景德伝灯録』卷三、菩提達磨「王怒而問曰、何者是佛。答曰、見性是佛。王曰、師見性否。答曰、我見佛性。王曰、性在何處。答曰、性在作用。」朱子の「見性」に対する見解は、『語類』卷一二六「釈氏」を参照。とりわけ朱子はこの「作用」がそのまま性であるという見解に異を唱える。『語類』卷一二六、五九条、万人傑録(Ⅷ 3022)「作用是性、在目曰見、在耳曰聞、在鼻嗅香、在口談論、在手執捉、在足運奔、即告子生之謂性之説也。且如手執捉、若執刀胡亂殺人、亦可爲性乎。龜山舉龐居士云神道妙用、運水般柴、以比徐行後長、亦坐此病。不知、徐行後長乃謂之弟、疾行先長則爲不弟。如曰運水般柴即是妙用、則徐行疾行、皆可謂之弟耶。」

(3) 「下梢」 結局。『語類』卷九、四二条、楊道夫録(I 154)「今既要理會、也須理會取透、莫要半青半黃、下梢都不濟事。」

(4) 「空洞」 からっぽなこと。『語類』卷五九、一五二条、廖德明録(Ⅳ 1410)「湛然清明時、此固是仁義禮智統會處。今人説仁、多是把做空洞底物看、却不得。」

(5) 「無稽」 『尚書』「大禹謨」「無稽之言勿聽、弗詢之謀勿庸。」「荀子」正名「無稽之言、不見之行、不聞之謀、君子慎之。」楊注「無稽之言、言無考驗者也。」

(6) 「動不得」 身動きがとれない。『河南程氏遺書』卷一九「學佛者、多要忘是非。…世人只爲一齊在那昏惑迷暗海中、拘滯執泥坑裏、便事事轉動不得、沒著身處。」

所謂窮理者、事事物物、各自有箇事物底道理、窮之須要周尽。若見得一辺、不見一辺、便不該通。窮之未得、更須欵曲推明。蓋天理在人、終有明處。大學之道、在明明徳、謂人合下便有此明徳、雖為物欲掩蔽、然這些明底道理未嘗泯絶、須從明處漸漸推將去、窮到是處、吾心亦自有準則。窮理之初、如攻堅物、必尋其罅隙可入之處、乃從而擊之、則用力為不難矣。孟子論四端、便各自有箇柄靶、仁義禮智皆有頭緒可尋。即其所發之端、而求其可見之体、莫非可窮之理也。 謨

〔校勘〕

○「欵」朝鮮古写本作「款」、朝鮮整版本作「款」。

○「罅隙」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本「罅」作「罅」。

○「即其所發之端」万曆本、和刻本「發」作「発」。

〔訳〕

いわゆる窮理とは、事事物物、おのおのにその事物の道理があり、それを窮めてあまねく尽くさねばならないということである。もしある部分だけを見極めて、ある部分は見極めていないということだと、それでは該通していない。窮め尽くし得ていなければ、さらに詳しく明らかにしていく必要がある。思うに天理は人に具わっており、つまるところ明晰な部分があるのだ。「大学の道、明徳を明らかにするに在り」とは、人は最初からこの明徳を持っており、物や欲に蔽われて

いても、この明らかなる道理は埋没消滅してしまふことはなく、明らかなどころから次第に推し進めていって、是なるところに窮めれば、自らの心にはおのずと基準となる法則が具わるのだ。窮理の最初は、堅い物に細工するようなもので、必ず鑿が入り込めるすき間をみつけた後、そこからたいていけば、用いる力も少なくてすむ。孟子は四端を論じたが、これはそれぞれにおのずとつかかりのところがあるのであって、仁義礼智にはみな尋ね求めるべき端緒があり、その発端に即して、見極めるべき本体を求めていけば、どれもみな窮めるべき理なのだ。 周謨録

〔注〕

(1) 「欵曲」詳しく。『柳河東集』卷四三、首春逢耕者「聊從田父言、欵曲陳此情。」「語類」卷二〇、一一〇条、周謨録(Ⅱ70)「且欵曲研究、識盡全體。」

(2) 「明處」人間の心に本来具わった明晰な箇所。『語類』卷一四、二二条、鄭可學録「人心有明處、於其間得一二分、即節節推上去。」同所の注釈を参照。

(3) 「合下」最初から。卷一四、三八条に既出。

(4) 「泯絶」『文選』卷一「東都賦」「生人幾亡、鬼神泯絶。」

(5) 「如攻堅物必尋其罅隙可入之處」堅いものに切り込みを入れるという発想は、以下の『論語』にもとづく。『論語』子罕「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。」皇侃義疏「物雖堅者、若鑽錐則可入也。」「論語」為政「子曰、攻乎異端斯害也已。」集注「范氏曰、攻、

專治也。故治木石金玉之工曰攻。』『語類』卷二〇、五五条、余大雅錄（II 456）「如庖丁解牛、他只尋罅隙處、游刃以往、而衆理自解、芒刃亦不鈍。」

（6）「用力」『礼記』「祭義」「小孝用力、中孝用勞。」

（7）「柄靶」とつかかりのところ。『五灯会元』卷一八、智策禪師「往豫章謁典牛。道由雲居。風雪塞路。坐閱四十二日。午初。版聲鏗然。豁爾大悟。及造門。典牛獨指師曰。甚處見神見鬼來。師曰。雲居聞版聲來。牛曰。是甚麼。師曰。打破虚空。全無柄靶。」

（8）「頭緒」端緒。『蔡中郎集』卷二「上漢書十志疏」「參思圖牒、尋釋度數、適有頭緒。」

（9）「可見之體」惻隱などの四端はあくまでも端緒であつて、窮めねばならないのはその本体である仁義禮智にある。『語類』卷二〇、九〇条、葉賀孫録（II 464）「有仁義禮智、則是性。發為惻隱羞惡辭遜是非、則是情。惻隱、愛也、仁之端也。仁是體、愛是用。」

36条

格物窮理、有一物便有一理、窮得到後、遇事觸物皆撞著這道理。事君便遇忠、事親便遇孝、居處便恭、執事便敬、與人便忠、以至參前倚衡、無往而不見這箇道理。若窮不至、則所見不真、外面雖為善、而內實為惡、是兩箇人做事了。外面為善是一箇人、裏面又有一箇人說道我不好。如今須勝得那一箇不好底人去方是。豈有學聖人之書、為市井之行。這箇窮得箇甚道理。而今說格物窮理、須是見得箇道理親切了。未解便能脫

然去其舊習。其始且見得箇道理如此、那事不是、亦不敢為。其次、見得分曉、則不肯為。又其次、見得親切、則不為之、而舊習都忘之矣。

子蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五不載本条。

○「參前倚衡」万曆本、和刻本「參」作「參」。

○「内實為惡」万曆本、和刻本「惡」作「惡」。

○「是兩箇人做事了」万曆本、和刻本「兩」作「兩」。

○「說道我不好」成化本、万曆本、朝鮮整版本「道」作「是」、和刻本作「走」。

○「見得分曉」万曆本、和刻本「曉」作「曉」。

〔訳〕

格物窮理とは、物が一つあれば一つ理があるのであり、その理を極め得た後は、事物に接触することによつてもこの道理にいきあたるということである。君に仕えるときには忠に出会い、親に仕えるときには孝に出会い、ひとりですつとしているときには恭に出会い、なにかするときには敬に出会い、人と関わる時には忠に出会い、立てば目の前にあるように、車では手すりによりかかるようなところにいたるまで、どこにいてもこの道理を見ないことはない。もし窮め尽くせていないと、見ているものは真実のものではなく、外面こそ善であつても、内実は悪であり、それでは二人の人間がしているようなものだ。

外面では善をなすのが一人、内面にもまた一人の人間がいて、わたしは悪い、と言う。いまその一人の悪い人間に打ち勝ち得てはじめてよいのだ。聖人の書を学びながら、市井の小人のような行いをするなどということがあろうか。こんなことでどんな道理を窮めたというのか。いま格物窮理と言うときには、この道理を切実に見極めねばならないのであって、すぐにすつきりその古くからの習慣をとりのぞけたというわけではない。まずはこの道理はこのようで、そのことが正しくないと見て取ったなら、それはしようとはしない。その次の段階は、道理をはつきりと見て取ったなら、それをするをひかえる。またその次の段階は、そのことを切実に見て取ったなら、それをしない。そのようにして旧習はすべて忘れてしまうのだ。 林子蒙録

〔注〕

- (1) 「撞著」 いきあたる、でくわす。この「撞」は、朱子は『孟子』離婁下の「資之深、則取之左右逢其原」の「逢」のイメージで考えられている。本条次句に現れる「遇」も同様である。『語類』巻五七、二二条、呂熹録（IV 134）「取之左右逢其原、蓋這件事也撞着這本來底道理、那件事也撞着這本來底道理、事事物物、頭頭件件、皆撞着這道理。」『語類』巻一四、一六一一条注（10）参照。
- (2) 「事君事親」『語類』巻一四、八〇条、魏椿録、注（4）参照。
- (3) 「居處便恭、執事便敬、與人便忠」『論語』「子路」「樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也。」
- (4) 「參前倚衡」 立てば目の前にあるように、車に乗れば自分と一

緒に手すりによりかかるように、たえず気にかけて自分のすぐそばにあるようにすること。『論語』「衛靈公」「立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行。」集注「言其於忠信篤敬念念不忘、隨其所在、常若有見、雖欲頃刻離之而不可得。」

(5) 「不好底人」 文言にいう「不善人」。『春秋左氏伝』宣公一六年「吾聞之、禹稱善人、不善人遠。」なお、この部分は「内面にはもう一人の人がいて、わたしはそれをしたくないと言う。そのもう一人のしたくない人に打ち勝ってこそよいのだ」という解釈の可能性もある。

(6) 「両箇人做事」 二人の人がやっていることになってしまふ。この喩えは以下にも見える。『語類』巻一四、八二条、黄卓録「其為文字與所見處甚好、到他自做處全相反。不知是如何。却似是兩人做事一般。」

(7) 「市井」「市井」は、經書にはたとえば「市井之臣」として、退官したもの、あるいはまだ官についていないものが民間にいることを表すが（『儀礼』『孟子』）、ここでは単に民間の人というだけではなく、小人よりもさらに一段低いレベルとしてイメージされている。『論語』「子路」「曰、敢問其次。曰、言必信、行必果、硜硜然小人哉。抑亦可以為次矣。」集注「小人言其識量之淺狹也。此其本末皆無足觀。然亦不害其為自守也。故聖人猶有取焉。下此則市井之人、不復可為士矣。」ちなみに『四書大全』は、この集注の「市井之人」に「言誕行縱」と割り注をつけている。

(8) 「未解便云々」「解」は「できる」、「便」は「ただちに」。まだ

それではすぐにこの段階に到っているというわけではない。『語類』卷二〇、一二三条、呉必大録（Ⅶ 2913）「且將一件書讀聖人之言、即聖人之心。聖人之心即天下之理。且逐段看令分曉、一段分曉、又看一段。如此至一二十段、亦未解便見箇道理。但如此心平氣定、不東馳西驚、則道理自逐旋分明。」

(9) 「去其舊習」 同じ発想が他所にも見える。『語類』卷一四、九五条、楊驥録（Ⅰ 267）「去舊汗」、同卷一七〇条、潘時舉録（Ⅰ 281）「濯去舊聞」を参照。

(10) 「見得箇道理如此、那事不是、亦不敢為」 なすべきでないと知ること、それをするかしないかという問題については、以下の条を参照。『語類』卷一三、五〇条、輔廣録（Ⅰ 228）「且如人須知此事不是、不可為、忽然無事又自起此念。又如臨事時須知其不義、不要做、又却不知不覺自去做了。是如何。」

37条

不是要格那物來長我聰明見識了、方去理會、自是不得無理會。

〔校勘〕

○成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、有録者名云「憫」

〔訳〕

何かある物に格^かつて自分の聡明な見識をのぼさうと思つてはじめて

とりかかるものではなく、とりかからざるを得ないものなのだ。

〔注〕

(1) 「長我聰明見識」『周易』「鼎」「巽而耳目聰明。」「見識」については『張子語録』後録上「自孟子後、儒者無他見識。」宋戴溪『石鼓論語或問』「古人學詩增長人見識甚多。」

(2) 「不是」自是」はではなく。『語類』には類出。

38条

大學説一格物在裏、却不言其所格者如何。學者欲見下工夫處、但看孟子便得。如説仁義禮智、便窮到惻隱、羞惡、辭遜、是非之心。説好貨好色好勇、便窮到太王公劉文武。説古今之樂、便窮到與民同樂處。説性、便格到纖毫未動處。這便見得他孟子胸中無一毫私意蔽窒得也、故其知識包宇宙、大無不該、細無不燭。 道夫

〔校勘〕

○「毫」成化本、朝鮮整版本作「豪」、下同。

○「蔽窒得也」成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本「也」作「他」。

〔訳〕

大学は、その中で格物ということをお説いているものの、格する対象がどのようなものかということはお説いていない。学ぶ者は、何に

ついで工夫をすればよいのかということを知ろうとするなら、『孟子』を読めばよい。『孟子』は仁義礼智を説いては、惻隱、羞惡、辭遜、是非の心に窮め至った。貨を好み色を好み勇を好むことを説いては、大王・公劉・文王・武王に窮め至った。古今の音楽を説いては、民と同じように楽しむのだというところに窮め至った。性を説いては、心がほんのわずかも動いていないことに格^{いた}つた。これらの部分から、かの孟子の胸中がほんのわずかの私意によっても蔽^かわれていないことがわかる。だから彼の知識は宇宙を包み、その大いさはすべてをかねそなえ、微細なすみずみまでも照らすのだ。 楊道夫録

〔注〕

(1) 「好貨好色好勇」 それを好むことは基本的に避けるべきだと考えられていた「貨」「色」「勇」について、大王、公劉、文王、武王がそれぞれを好んだように好めばよいのだと孟子は説いている。『孟子』「梁惠王」下「寡人有疾、寡人好勇。對曰：此文王之勇也。：此武王之勇也。而武王亦一怒而安天下之民。今王亦一怒而安天下之民、民惟恐王之不好勇。：王曰、寡人有疾、寡人好貨。對曰、昔者公劉好貨。王如好貨、與百姓同之、於王何有。王曰、寡人有疾、寡人好色。對曰、昔者大王好色、愛厥妃。：王如好色、與百姓同之、於王何有。」

(2) 「與民同樂」 『孟子』「梁惠王」下「曰、好樂何如。：與少樂樂、與衆樂樂、孰樂。曰、不若與衆、：此無他、與民同樂也。今王與百姓同樂、則王矣。」

(3) 「纖毫未動」 心の未発(＝未動)が性であり、この未動の心を、孟子が「不動心」(「公孫丑」上)あるいは「至誠而不動」(「離婁」上)として語っていることを指す。『語類』卷五、七〇条、董銖録(一) 88 「性是未動、情是已動、心包得已動未動。蓋心之未動則為性、已動則為情、所謂心統性情也。」

(4) 「包宇宙」 『淮南子』「繆稱訓」 「道至高無上、至深無下：包裏宇宙而無表裏、洞同覆載而無所礙。」 『温国文正公文集』卷六八「説玄」 「大則包宇宙、小則入毛髮。」

(5) 「細無不燭」 以下の沈約の文章に、前注の「包宇宙」と、この「どこまでもてらす」とをセットにした発想が見られる。『藝文類聚』卷一四、沈約齊明帝諡議「崢嶸之下、澤靡不懷、寥廓之上、明無不燭、包以宇宙、潤以風雨。」

39条

居甫問。格物窮理、但理自有可以彼此者。曰。不必如此看。理有正有權、今學者且須理會正。如娶妻必告父母、學者所當守。至於不告而娶、自是不是、到此處別理會。如事君匡救其惡、是正理。伊川說納約自牖、又是一等。今於此一段未分明、却先為彼引走。如孔子說危行言孫、當春秋時亦自如此。今不理會正當處、纔見聖人書中有此語、便要守定不移、疑駁必至於行孫矣。此等風俗、浙江甚盛、殊可慮。 可學

〔校勘〕

○「居甫問」 朝鮮古写本は「徐居甫問」に作る。

○「但」 和刻本は「但」に作る。

〔訳〕

徐居甫がお尋ねした。「『格物窮理』と言いますが、しかし理にはもともとあのようになってもいいし、このようにしてもいいというものがありますね。」先生はおっしゃった。「必ずしもそういうふうに見えることもなからう。理には『正』があり『権』があり、さしあたり学ぶ者はまず『正』に取り組まなければならない。例えば嫁を娶る時は必ず自分の父母に告げなければならないようなことは、学ぶ者がまさに遵守しなければならぬものである。告げずに娶るとなると、本来よくないが、そのような状況に立ち至れば、『正』とは）別の取り組み方になるのだ。例えば君主に仕えるならばその非道を（改めさせて君主を）正しい道へ救い入れるのが、『正』の理である。程伊川の（『易』にいう『約を納るるに牖よ自りす』）についての解説は、『正』の理とは）また違う種類のものである。いまは、この部分（つまり「事君匡救其惡」をしっかりと理解していないのに、先にそれ（つまり伊川説「納約自牖」）に引きつけられたのだ。孔子が『行ひを危くし言は孫そん』と言っていたように、春秋時代でもそうだった（つまり「事君匡救其惡」が『正』の理であった）に違いない。いまは正当（つまり『正』）のほうに取り組まず、聖人の書にこの言葉（『権』）があるのを見ると、そこで固く遵守して譲ろうとせず、やがては必ず行為までも卑屈になってしま

うのだ。このような風習は、浙江辺りが甚だ盛んであり、特に憂えるべきだ。 鄭可学録

〔注〕

(1)「居甫」「朱子語録姓氏」「徐寓、字居父、永嘉人。」「朱子門人」(前掲)に「徐寓、字居父(甫)、號盤州叟。温州永嘉縣(浙江)人」(一八〇頁)とある。

(2)「理有正有權」 権は、物の輕重を量る為のはかり、または輕重を量ること。転じてその時々々の情況に応じて臨機応変に時宜をはかると、またその結果得られた妥当な対処方法。しばしば「經」や「礼」の対概念となる。その場合、「經」や「礼」は規範、常規、「権」は、「經」「礼」にははずれるが妥当な対処法。ここでの「正」は「經」「礼」に相当する。『論語』「子罕」「子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權。」集注「權、稱錘也、所以稱物而知輕重者也。」「孟子」「離婁」上「男女授受不親、禮也。嫂溺援之以手者、權也。」集注「權、稱錘也、稱物輕重而往來以取中者也。權而得中、是乃禮也。」「春秋公羊伝」桓公十一年「權者何。權者、反於經、然後有善者也。」

(3)「至於不告而娶」『孟子』「萬章」上「萬章問曰、詩云娶妻如之何、必告父母。信斯言也、宜莫如舜。舜之不告而娶、何也。孟子曰、告則不得娶。男女居室、人之大倫也。如告、則廢人之大倫、以懟父母、是以不告也。」集注「詩齊國風南山之篇也。信、誠也、誠如此詩之言也。懟、讎怨也。舜父頑母嚚、常欲害舜。告則不聽其娶、是廢人

之大倫、以讎怨於父母也。」『詩經』 國風、齊風「南山」『蘇麻如之何。衡從其畝。取妻如之何。必告父母。既曰告止、曷又鞠止。』

(4) 「事君匡救其惡」『孝經』「事君」「將順其美、匡救其惡。」

(5) 「納約自牖」『周易』「坎」「六四、樽酒簋二、用缶。納約自牖、終无咎。」「語類」卷七一、一一七条、踊淵錄(V 1807)「納約自牖、雖有向明之意、然非是路之正。」伊川『易傳』「人臣以忠信善道結於君心、必自其所明處、乃能入也。人心有所蔽、有所通。所蔽者、暗處也。所通者、明處也。當就其明處而告之求信、則易也。故云、納約自牖。能如是、則雖艱險之時、終得无咎也。」

(6) 「一等」『朱子語類』 詠注 卷十 學四 讀書法上 卷十一

學五 讀書法下(前掲)「一等」は、「一種」と同じ。(一〇一頁)
(7) 「引走」「引去」と同じ。「誘い去る」「引つ張つてゆく」の意。

(8) 「危行言孫」『論語』 憲問「子曰、邦有道、危行危行、邦無道、危行言孫。」集注「孫、卑順也。」

(9) 「駁駁」「次第に」「漸次に」の意。『語類』卷二四、一四三条、林子蒙錄(II 526)「及其漸久、用度日侈、駁駁然日趨於文而不容自已、其勢然也。」

(10) 「浙江甚盛」 浙江の「永康学派」と「永嘉学派」を指すであろう。浙江地方は葉適(号水心、永嘉人)、薛季宣(字士龍、永嘉人)、陳亮(字同甫、永康人)、陳傅良(字君舉、温州瑞安人)等、事項派と呼ばれる人々多数を輩出し、その学风は「功利」的と評されることが多い。『語類』卷九四、二〇四条、甘節錄(VI 2410)「浙間只是權譎功利之淵藪。」「語類」卷一二三、二七条、録者不明(VIII 2967)「江

西之學只是禪、浙學却專是功利。」以下に関連すると思われる条を引く。『語類』卷二七、一一〇条、金去偽錄(II 701)「因有援引比類節忠恕者、曰。今日浙中之學、正坐此弊、多強將名義比類牽合而說。要之、學者須是將許多名義如忠恕・仁義・孝弟之類、各分析區處。如經緯相似、使一一有箇著落。將來這箇道理熟、自有合處。譬如大概舉南康而言、皆是南康人、却也須去其間識得某人為誰、某人在甚處、然後謂之識南康人也。」「語類」卷二七、四條、金去偽錄(IV 1602)「陰陽之理、有會處、有分處、事皆如此。今浙中學者只說合處混一處、都不理會分處。」

40条

問。格物之義、固要就一事一物上窮格、然如呂氏楊氏所發明大本處、學者亦須兼考。曰。識得即事事物物上、便有大本。不知大本、是不會窮得也。若只說大本、便是釋老之學。 德明

〔校勘〕

○「得」 万曆本、和刻本は「得」に作る。

○「事事物物」 万曆本、和刻本は「事々物物」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「格物の意味は、確かに一事一物において(それぞれを)窮め尽くさなければならぬことであるが、しかし呂氏や楊氏によって

明らかとなつた大本のところのようなものも、学ぶ者がまた兼ねて考察しなければならぬでしょう。」先生はおっしゃつた。「事事物物に即して（理を窮める）ということが分かれれば、それが大本を捉えていることである。大本を知らなければ、これは窮め得ることがなかつたということである。もし大本だけを説くならば、それは釈迦や老子の学説である。 廖徳明録

〔注〕

（1）「呂氏楊氏」「呂氏」は呂大臨（字は與叔。生没年不詳）であり、「楊氏」は楊時（字は中立、号は龜山。一〇五三—一一三五）であらう。

（2）「如呂氏楊氏所發明大本處」 呂大臨と楊時が「喜怒哀樂未発の際に中を求める」という工夫論を提起したことを指すであらう。『中庸』に所謂「未発の中」が大本とされる。『中庸章句』第一章「喜怒哀樂未発、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。」「河南程氏遺書」卷一八、八二条「或曰。喜怒哀樂未発之前求中、可否。曰。不可。既思於喜怒哀樂未発之前求之、又却是思也。既思、即是已發。思與喜怒哀樂一般。纔發、便謂之和、不可謂之中也。又問。呂學士言當求於喜怒哀樂未発之前、信斯言也、恐無著模。如之何而可。曰。看此語如何地下。若言存養於喜怒哀樂未発之時、則可。若言求中於喜怒哀樂未発之前、則不可。」また『龜山集』に「且如吾輩、還敢便道自己心得其正否。此須是於喜怒哀樂未発之際、能體所謂中、於喜怒哀樂之後、能得所謂和、致

中和、則天地可位、萬物可育、其於平天下何有。」（卷二二、語録三、余杭所聞）とあり、更に『中庸或問』に「呂氏此章之説、尤多可疑。：其不陥而入浮屠者、幾希矣。盖其病根、正在欲於未発之前、求見夫所謂中者而執之。：程子譏之以為不識大本、豈不信哉。楊氏所謂未発之時、以心驗之、則中之義自見、執而勿失、無人欲之私焉、則發必中節矣。又曰。須於未発之際、能體所謂中。其曰驗之體之執之、則亦呂氏之失也。：大抵楊氏之言、多雜於佛老、故其失類如此。」とある。

41条

致知格物、只是一箇。 道夫 以下致知格物

〔校勘〕

○「箇」 朝鮮古写本は「个」に作る。
○「道夫。以下致知、格物」 朝鮮古写本には、この注記はない。

〔訳〕

致知と格物は、一つ（の事柄）に過ぎない。 楊道夫録 以下は致知格物について

42条

致知格物、一跨底事。先生舉左右指來比並。 泳

〔訳〕

致知と格物は、一つの事ある。先生は右と左の指を挙げて並べた。
湯泳録

〔注〕

(1)「跨」量詞。「個」と同じ。『宋元語言詞典』「跨」亦作為量詞。∴。

亦作「夸」「跨」。

(2)「比並」並べる。『朱子語類』訳注 卷十 学四 読書法上

卷十一 学五 読書法下(前掲)に「比並」は、比べ見ること。」

(二四四頁)とあるが、「比並」は同義語の連語として使われること
もある。

43条

格物は逐物格將去、致知則是推得漸廣。 賜

〔校勘〕

○「得」万曆本、和刻本は「得」に作る。

〔訳〕

格物は、物を一つ一つ次々と当たって(窮め)尽くしていくことで
あり、致知は、つまり徐々に推し広げることである。 林賜録

〔注〕

(1)「格物」「格」は「窮め」尽くす「至る」の意。『語類』本卷、

七条「格物者、格、盡也。須是窮盡事物之理、若是窮得三兩分、便

未是格物。須是窮盡得到十分、方是格物。』『大学章句』経「致知在

格物」集注「格、至也。」

(2)「逐物」「逐物」は、「外物を追い求める」の意があるが、ここ

では「逐事逐物」と同義。

44条

剡伯問格物致知。曰。格物は物物上窮其至理、致知是吾心無所不知。

格物は零細説、致知是全體説。 時舉

〔校勘〕

○「剡伯」朝鮮古写本は「剡」を「郟」に作る。

〔訳〕

龔剡伯は格物と致知についてお尋ねした。先生はおっしゃった。「格
物は一物一物においてその究極の理を窮めることであり、致知は我が

心が知らないところがないようにするということである。格物は細部について説いたものであり、致知は全体について説いたものである。」

潘時拳録

〔注〕

(1) 「刻伯」「刻伯」はこの条にしか見えない。恐らく龔郊伯であろうか。『語類』中に二出する。卷四一、七条、潘時拳録(Ⅲ 1042)「龔刻伯説克己私後、却方復禮。」及び卷二二〇、二二〇条、葉賀孫録(Ⅶ 2915)「如龔郊伯理會也快。」『朱子門人』(前掲)に「龔郊、宗派(『儒林宗派』) 十10作刻。字曇伯、語類四一1661第七條作龔郊伯、源委(『道南源委』) 三12誤作曇伯。自號南峯居士。福州寧德縣(福建)人(二六五頁)とある。『考亭淵源録』卷一八、『朱子実紀』卷八は「龔郊、字曇伯」とする。

45条

張仁叟問致知格物。曰。物莫不有理、人莫不有知。如孩提之童知愛其親、及其長也知敬其兄、以至於飢則知求食、渴則知求飲、是莫不有知也。但所知者止於大略、而不能推致其知以至於極耳。致之為義、如以手推送去之義。凡經傳中云致者、其義皆如此。 時舉

〔校勘〕

○「但所知者止於大略」和刻本は「但」を「但」に作る。成化本、

万曆本、和刻本は「略」を「畧」に作る。

○「凡經傳中云致者」和刻本は「凡」を「凡」に作り、朝鮮古写本は「兄」に誤る。

〔訳〕

張仁叟は格物と致知についてお尋ねした。先生はおっしゃった。「物として理がないことはなく、人として知がないことはない。例えば二、三歳の幼児はその親を愛することを知り、それが大きくなればその兄を敬うことを知り、(更に) お腹がすくと食べ物を求めることを知り、喉が渇くと飲み物を求めることを知るといふことになる、これは(人として) 知がないことはないというものだ。ただ、知るところが大略に止まって、その知を推し尽くして究極までに至らせることができなただけである。『致』という語の意味は、手で推し出して行くような意味である。凡そ経や伝に言う『致』は、その意味は皆このようなのである。 潘時拳録

〔注〕

(1) 「張仁叟」『朱子門人』(前掲)「張仁叟、淵源録二二三〇與宗派十22均無字里。補遺六九22注謂不知為名為字、又不知為何許人。…。語類用字、故仁叟乃字。」(一八八〜九頁)

(2) 「物莫不有理云々」『大学章句』伝第五章「蓋人心之靈莫不有知、而天下之物莫不有理。惟於理有未窮、故其知有不盡也。」

(3) 「知愛其親云々」前出。卷一四、九二条注(1)を参照。

(4)「飢則知求食云々」『孔子家語』「王言解」第三「如飢而食、如渴而飲。」また、卷一四、一五七条注(3)を参照。

46条

問。知如何致。物如何格。曰。孩提之童莫不知愛其親、及其長也莫不知敬其兄。人皆有是知、而不能極盡其知者、人欲害之也。故學者必須先克人欲以致其知、則無不明矣。致字、如推開去。譬如暗室中見些子明處、便尋從此明處去、忽然出到外面、見得大小大明。人之致知、亦如此也。格物は為人君止於仁、為人臣止於敬之類、事事物物各有箇至極之處、所謂止者、即至極之處也。然須是極盡其理、方是可止之地。若得八分、猶有二分未盡、也不是。須是極盡、方得。又曰。知在我、理在物。 祖道

〔校勘〕

○「得」万曆本、和刻本は「得」に作る。

○「問。知如何致。物如何格」朝鮮古写本は、この後に「嘗見南軒說李伯謙云物格則純乎我此將格作扞格之格如先生說只做至字看然而下手着工夫須有个親切處更乞指教」とある。

〔訳〕

お尋ねした。「知はどうやって致し、物はどうやって(窮め)格りますか。」先生はおっしゃった。「二、三歳の幼児はその親を愛するこ

とを知らないことはなく、それが大きくなればその兄を敬うことを知らないことはない。人には皆この知があるが、その知を極め尽くすことができないのは、人欲がそれを損なっているのである。だから学者は先ず人欲を克服してその知を致すべきであり、(そうすれば)明らかでないことはない。『致』の語は、推し広げていくような意味である。例えば暗室の中に(居て)僅かな明るいところが見えて、そこでその明るいところを目指して行くと、忽然と(暗室の)外に出て、こんな大きな明りを見ることとなる。人が知を致すことも、これと同じである。格物は『人の君為りては仁に止まり、人の臣為りては敬に止まる』という類のことであって、一事一物にはそれぞれ一つ究極のところがあり、所謂『止まる』とは、即ち究極のところである。ただその理を極め尽くしてはじめて(それが)止まることができるところとなるのである。もし八割を得て、二割ほど(極め)尽くしていない部分があれば、それも駄目だ。極め尽くしてこそよいのだ。」またおっしゃった。「知は私(つまり人間側)にあり、理は物にある。」 曾祖道録

〔注〕

(1)「孩提之童云々」前条注(2)を参照。

(2)「從此明處去」その明るいところを目指していく。『朱子語類抄』

(前掲)「從…去」は動作の起点ではなく動作の目指す方向を表す。

(三〇八頁)

(3)「大小大」「大小」は「こんなに」「あんなに」の意。「大小大」

は「こんなに多くの」「これほどまでに」「非常に大きな」の意。『詩詞曲語辭匯釈』「大小、估量大小多少之辭。其用法與偌字及這樣那樣字同。…又有習用之大小大一語。」「河南程氏遺書」卷一、八条「又曰。道無真無假。曰。既無真、又無假、却是都無物也。到底須是是者為真、不是者為假、便是道、大小大明分。」「語類」卷一一二、五六条、葉賀孫録（Ⅶ 2736）「夫『天討有罪』、是大小大事。豈可以私廢」など。

(4)「為人君止於仁云々」既出（『語類』卷一四、一〇四条注（1）を参照）。

(5)「方得」ここでは「方行」と同じ。それでこそよい。

47条

黄去私問致知格物。曰。致字有推出之意、前輩用致字多如此。人誰無知、為子知孝、為父知慈、只是知不盡、須是要知得透底。且如一穴之光、也喚做光、然遂旋開割得大、則其光愈大。物皆有理、人亦知其理。如當慈孝之類、只是格不盡。但物格於彼、則知盡於此矣。又云。知得此理盡、則此箇意便實。若有知未透處、這裏面便黑了。 人傑

〔校勘〕

○朝鮮古写本は、本条を卷一四に収録し、かつ冒頭に以下の文がある。「黄去私問。大學知止而後有定至慮而後能得。先生曰。工夫全在知止。若能知止、則自能如此。」この部分は黎靖徳本の卷一四、一七一条、

萬人傑録に相当する（文字の異同に関しては、卷一四、一七一条を参照）。

- 「黄去私問致知格物」朝鮮古写本は「黄去私」の三字がない。
- 「為子知孝為父知慈」朝鮮古写本はこの下に「之類」の二字がある。
- 「得」万曆本、和刻本は「得」に作る。
- 「如當慈孝之類」朝鮮古写本は「當慈孝」を「當慈當孝」に作る。
- 「但物格於彼」和刻本は「但」を「但」に作る。
- 「此箇意便實」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。
- 「若有知未透處」和刻本は「有」を「只」に作る。
- 「這裏面便黑了」朝鮮古写本は「便」字がない。

〔訳〕

黄去私は致知と格物についてお尋ねした。先生はおっしゃった。『致』の字には、推し出すという意味があり、先学はだいたいこのよきな意味で『致』の字を使っていた。人ならば誰が知をもっていないだろうか。子供ならば孝行を知り、父親ならば慈愛を知るが、ただこの知は尽くされていなくて、必ず知を透徹したものにさせなければならぬのだ。例えば一つの（小さい）穴から出た光は、それも光と呼ばれるが、しかし少しずつ削り開けて（穴を）大きくすれば、その光がますます大きくなるのである。物としてどれにも理があり、人もまたその理を知っている。例えば慈愛や孝行をすべきだというような類のもの（は知ってはいるが）、ただ尽くしていかないだけである。しかし物（の理）はあちら（つまり物）において尽くすのであれば、知は

こちらにおいて尽くすのだ。」またおっしやった。「この（一つの）理を知り尽くせば、この一つの意も確實になるのだ。もし知の透徹していないところがまだあれば、その中は暗いものとなるのである。」 萬人傑録

〔注〕

（1）「黄去私」 黄義勇。黄義剛の兄。『宋元学案補遺』卷六九。卷一四、一七一条に既出。

（2）「為子知孝云々」 『大学章句』伝「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。為人君止於仁、為人臣止於敬、為人子止於孝、為人父止於慈、與國入交止於信。」「墨子」「兼愛」下「為人父必慈、為人子必孝。」

（3）「透底」 極点まで到達すること。『語類』卷四、六九条、胡泳録（I）
㊦「理在氣中、如一箇明珠在水裏。理在清底氣中、如珠在那清底水裏面、透底都明。理在濁底氣中、如珠在那濁底水裏面、外面更不見光明處。」

（4）「且如」 『朱子語類』 詛注 卷十 学四 読書法上 卷十一 学五 読書法下（前掲）「且如」は、「例如」「假如」の意。「かりに」。

（八頁）
（5）「喚做」 「〜と呼ぶ、言う、称する」の意。卷一四、二四条に既出。

（6）「逐旋」 徐々に。前出。本巻四条注を参照。

（7）「知得此理盡、則此箇意便實」 『大学章句』 経「知至而后意誠」 集注「知至者、吾心之所知無不盡也。知既盡、則意可得而實矣。」

（8）「這裏面便黑了」「黒」は「黑暗」と同じで、「よく知らない」の意。『語類』 卷三三、三九条、沈憫録（Ⅲ 88）『博學於文』、只是要「習坎心亨」、不特有文義。且如學這一件物事、未學時、心裏不曉、既學得了、心下便通曉得這一事。若這一事曉不得、於這一事上心便黑暗。」

48条

劉圻父説格物致知。曰。他所以下格字致字者、皆是為自家元有是物、但為他物所蔽耳。而今便要從那知處推開去、是因其所已知、而推之以至於無所不知也。 義剛

〔校勘〕

○「劉圻父説格物致知」 朝鮮古写本は「問格物致知」に作る。

○「劉圻父」 呂留良句読本は「劉」を「劉」に作り、朝鮮整版本は

「劉」に作る。

○「但為他物所蔽耳」 和刻本は「但」を「但」に作る。

○「義剛」 朝鮮古写本は「夔孫」。按義剛同。以下致知在格物」に作る。

〔訳〕

劉圻父は格物と致知についてお話しすると、先生はおっしやった。「それ（『大学』）はなぜ『格』の字と『致』の字を使ったかと言うと、どれも自分自身にもともとこの物があるが、ただ他の物に蔽われただ

けだからである。いまはそこでその知つてるところから推し広げていかなければならず、つまりその既に知つてるところに基づいて、それを推して知らないところがないまでに至るのだ。」黄義剛録

〔注〕

(1)「劉圻父」劉子實、字圻父。『朱子語録姓氏』所収。ただし『朱子語録姓氏』諸本のうち、成化本、万曆本、劉氏伝経堂叢書本、和刻本は全て「字所父」に作り、朝鮮整版本のみ「字圻父」に作る。なお『考亭淵源録』卷二三及び『朱子実紀』卷八はともに「字圻父」に作る。『朱子門人』(前掲)「殿学士劉子實、字圻父。宗派十 ∞ 作圻夫。自號篁堞翁。建寧府建陽縣(福建)人。」(三〇四頁)

(2)「但為他物所蔽耳」『大学章句』経、朱注「明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但為氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏。」

(3)「推開去」『語類』卷一五、四六条、曾祖道録「致字、如推開去。」

(4)「是因其所已知、而推之以至於無所不知也」『大学章句』伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。」

49条

郭叔雲問。為學之初、在乎格物。物物有理、第恐氣稟昏愚、不能格至其理。曰。人箇箇有知、不成都無知、但不能推而致之耳。格物理至

徹底處。又云。致知格物、只是一事、非是今日格物、明日又致知。格物以理言也、致知以心言也。 格

〔校勘〕

○朝鮮古写本は、卷十五にはこの条が見えない。
○「第恐氣稟昏愚」万曆本、和刻本は「昏」を「昏」作る。
○「但不能推而致之耳」和刻本は「但」を「但」に作る。

〔訳〕

郭叔雲がお尋ねした。「学問の初歩は、格物にあります。どの物にも理がありますが、ただ恐らく生まれつきの素質が暗くて愚かで、その理を極め尽くすことができないでしょう。」先生はおっしゃった。「人は一人一人に知があり、まさかすべて知がないなどということはあるまいが、ただ推してそれを(究極までに)致すことができただけである。格物とは物の理を究極のところまで窮め尽くすことだ。」またおっしゃった。「致知と格物は、一つの事柄に過ぎず、今日は格物、明日はまた致知、ということではない。格物は理について言うもので、致知は心について言うものである。」林恪録

〔注〕

(1)「郭叔雲」『朱子門人』(前掲)「郭叔雲、字子從。実紀八〇與淵源録二十一」以為潮州陽縣(廣東)人、宗派十 ∞ 則以為隣邑揭陽縣人、而補遺六九 ∞ 從之。淵源録在先、恐宗派誤。」(二〇四頁)

(2) 「不成」まさかゝではあるまい。卷一四の二四条、六〇条、一二四条等に既出。

(3) 「格物理至徹底處」『孝亭淵源録』(下卷二十)は「格物は格物理至徹底處」に作る。今これに従い、「格物は」の三字を補って本文を解釈する。

50条

問。致知は欲於事理無所不知、格物は格其所以然之故。此意通否。曰。不須如此說。只是推極我所知、須要就那事物上理會。致知は自我而言、格物は就物而言、若不格物、何緣得知。而今人也有推極其知者、却只泛泛然竭其心思、都不就事物上窮究。如此、則終無所止。義剛曰。只是說所以致知必在格物。曰。正是如此。若是極其所知去推究那事物、則我方能有所知。 義剛

〔校勘〕

○「問。致知、是欲於事理無所不知」朝鮮古写本は「問一說致知是欲於事理無所不知」に作る。

○「得」万曆本、和刻本は「得」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「致知は事の理において知らないところがないようにすることであり、格物はそのさうである原因を(窮め)尽くすこと

ある。この言い方は正しいでしょうか。」先生はおっしゃった。「そのように言う必要はない。ただ自分の知つてるところを究極まで推すのには、その事物に即して取り組まなければならないのである。致知は(人間の)自分自身において言うものであり、格物は物について言うものであり、もし物(の理)を(窮め)尽くさなければ、何によつて知を得るのか。いまは人々にその知を推し極める者もいるが、しかしただ漫然とその心の思慮を尽くし、誰も事物に即して極め尽くすことをしない。ということ、いつまで経つても『止まる』ところがないのだ。」わたくしがお尋ねした。「ただだから『致知は必ず格物にある』と言うのですね。」先生はおっしゃった。「その通りだ。もしその知つてるところを極めて(それを)推してその事物を究めて行けば、自身にはじめて知つてるところがあるようになるのだ。」 黄義剛録

〔注〕

(1) 「所以然之故」なぜさうでなければならぬかのその原因や理由。『語類』卷一八、九三条、周謨録(II 七七)「問、或問物有當然之則、亦必有所以然之故、如何。曰、如事親當孝、事兄當弟之類、便是當然之則。然事親如何却須要孝、從兄如何却須要弟、此即所以然之故。」「大学或問」「至於天下之物、則必各有所以然之故與其所當然之則、所謂理也。」「朱子語類抄」(前掲)「所以然之故」は「所當然の則」の根柢となるもの。∴。いわば「理の理」といってよい。」(二九五頁)

(2) 「泛泛然」「漫然」の意。『語類』卷一〇、三九条、滕璘録(1

165)「若泛泛然念多、只是皆無益耳。」

(3)「竭其心思」『孟子』「離婁」上「聖人既竭目力焉、繼之以規矩準繩、以為方員平直、不可勝用也。既竭耳力焉、繼之以六律正五音、不可勝用也。既竭心思焉、繼之以不忍人之政、而仁覆天下矣。」

(4)「只是說所以致知必在格物」『語類』卷一五、一四〇条、黃榦錄(1309-10)「大學明明德於天下以上、皆有等級。到致知格物處、便較親切了、故文勢不同、不曰致知者先格其物、只曰致知在格物也。意識而后心正、不說是意識了便心正、但無詐偽便是誠。心不在焉、便不正。」

51条

致知、格物、固是合下工夫、到後亦離這意思不得。學者要緊在求其放心。若收拾得此心存在、已自看得七八分了。如此、則本領處是非善惡、已自分曉。惟是到那變處方難處、到那裏使用子細研究。若那分曉底道理却不難見、只是學者見不親切、故信不及。如漆雕開所謂吾斯之未能信、若見得親切、自然信得及。看得大學了、閒時把史傳來看、見得古人所以處事變處、儘有短長。 賀孫

〔校勘〕

○「閒時」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「閒」を「閑」に作る。

〔訳〕

致知と格物はもとより本来的な工夫であり、後(の工夫)に到ってもこの趣旨(致知格物)を離れることはできない。学ぶ者にとって重要な点は(『孟子』が言う)自らの「放心」を求めるということにある。もし学ぶ者がこの心を収斂して常に持続させれば、既に七、八分のことは分かっても同然だ。このようであれば、根本とするところは非善悪がすではつきりわかっているのである。ただあの変処(「常法が通用しない変則的な場面」)に至ると、それこそが難所なのであって、そこに至ってこそ、子細に研究するのである。かのはつきりとわかる道理というのは、却って理解しやすい。ただ学ぶ者の理解が切実でないから、信じ切れないのだ。(『論語』で)漆雕開が「吾斯を之未だ信ずる能わず」と言ったが、もし理解が切実であれば、自然と信じ切れるのである。『大学』を読み終わってから、暇な時に史書を読むと、古人の変処に対処する方法において大いに優劣が有ったことがわかる。 葉賀孫録

〔注〕

(1)「合下」『朱子語類考文解義』は冒頭からこの句に至るまでの部分に対して以下の注を付している。「合下、猶言本來。此言致知工夫無頓斷之時、雖用工至到之後、猶有未了之意思。若其本領、則只在求放心為要也。」また『語類』卷一八、一〇二条、葉賀孫録(II 上)には「窮理是尋箇是處、然必以恕為本。但恕乃求仁之方。試看窮理如何著得恕字。窮理蓋是合下工夫、恕則在窮理之後。胡文定

載顯道語云、恕則窮理之要。某理會、安頓此語不得。」とあり、「恕」を「窮理」より根源的なものとする謝上蔡の説を批判して、「窮理」は「恕」より根源的であると説くものである。「合下」には「眼前において」や「本来」などの意味があるが、これらを合わせて考えるに、ここでは「本来」の意味とするのが適当と考えられる。

(2) 「要緊」「要緊」は急所、ポイントの意。三浦國雄『朱子語類抄』一七二頁参照。卷一四、三七条に既出。

(3) 「求其放心」 散逸した心を収斂し把握把持することを意味する。『孟子』に出典を持つ。『孟子』「告子上」上「孟子曰、仁、人心也。義、人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。人有雞犬放、則知求之、有放心、而不知求。學問之道無他、求其放心而已矣。」また「敬」に通じる。朱子学では涵養（敬）と進学（致知）の両面の工夫を重視するが、持敬居敬を致知の前提条件とする。ここでは「求放心（＝居敬）」の工夫が格物致知に先だつて重要であることを説く。『語類』卷一二、八〇条、黄義剛録（I 209）「敬字、前輩都輕説過了、唯程子看得重。人只是要求放心。何者為心。只是箇敬。今纔敬時、這心便在身上了。』『河南程氏遺書』卷三、九八条「入道莫如敬、未有能致知而不在敬者。」同、卷一八、二八条「涵養須用敬、進學則在致知。」（ともに程頤の語）。『孟子』「告子上」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」朱注「學問之事、固非一端、然其道則在於求其放心而已。蓋能如是則志氣清明、義理昭著、而可以上達。不然則昏昧放逸、雖曰從事於學、而終不能有所發明矣。故程子曰。聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心約之、使反復入身來、自能尋向上去、下學而上達也。」

此乃孟子開示切要之言、程子又發明之、曲盡其指、學者宜服膺而勿失也。」また『孟子』の「放心」と『大學』の「格物致知」を関連付けて説いたものとしては以下を参照。『語類』卷一〇四、二八条、葉賀孫録（VII 267）、「孟子所以云收放心、亦不是説只收放心便了。收放心、且收斂得箇根基、方可以做工夫。若但知收放心、不做工夫、則如近日江西所説、則是守箇死物事。故大學之書須教人格物致知以至於誠意正心修身齊家治國平天下、節節有工夫。」

(4) 「收拾」「收斂」を意味する。この一節は心をしつかり収斂すれば格物致知によって理を洞察する条件が十分に整うということを比喩的に言つたもの。『語類』卷一二、三二条、游敬仲録（I 202）「人若要洗刷舊習都淨了、却去理會此道理者、無是理。只是收放心、把持在這裏、便須有箇真心發見、從此便去窮理。」

(5) 「本領」「根本」の意。卷一四、三七条に既出。

(6) 「已自」二字で「すでに」。「自」は単に二音節にするために添えられたもの。三浦國雄『朱子語類抄』七一頁、九六頁。卷一四、一五八条、一六二条に既出。

(7) 「惟是到那變處」「變」「變處」は「常」「常處」と対を為す概念で、イレギュラーな事態・場面。『語類』卷三七、二七条、鄭可學録（III 386）「讒可與共學、有志於此、可與適道、已看見路脈、可與立、能有所立可與權、遭變事而知其宜、此只是大綱如此説。」とあるように、朱子はこの「變」を『春秋公羊伝』に由来する「經」「權」の思想と関連させて考える。「常」は「經」によって、「變」は「權」によってそれぞれ解決され得るものであるが、朱子は「權」は決して「經」

と対立・矛盾するものではなく、究極的には「經」と合致するものである、と考へる。故に「子細研究」によつて「經」と合致するよ
うな「權」が求められるのである。「變」「常」については以下を参照。

『語類』卷一五、一三三條、陳淳録（I 307）「毅然問。家齊而后國治、天下平。如堯有丹朱、舜有瞽瞍、周公管蔡、却能平治、何也。曰。堯不以天下與丹朱而與舜、舜能使瞽瞍不格姦、周公能致辟於管蔡、使不為亂、便是措置得好了。然此皆聖人之變處。想今人家不解有那瞽瞍之父、丹朱之子、管蔡之兄、都不須如此思量、且去理會那常處。」
『語類』卷一六、二〇九條、葉賀孫録（II 339）「問。齊家治國之道、斷然是父子兄弟足法、而後人法之。然堯舜不能化其子、而周公則上見疑於君、下不能和其兄弟、是如何。曰。聖人是論其常、堯舜是處其變。看他烝烝、不格姦、至於瞽瞍底豫、便是他有以處那變處。」
『語類』卷三七、五〇條、陳文蔚録（III 991）「因論經權二字、曰。…文蔚曰。經是常行之理、權是適變處。曰。大綱說、固是如此。」「經」「權」については以下を参照。『語類』卷三七、四八條、潘時舉録（III 991）「因論經、權二字曰、漢儒謂權者、反經合道。却是權與經全然相反、伊川非之。是矣。然却又曰、其實未嘗反經、權與經又却是一箇、略無分別。恐如此又不得。權固不離於經、看可與立、未可與權、及孟子嫂溺援之以手事、毫釐之間、亦當有辨。文蔚曰、經是常行之理、權是適變處。曰、大綱說、固是如此。要就程子說中分別一箇異同、須更精微。文蔚曰、權只是經之用。且如稱衡有許多星兩、一定而不可易。權往來稱物、使輕重恰好、此便是經之用。曰、亦不相似。大綱都是、只爭些子。伊川又云、權是經所不及者。此說方盡。經只是

一箇大綱、權是那精微曲折處。且如君仁臣忠、父慈子孝、此是經常之道、如何動得。其間有該不盡處、須是用權。權即細密、非見理大段精審、不能識此。可與立、便是可與經、却未可與權、此見經權毫釐之間分別處。」

(8) 「方難處」「方」「方是」「才」「才是」と同じで、「それでこそ」「それこそ」の意。卷一四、八五條、九八條、一四三條参照。

(9) 「信不及」「信得及」「信得及」は「信じ切る」。その反対が「信不及」。入矢義高・古賀英彦『禪語辭典』頁二二八参照。卷一四、五條に既出。

(10) 「吾斯之未能信」『論語』「公冶長」「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說。」朱注「漆雕開、孔子弟子、字子若。斯、指此理而言。信、謂真知其如此、而無毫髮之疑也。開自言未能如此、未可以治人、故夫子說其篤志。」

(11) 「親切」「切實」の意。卷一五、三六條既出。

(12) 「處事」「対処する」の意。『春秋左氏伝』文公十八年「先君周公制周礼曰、則以觀德、德以處事」疏「既有善德、乃能制斷事宜、故曰德以處事也。」

(13) 「儘有短長」「儘」は甚だ、大いに。「短長」は優劣。史書を讀む際に「事變」に注意して讀まねばならないことを説いたものとしては以下の条がある。『語類』卷一九、五條、楊方録（VII 2866）「臨行請教。曰。累日所講無非此道、但當勉之。又曰。持守可以自勉、惟窮理須講論、此尤當勉。又曰。經書、正須要讀。如史書、要見事變之血脈、不可不熟。」

人之一心、本自光明。常提撕他起、莫為物欲所蔽、便將這箇做本領、然後去格物致知。如大學中條目、便是材料。聖人教人、將許多材料來修治平此心、令常常光明耳（原注、按修治字疑）。伊川云、我使他思時便思、如此方好。倘臨事不醒、只爭一晌時、便為他引去。且如我兩眼光嗒嗒、又白日裏在大路上行、如何會被別人引去草中。只是我自昏睡、或暗地裏行、便被別人胡亂引去耳。但只要自家常醒得他做主宰、出乎萬物之上、物來便應。易理會底、便理會得、難理會底、思量久之也理會得。若難理會底便理會不得、是此心尚昏未明、便用提醒他。 驥

〔校勘〕

- 「修治平此心」 朝鮮古写本は「修治平」を「修持」に作る。朝鮮整版本は「平」を小字に作る。
- 「按修治字疑」 朝鮮古写本にはこの校語はない。朝鮮整版本卷末「考異」に「修治謂修治此心也。非指修身治國、恐無可疑。治字、或借為去聲。註以平、其義尤明。」
- 「批臨事不醒」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「批」を「儻」に作る。
- 「只爭一晌時」 成化本、万曆本、呂晚村句読本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「晌」を「餉」に作る。劉氏伝経堂叢書本「朱子語類正譌」「晌時、原作餉、非。」
- 「嗒嗒」 底本は「嗒嗒」に作るが、呂晚村句読本、劉氏伝経堂叢

書本を含めて諸本は「嗒嗒」に作る。今、諸本に従う。

- 「如何會被別人引去草中」 成化本、万曆本、和刻本は「被別」を「別被」に作る。朝鮮整版本卷末「考異」「被別一作別被」
- 「只是我自昏睡」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「昏」を「昏」に作る。
- 「若難理會底便理會不得」 朝鮮古写本は「若」字と「便」字がない。
- 「是此心尚昏未明」 朝鮮古写本は「昏」を「昏」に作る。
- 「驥」 朝鮮古写本は「道夫」に作る。

〔訳〕

人の心というものは本来光り輝いているのであり、常にそれ呼び覚まし、物欲によって覆い隠されてしまうことがないようにし、これを根本とした上で、然る後に格物・致知をするのだ。『大学』中の条目というのは（その内容を実践することで組み立てることができる）材料である。聖人は人に教えるのに、多くの材料によって己の心を修めさせ、いつも光り輝くようにさせているのだ。（原注「思うに、修治の字句には疑義がある」）伊川は「私はそれ（心）に、思慮すべき時に思慮するようにさせおり、そのようにすることこそよいのだ。」と言っている。もし、事柄に対処するに際して心が覚醒していないならば、一刻を争う時に直ぐに（心が）その事柄に引つ張られていってしまう。たとえば私が両目の眼光を爛々とさせてしかも白昼大通りを歩いていたとして、どうして他人によって草むらに引つ張られていってしまうようなことがあり得ようか。ただ自分が眠り込んでしまった

り、暗闇の中を歩いたりすると、たやすく他人によって出鱈目に引つ張られてしまう。とにかく自らが常に心を覚醒させてそれを（一身の）主宰として、万物の上位に出だせば、外物が来ても、たちどころに応ずるのである。取り組みやすい事柄は、すぐに取り組むことができる。取り組み難い事柄も、長らく思索を重ねれば、やはり取り組むことができるのだ。もし取り組み難い事柄に取り組み得ないのであれば、それはこの心がお昏迷して明晰でないということだから、それを呼び覚まさせてやることだ。 楊驥録

〔注〕

- (1) 「人之一心、本自光明。常提撕他起、莫為物欲所蔽」「本自」は元來、本より。「自」は単に二音節にするために添えられたもの。三浦國雄『朱子語類抄』七一頁、卷一四、九二条、一一五条に既出。また『大学章句』經「明明德」、朱注「明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但為氣稟所拘人欲所蔽、則有時而昏、然其本體之明、則有未嘗息者。故學者當因其所發而遂明之。」
- (2) 「提撕」「提醒」と同義で覺醒させること、呼び覚まし目覚めさせること。卷一四、六八条、七二条、一〇七条に既出。興膳宏他『朱子語類訳注 卷十〜十一』卷一一、一九条、参照。『上蔡語録』卷中、三七条「敬是常惺惺法。」とあるように、「提撕」「提醒」は「敬」の工夫でもある。
- (3) 「將」「將」は文言の「以」、現代中国語の「把」と同じく、「〜で」の意。卷一四、八条、二〇条等に既出。

- (4) 「本領」 本源、根本の意。
- (5) 「然後去格物致知。」「敬」によって収斂した心を本根に据えた上で格物致知に取り組めということ。『語類』卷一四、一〇七条参照。
- (6) 「如大學中條目、便是材料。」「格物」乃至「平天下」の八条目。『大学章句』經「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」朱注「此八者、大學之條目也。」「大学」はあくまで学問の指針を示したもので、それだけでは空虚であり、実践が伴って始めて意味を持つことを言う、と考えられる。『語類』卷一四、一二条、卷一四、二六条条参照。
- (7) 「按、修治字疑」 黎靖徳の校語。黎靖徳は「修治」を衍文と見なしたものと思われる。但し〔校勘〕に引いたように朝鮮整版本の編者は、「平」を「治」に対する音注（平声）と見なし、本文を「將許多材料來修治此心」と読んでいる。今、これに従って解釈しておく。「修治」の用例としてはたとえ以下を参照。『語類』卷三四、一二条、葉賀孫録（Ⅲ 83）論語、述而、「徳之不修章」 「徳者、道理得於吾心之謂。修者、言好修治之之謂。」
- (8) 「伊川云我使他思時便思如此方好。」 以下を指す。『二程遺書』卷一八、八五条「或曰、孔子嘗夢見周公、當如何。曰、此聖人存誠處也。聖人欲行周公之道、故雖一夢寐、不忘周公。及既衰、知道之不可行、故不復夢也。然所謂夢見周公、豈是夜夜與周公語也。人心雖要定、使佗思時方思乃是。今人都由心。曰、心誰使之。曰、以心使心則可、人心自由、便放去也。」また、この議論は『孟子』「告子」

上を踏まえる。「曰、耳目之官不思、而蔽於物、物交物、則引之而已矣。心之官則思、思則得之、不思則不得也。此天之所與我者、先立乎其大者、則其小者弗能奪也。此為大人而已矣。」朱注「官之為言、司也。耳司聽、目司視、各有所職而不能思。是以蔽於外物。既不能思而蔽於外物、則亦一物而已。又以外物交於此物、其引之而去、不難矣。心則能思而以思為職。凡事物之來、心得其職、則得其理而物不能蔽。失其職、則不得其理而物來蔽之。此三者、皆天之所以與我者、而心為大。若能以有以立之、則事無不思而耳目之欲不能奪之矣。此所以為大人也。」また「方好」の「方」は「才」「才是」と同じで、「それでこそ」「それこそが」の意。卷一四、八五條、九八條、一四三條、卷一五、五一條参照。

(9)「只爭一晌時」「晌」『漢語大詞典』「片刻、一會兒。泛指不久久的時間。」諸本は「餉」に作るが、劉氏伝経堂叢書本が「晌」に改めた。ただし「餉」も「晌」と同義である。『漢語大詞典』餉、用同「晌」。一會兒。「晌」「餉」の用例は以下の通り。『語類』卷八、二九條、周謨録（I 133）「世俗之學、所以與聖賢不同者、亦不難見。聖賢直是真箇去做、說正心、直要心正。說誠意、直要意誠。修身齊家、皆非空言。今之學者說正心、但將正心吟詠一晌。說誠意、又將誠意吟一晌。說修身、又將聖賢許多說修身處諷誦而已。或攝拾言語、綴緝時文。如此為學、却於自家身上有何交涉。」『語類』卷八、六六條、林恪録（I 135）「學者為學、譬如煉丹、須是將百十斤炭火煨一餉、方好用微微火養教成就。今人未曾將百十斤炭火去煨、便要將微微火養將去、如何得會成。」

(10)「且如」たとえば、仮に、の意。興膳宏他『朱子語類訳注』卷十「十一」七條注参照。

(11)「便被別人胡亂引去耳」「胡亂」はでたらめに。卷一四、一七條に既出。

(12)「只要自家常醒得他做主宰」『大学章句』「欲誠其意者先正其心」朱注「心者身之所主。」

(13)「驥」楊驥、字は子昂、浦城の人。楊道夫の族兄。なお本条のように、諸本における「楊驥録」を朝鮮古写本が「道夫録」に作る例は、卷一四、八九條、九五條にも見られる。

53条

問。致知在格物。曰。知者、吾自有此知。此心虚明廣大、無所不知、要當極其至耳。今學者豈無一斑半點。只是為利欲所昏、不曾致其知。孟子所謂四端、此四者在人心、發見於外。吾友還曾平日的見其有此心、須是見得分明、則知可致。今有此心而不能致、臨事則昏惑、有事則膠擾、百種病根皆自此生。

又問。凡日用之間作事接人、皆是格物窮理。曰。亦須知得要本。若不知得、只是作事、只是接人、何處為窮理。

〔校勘〕

○「只是為利欲所昏」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「昏」を「昏」に作る。

○「須是見得分明、則知可致」 朝鮮古写本は「知可致」を「致知可至」に作る。

○「臨事則昏惑」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「昏」を「昏」に作る。

〔訳〕

「致知は格物に在り」についてお尋ねした。先生「知というのは、自分は本来この知を持っている。この心は（本来）澄み切って広大であり、知らないところがないものだけでも、その極限を極めなければならぬ。今の学ぶ者にも、どうしてほんの少しの「知」もない等ということがあろうか。ただ利欲に蔽われているため、知を致したことが全くないのだ。孟子が言う四端は、この（仁義礼智の）四者が心に在って外に発現したものである。諸君は平素、この心（＝四端の心）が確かに存在することを、まざまざと実感したことがあるだろうか。是非ともそのことを明瞭に認識すべきであって、そうすれば知を致すことができるのだ。今この心は有っても致知ができないと、事に臨んでは困惑し、非常時には混乱してしまう。あらゆる弊害の原因は全てここから生じるのである。」

またお尋ねした。「日常生活において、事を為したり、人に接したりすることも、皆格物窮理なのでしょうか。」先生「これらについてはまた根本を知らなくてはならない。もし知ることができなければ、事を為すだけ、人に接するだけであり、一体どうして窮理と言えようか。」

〔注〕

(1) 「此心虚明广大」『大学章句』経「明明德」、朱注「明德者、人之所以得乎天、而虚灵不昧、以具衆理而應萬事者也。」

(2) 「一斑半點」「一斑」も「半點」も「ほんのわずか」の意。以下の用例がある。『語類』卷六七、一五九条、潘時舉録(V 1678)「…今學者、須貴於格物。格、至也。須要見得到底。今人只是知得一斑半點、見得些子、所以不到極處也。」

(3) 「四端」「惻隱、羞惡、辭讓、是非」を言う。『孟子』「公孫丑」上の四端説に基づく。「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四體也。」朱注「惻隱、羞惡、辭讓、是非、情也。仁、義、禮、智、性也。心、統性情者也。端、緒也。因其情之發、而性之本然可得而見、猶有物在中而緒見於外也。」整理すると「仁義礼智」は人の心の本性であり、これが外に発現したものが「四端」であるから本条の「此四者」は「仁義礼智」であると解される。

(4) 「吾友」 朱子がしばしば弟子に対して用いる二人称。三浦國雄『朱子語類抄』七一頁「吾友」注参照。

(5) 「有事則膠擾」「膠擾」は「膠膠擾擾」と同じ。乱れてさわがしい。『語類』卷八、一三三条、廖德明録(I 122)「常使截斷嚴整之時多、膠膠擾擾之時少、方好。」「語類」卷五九、一六八条、廖德明録(IV 1416)「先立乎大者、則小者不能奪。今忘前失後、心不主宰、被物引將去、致得膠擾、所以窮他理不得。」

(6) 「若不知得、只是作事、只是接人、何處為窮理。」形而下の日常

生活における工夫が形而上的な道理の体得へと繋がるが、ただその工夫をなすのみでは道理の体得にはならない、とする主張は以下において顕著に現れる。『論語』「憲問」「子貢曰、何為其莫知子也。

子曰、不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎。」朱注「不得於天而不怨天、不合於人而不尤人。但知下學而自然上達。此但自言其反己自脩、循序漸進耳。無以甚異於人而致其知也。然深味其語意、則見其中自有人不及知而天獨知之之妙。蓋在孔門、惟子貢之智、幾足以及此。故特語以發之。惜乎其猶有所未達也。故特語以發之惜乎其猶有所未達也。○程子曰、不怨天不尤人、在理當如此。又曰、下學上達、意在言表。又曰、學者須守下學上達之語、乃學之要。蓋凡下學人事便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣。」

54条

致知分數多。如博學、審問、慎思、明辨、四者皆致知、只力行一件是行。言致、言格、是要見得到盡處。若理有未格處、是於知之之體尚有未盡。格物不獨是仁孝慈敬信五者、此只是大約說耳。且如說父子、須更有母在、更有夫婦在。凡萬物萬事之理皆要窮。但窮到底無復餘蘊、方是格物。 大雅

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「慎思」成化本、朝鮮整版本は「慎」を「謹」に作る。南宋孝宗

の諱「昀」の忌避。卷一四、一六九条、卷一五、二二条参照。

〔訳〕

致知は（工夫全体に占める）割合が多い。（中庸の）博學・審問・慎思・明辨の四者はすべて致知であり、力行の一つだけは行いである。『大学』に「致」と言い「格」と言うのは至り尽くすところを理解しようということである。もし理に窮めていないところがあれば、「これを知る」ということの本質においてまだ窮め尽くしていないところがあるのである。格物というのはただ（『大学』の伝の）仁孝慈敬信の五者だけなのではなく、これらはただその大要を言うだけだ。もし父子について言うならば、更に母もあり、更に夫婦もあるに違いない。凡そ万物万事の理は全て窮めなければならない。ただ徹底的に窮めて余すところが無くなって、そこで始めて格物なのである。 余大雅録

〔注〕

（1）「分數」「割合」の意。『二程遺書』卷一、一七条「義理與客氣常相勝、又看消長分數多少、為君子小人之別。」

（2）「博學、審問、慎思、明辨……力行」『中庸章句』二〇章「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。……子曰。好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。」

（3）「仁孝慈敬信」『大學章句』伝三章「為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝。為人父、止於慈。與國人交、止於信。」

（4）「且如」「たとえば、かりに」『語類』卷一四、二二条に既出。

(5)「但方是」」「して始めて」なのだ』『語類』には「須是方是」の形で頻出。

55条

致知格物、便是志於道。據於德、却是討得箇匡格子。據於德、却是討得箇匡格子。 義剛

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

〔訳〕

致知格物というのは、『論語』の「道を志す」ということだが、「徳に據る」の方は（模範とすべき）輪郭を求め得るということである。

黄義剛録

〔注〕

(1)「志於道」「據於德」『論語集註』「述而」「志於道、據於德、依於仁、遊於藝。」「志於道」朱注「志者、心之所之之謂。道、則人倫日用之間所當行者、是也。知此而心必之焉、則所適者正、而無他岐之惑矣。」「據於德」朱注「據者、執守之意。德者、得也。得其道於心而不失之謂也。得之於心而守之不失、則終始惟一、而有日新之功矣。」「志於道」「據於德」の區別を説いたものとしては以下を参照。『語

類』卷三四、五〇条、葉賀孫録（Ⅲ 885）「正卿問、志道據德依仁。曰。德、是自家心下得這箇道理、如欲為忠而得其所所以忠、如欲為孝而得其所所以孝。到得依於仁則又不同。依仁則是此理常存於心、日用之間常常存在。據德依仁雖有等級不比、志道與據德依仁全是兩截。志只是心之所之、與有所據有所依不同也。」

(2)「便是」却是」」「は」で、一方は「だ」『語類』中に散見。

(3)「討得」「求め得る」の意。『語類』中に散見。

(4)「匡格子」このままでは意味が通じない。『語類』卷七四、一〇一条、林學履録（V 1894）「問。範圍天地之化而不過。曰。天地之化、滔滔無窮、如一爐金汁、鎔化不息。聖人則為之鑄瀉成器、使人模範匡郭、不使過於中道也。…」とあり、「匡格」は「匡郭」と音が近く、「匡郭」は一般に版本における印面の外枠のことであり、ここでは「輪郭」という意味として用いられていると考えられる。よってこの条の「匡格」は「匡郭」の意と考えた。古い用例としては『周易參同契』には「乾坤者易之門戶、衆卦之父母。坎離匡郭、運轂正輻。」とある。

56条

格物、致知、是極粗底事、天命之謂性、是極精底事。但致知格物、便是那天命之謂性底事。下等事、便是上等工夫。 義剛

〔校勘〕

○諸本異同無し

〔訳〕

「格物致知」というのは（その対象は）極めて粗なる事柄（＝形而下の事柄）であり、「天命をこれ性と謂う」というのは極めて精なる事柄（＝形而上の事柄）である。けれども「致知格物」（によって窮められる理）は、あの「天命をこれ性と謂う」と同じなのだ。つまり下等な事柄（＝形而下の営み）とは、とりも直さず上等（＝形而上）に至るための工夫なのである。 黄義剛録

〔注〕

（1）「格物致知、是極粗底事。天命之謂性、是極精底事。」天命の性は形而上の理そのものであるが、格物致知は形而下の器に即して形而上の理を窮める営みであるので、この違いを対比して精粗と述べたものと考えられる。『語類』卷六二、七二条、沈僩録（IV 178）「又曰。大學所以說格物、却不說窮理。蓋說窮理、則似懸空無捉摸處。只說格物、則只就那形而下之器上、便尋那形而上之道。」形而下の日常生活における工夫が形而上的な道理の体得へと繋がる、とする主張は卷十五、五三条、及び注参照。

57条

曹又問致知格物。曰。此心愛物、是我之仁、此心要愛物、是我之義、若能分別此事之是、此事之非、是我之智、若能別尊卑上下之分、是我之禮。以至於萬物萬事、皆不出此四箇道理。其實只是一箇心、一箇根、祇出來抽枝長葉。 卓

〔校勘〕

○「以至於萬物萬事」朝鮮古写本には「萬事」の二字なし。

○「其實只是」朝鮮古写本は「只」を「則」に作る。

〔注〕

曹がまた致知格物についてお尋ねした。先生「この心が物を愛するというのは、『自分の仁』であり、この心が物を愛さねばならない、というのには『自分の義』であり、もしある事の是非を分別できれば、『自分の智』であり、もし尊卑上下の分別ができれば、『自分の礼』である。そして万事萬物に至るまで皆この四つの道理を離れない。そしてその実、これらはただ一つの心なのであり、一つの根っこが発して伸びた枝、成長した葉っぱなのだ。」 黄卓録

〔注〕

（1）「曹又問」曹叔遠、字器遠か。本卷一条（葉賀孫録、黄卓録）に「器遠問」「曹問」「曹兄問」との記述が有る。

(2)「此心愛物、是我之仁」『論語集注』「学而」「有子曰、其為人也孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者、未之有也。」朱注「仁者愛之理、心之德也。」

(3)「我之仁：我之義、我之禮：我之智」『中庸或問』「蓋天命之性、仁義禮智而已。循其仁之性、則自父子之親、以至於仁民愛物、皆道也。循其義之性、則自君臣之分、以至於敬長尊賢、亦道也。循其禮之性、則恭敬辭讓之節文、皆道也。循其智之性、則是非邪正之分別亦道也。」

(4)「以至於萬物萬事、皆不出此四箇道理。其實只是一箇心、一箇根、祇出來抽枝長葉。」「抽枝長葉」は「枝や葉が伸びている様」『語類』に数度用例が見える。『語類』卷六八、八八条、黄卓録(V 170)「問。保合大和乃利貞。曰。天之生物、莫不各有軀殼。如人之有體、果實之有皮核、有箇軀殼保合以全之。能保合、則真性常存、生生不窮。如一粒之穀、外面有箇殼以裹之。方其發一萌芽之始、是物之元也。及其抽枝長葉、只是物之亨、到得生實欲熟未熟之際、此便是利。：」

万事万物が仁義礼智を出ないとするのは、朱子は天徳の元亨利貞は人性における仁義礼智と相即すると考えるからであり、仁義礼智はその実は一体である、とするのは、「偏言の仁」を含む仁義礼智を合わせて言えば「專言の仁」になると考えるからである。以上の思想は以下の問答において確認できる。『語類』卷六、六七条、葉賀孫録(I 111~113)「且如程先生云、偏言則一事、專言則包四者。上云、四徳之元、猶五常之仁。恰似有一箇小小底仁、有一箇大大底仁。偏言則一事、是小小底仁、只得得仁之一事。專言則包四者、是大大底仁、又是包得禮義智底。若如此説、是有兩様仁。不知仁只是一箇、

雖是偏言、那許多道理也都在裏面。雖是專言、那許多道理也都在裏面。」

58条

蔣端夫問。致知在格物。胸中有見、然後於理無不見。曰。胸中如何便有所見。譬如嬰兒學行、今日學歩、明日又歩、積習既久、方能行。天地萬物莫不有理。手有手之理、足有足之理、手足若不舉行、安能盡其理。格物者、欲究極其物之理、使無不盡、然後我之知無所不至。物理即道理、天下初無二理。 震

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「胸中有見」「胸中如何便有所見」成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「胸」を「智」に作る。

〔訳〕

蔣端夫がお尋ねした。「『致知は格物に在り』というのは、胸中に(道理を)体得することがあって、それから理においてわからないことがなくなる、ということでしょうか。」先生「(事物に接することもしないで)胸中にどうして(道理を)体得することが有ろうか。例えば赤ん坊が歩くことを学ぶのに、今日も歩くことを学び、明日もまた歩き、ひたすら長い間積み重ねることによって歩くことができるようになる

のだ。天地万物に理のない物はない。手には手の理があり、足には足の理があるけれども、手足はもし挙げたり歩いたりしないなら、どうしてその理を尽くすことができようか。格物というのは、その物の理を窮め尽くそうとして、窮めないものはないようにすることであって、そうすれば自己の知も至らないところはないのだ。物の理というのは取りも直さず道理であり、天下には最初から二つの理はないのだ。」

鍾震録

〔注〕

(1)「蔣端夫」『語類姓氏』に記載がなく、『朱子門人』も姓氏不詳とする。ただ以下の条において質問者として記述されている。『語類』

卷六一、八一条、鍾震録(IV 158)「蔣端夫問。聞知、見知、所知者何事。曰。只是這道理、物物各具一理。又問。此道理如何求。謂見之於心、或求之於事物。曰。不知所求者何物。若不以心、於何求之。求之於事物、亦是以心。」この条でも蔣端夫は道理は内省によって得られると考え、朱子に注意されている。

(2)「積習」「長いこと積み重ねること」三浦國雄『朱子語類抄』

三八頁注参照。

59条

問。知至意識、求知之道、必須存神索至。不思則不得誠。是否。曰。致知格物、亦何消如此說。所謂格物、只是眼前處置事物、酌其輕重、

究極其當處、便是。亦安用存神索至。只如吾胸中所見一物有十分道理、若只見三分、便是見不盡。須是推來推去、要見盡十分、方是格物。既見盡十分、便是知止。震

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「便是知止」朝鮮整版本は「便是知至」に作る。

○「只如吾胸中所見」成化本、万曆本、朝鮮整版本、和刻本は「胸」を「胷」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「知至意識というのは、知を求める道であり、必ず〔法言〕の言うように）自らの精神を保持して究極のところを求めるところにしなければならない。（『孟子』の「思はざれば則ち之を得ず」のように）内省しなければ意を誠にすることはできないのではないでしようか。先生「致知、格物はどうしてこのように言う必要があるか。『大學』の格物というのは眼前において事物に対処し、その軽重を察し、至当の所を窮め尽くすということである。どうして（内面的な修養の）「存神索至」を用いようか。たとえば自分の胸中において理解しているところの一物が十割の道理を持っていて、もしそのうちのたった二三割しか理解できていなかったなら、理解し尽くしてはいない。必ずひたすら推し極めて十分理解し尽くさねばならず、それでこそ格物なのである。既に十分に理解し尽くしてしまえば、それがつまり『止ま

るを知る』ということである。」 鍾震録

〔注〕

(1)「存神索至」 揚雄『法言』「問神」「聖人存神索至、成天下之大順、致天下之大利。」李軌注「存其精神、探幽索至。」

(2)「不思則不得」 『孟子』「告子」上「心之官則思。思則得之、不思則不得也。」

(3)「亦何消如此說」 「消」は要する、必要とする。「何消」は「不消」と同じく、必要としない、不要であるの意。

(4)「推來推去」 ひたすら推し極める。「く來く去」はひたすらくする、存分にくする。

(5)「知止」 『大学章句』經「知止而后有定。定而后能静。静而后能安。安而后能慮。慮而后能得。」朱注「后與後同。後放此。○止者所當止之地、即至善之所在也。知之則志有定向。静謂心不妄動。安謂所處而安。慮得謂處事精詳、得謂得其所止。」

60条

或問。致知須要誠。既是誠了、如何又說誠意。致知上本無誠字、如何強安排誠字在上面說。爲學之始、須在致知。不致其知、如何知得。欲致其知、須是格物。格物云者、要窮到九分九釐以上、方是格。謙

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五無此条。

○「致知上本無誠字」 成化本、朝鮮整版本「致」上有「曰」字。

〔訳〕

ある人が問うた。「知を致すには、(前提として) 誠である必要があります。既に誠であるのに、(八条目では) どうしてその上また「誠意」というのですか。」(先生がいう)「致知には、本もと「誠」という字がないのに、どうしてわざわざ、そこに「誠」をくっつけて説こうとするのか。学問の基本は、必ず致知にある。知を致さなければ、どうして理解することができようか。知を致そうとすれば、格物する必要がある。格物とは、九分九厘以上を窮めつくしてこそ、はじめて「格」なのである。」 廖謙録

〔注〕

(1)「致知須要誠」 「致知には(前提として) 誠である必要がある」とする議論には、次の条が参考になる。『語類』卷一八、七二条、葉賀孫録(II 407)「問。伊川説格物致知許多項、當如何看。…又云。用誠敬涵養爲格物致知之本。」

(2)「致知上本無誠字…」 中華書局標点本では、「爲學之始」から朱子の言葉とするが、成化本、朝鮮整版本には、この前に「曰」字があること、及び文意から、ここから朱子の答えとした。

(3)「安排」 あれこれだから、処置するなどの意。ここでは、「言

葉を配置する」の意。卷一四、一六条注(2)を参照。

(4)「上面」ここでは、「上」という意味ではなく、「そこに」など場所を示す。卷一四、三七条、葉賀孫録「公便要去上面生意、只討頭不見」など。

(5)「爲學之始、須在致知」『語類』本卷、四九条、林恪録「郭叔雲問、爲學之初、在乎格物。物物有理、第恐氣稟昏愚、不能格至其理。曰、人箇箇有知、不成都無知、但不能推而致之耳。格物理至徹底處。」

(6)「要窮到九分九釐以上、方是格」『語類』本卷、七条、葉賀孫録では、「格物者、格、盡也、須是窮盡事物之理。若是窮得三兩分、便未是格物。須是窮盡得到十分、方是格物」といい、「百パーセント窮め尽くしてこそ、格物である」とする。また、『語類』には、「九分九釐厘九毫」という言い方もある。卷一八、一二五条、沈僩録(Ⅱ 43)「便做九分九釐九毫要爲善、只那一毫不要爲底、便是自欺、便是意不實矣。」

(7)「要…方…」：「…してこそ、…である」。「要…始…」に同じ。

61条

若不格物致知、那箇誠意正心、方是捺在這裏、不是自然。若是格物致知、便自然、不用強捺。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五無此条。

〔訳〕

もし格物致知しなければ、あの誠意正心については、きつくおさえつけて行うようになり、それは自然ではない。もし格物致知すれば、自然に(誠意正心することができ)、無理におさえつける必要はない。

〔注〕

(1)「捺」「おさえつける」の意。『語類』では他に次のように用いられる。卷一六、一〇八条、沈僩録(Ⅱ 33-38)「敬子問。所謂誠其意者、毋自欺也。注云、外爲善、而中實未能免於不善之雜。某意欲改作外爲善、而中實容其不善之雜、如何。蓋所謂不善之雜、非是不知、是知得了、又容著在這裏、此之謂自欺。曰。不是知得了容著在這裏、是不奈他何了、不能不自欺。公合下認錯了、只管說箇容字、不是如此。容字又是第二節、緣不奈他何、所以容在這裏。此一段文意、公不會識得它源頭在、只要硬去捺他、所以錯了。：如公之說、這裏面一重不會透徹在。只是認得箇容著、硬遏捺將去、不知得源頭工夫在。所謂誠其意者、毋自欺也、此是聖人言語之最精處、如箇尖銳底物事。如公所說、只似箇樁頭子、都粗了。公只是硬要去強捺、如水恁地滾出來、却硬要將泥去塞它、如何塞得住。」ここで「捺」の語は、『大學章句』の注釈に異を唱える李燔に対して、「君のように無理におさえつけて解釈しようとするのは、水が湧き出しているのに、無理やり泥で塞ぎ止めようとするようなもので、そんなことで塞ぎ止められるものではない」という文脈で用いられている。また、卷四四、一五条、歐陽謙之録(Ⅲ 118)「問。克己與克伐怨欲不行。曰。

克己は拔去病根、不行は捺在這裏、且教莫出、然這病根在這裏。譬如捉賊、克己便是開門趕出去、索性與他打殺了、便是一頭事了。不行是閉了門、藏在裏面、教它且不得出來作過。」

(2)「在這裏」「ここに^グにある^グ」ではなく、『語類』に特徴的な表現で、上にのべる動作・状態の確かさを強調する(三浦『朱子語類抄』五〇頁)。

62条

元昭問。致知格物、只作窮理說。曰。不是只作窮理說。格物、所以窮理。又問。格物は格物與人。知物與人之異、然後可作工夫。曰。若作致知在格物論、只是胡說。既知人與物異後、待作甚合殺。格物、是格盡此物。如有一物、凡十瓣、已知五瓣、尚有五瓣未知、是爲不盡。如一鏡焉、一半明、一半暗、是一半不盡。格盡物理、則知盡。如元昭所云、物格知至、當如何說。子上問。向見先生答江德功書如此說。曰。渠如何說、已忘却。子上云。渠作接物。曰。又更錯。

〔校勘〕

○「然後可作工夫」朝鮮古写本、下有「此意頗切當」五字。

○「渠作接物」朝鮮古写本「接」誤作「按」。

○朝鮮古写本、記録者作「可學」。

〔訳〕

元昭(徐琳)が問う。「致知格物とは、つまり、理を窮めるということですね。」先生がおっしゃる。「ただ理を窮めるという意味ではない。(致知と格物は切り離して考えるべきであり、)格物の方が、理を窮める方法である。」また問う。「格物とは、物と人とを格するということですね。物と人との違いを知ってから、そこで修養をすることが出来るということですね。」先生がおっしゃる。「もし「致知は格物に在り」と『大学』にいうことから論ずれば、(致知と格物はともに窮理であるとする)お前の説はだめだ。人と物が異なるということを知ってから(修養を行う)ということでは、どのように始末をつけようというのか。格物とは、対象を徹底的に窮めるということである。たとえば、一つの物があり、十の部分から成っているとすると、既に五つの部分がかつていたとしても、まだ五つの分かっていない部分があれば、これはきわめ尽くしていない。また、鏡があつたとして、半面が明るく、もう半面が暗ければ、これでは一方はきわめ尽くしていない。物の理に格り尽くせば、知も尽くされる。もし元昭のいうように(致知と格物を窮理の意味で一体としてとらえたならば)「物格りて(しかる後に)知至る」とは、いったいどのように解釈出来るようか。」子上(鄭可学)が問う。「以前、先生が江徳功に答えた書で、このようにおっしゃっていたのを見ました。」先生「江徳功がどのように言っていたのかは、忘れてしまった。」可学がいう。「彼は、(格物を)「物に接する」と解釈しました。」先生「それは、もつと間違っている。」

〔注〕

(1) 「元昭」徐琳の字。『朱子門人』一八〇～一八一頁。

(2) 「格物、所以窮理」『大學章句』伝五章に「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也」と述べられるように、窮理は専ら格物と結びつけて説かれる。質問者が格物と致知の両方を一括して窮理と同一視しようとしたので、朱熹はその見解を否定したのである。

(3) 「待」：「しよとす」(欲、将要)。『歐陽文忠公集』卷一三二「玉樓春」其六「殘春一夜狂風雨、斷送紅飛花落樹、人心花意待留春、春色無情容易去。」

(4) 「作甚」「如何」に同じ。

(5) 「合殺」唐代では、「樂曲の終わり」の意で用いられる。崔令欽『教坊記』「宜春院、亦有工拙、必擇尤者爲首尾。首既引隊、衆所屬目、故須能者。樂將闕、稍稍失隊、餘二十許人、舞曲終謂之合殺、尤要快健、所以更須能者也。」「語類」では、「樂曲を締めくくる」という原義での用例があるほか、そこから転じて「決着させる」「しまつする」の意味でも用いられている。卷九二、四一条、陳淳録(Ⅵ 2345)「問。溫公論本朝樂無徵音、如何。曰。其中不能無徵音、只是無徵調。如首以徵音起、而未復以徵音合殺者、是徵調也。」卷三九、二条、潘時舉録(Ⅲ 1009)「問。先進於禮樂、此禮樂還說宗廟・朝廷、以至州・閭・鄉・黨之禮樂。曰。也不止是這般禮樂。凡日用之間、一禮一樂、皆是禮樂。只管文勝去、如何合殺。須有箇變轉道理。」本条では、後者の意。

(6) 「格物、是格盡此物」本卷七条にも「格物者、格、盡也、須是窮盡事物之理」とある。

(7) 「如有一物、凡十瓣」「瓣」は「花瓣」「綾瓣」など。『語類』卷二、沈憫録(Ⅰ 23)「雪花所以必六出者、蓋只是霰下、被猛風拍開、故成六出。如人擲一團爛泥於地、泥必潰開成稜瓣也。」(ここでは仮に「部分」と訳した。

(8) 「子上」鄭可學の字。『朱子語録姓氏』所収。

(9) 「向見先生答江德功書如此說」「江德功」は、江黙。『朱子門人』八一～八二頁。この手紙は、次のものである。『朱文公文集』卷四四「答江德功」其二「物理皆盡、則吾之知識廓然貫通、無有蔽礙、而意無不誠、心無不正矣。此大學本經之意、而程子之說然也。其宏綱實用、固已洞然無可疑者、而微細之間、主賓次第、文義訓詁、詳密精當、亦無一毫之不合。今不深考、而必欲訓致知以窮理、則於主賓之分、有所未安。(原注：知者、吾心之知。理者、事物之理。以此知彼、自有主賓之辨、不當以此字訓彼字也。)訓格物以接物、則於究極之功、有所未明。(人莫不與物接、但或徒接而不求其理、或粗求而不究其極。是以雖與物接而不能知其理之所以然與其所當然也。今日一與物接、而理無不窮、則亦太輕易矣。蓋特出於聞聲悟道、見色明心之餘論、而非吾之所謂窮理者、固未可同年而語也。且考之他書格字、亦無訓接者。)以義理言之、則不通、以訓詁考之、則不合、以功用求之、則又無可下手之實地。竊意聖人之言、必不如是之差殊踈略、以病後世之學者也。」(ここから、江黙が、格物を「接物」と、致知を「窮理」と解釈しており、これに対して朱子が批判している

ことが理解される。

63条

陳問。大學次序、在聖人言之、合下便能如此、還亦須從致知格物做起。但他義理昭明、做得來恐易。曰。也如此學。只是聖人合下體段已具、義理都曉得、略略恁地勘驗一過。其實大本處都盡了、不用學、只是學那沒緊要底。如中庸言、及其至也、雖聖人有所不知不能焉。人多以至爲道之精妙處。若是道之精妙處有所不知不能、便與庸人無異、何足以爲聖人。這至只是道之盡處、所不知不能是沒緊要底事。他大本大根元無欠闕、只是古今事變、禮樂制度、便也須學。 寅

〔校勘〕

- 「陳問」朝鮮古写本無「陳」字。
- 「做得來恐易」朝鮮古写本作「易耶」。
- 「只是聖人合下體段已具、義理都曉得」朝鮮古写本作「只是易聖人合下體段已其義理都曉得」。
- 「略略恁地」朝鮮古写本作「但」。「略略」、成化本、万曆本、和刻本作「畧畧」。
- 「不用學」朝鮮古写本「用」作「要」。
- 「那沒緊要底」朝鮮古写本「沒」作「不」。
- 「欠闕」朝鮮古写本「闕」作「缺」。
- 「寅」底本、万曆本、和刻本作「寅」。成化本、朝鮮整版本作「寅」。

朝鮮古写本作「淳」。

〔訳〕

陳が質問する。「『大學』の（格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治国・平天下の）順序立てですが、聖人についていえば、即座にそのようにすることが出来るのでしょうか、それとも（聖人といえども）やはり「致知格物」から始める必要があるのでしょうか。ただ聖人は義理に明らかであるので、恐らくは簡単に行うことができるということなのでしょうが。」

（先生が）おっしゃる。「やはりこのように学ぶのである。ただ聖人だけが、最初から聖人の風格が具わっており、義理も全てはつきりと理解しており、あらましこのようにひととおりチェックしていくのである。その実、根本の重要なところはすべて尽くし終わっているので、学ぶ必要はなく、あとは、ただあまり重要でないものを学ぶだけである。例えば、『中庸』には、「其の至に及ぶや、聖人と雖も知らず能わざる所あり」という。人はしばしば、「至」のことを「道の精妙なところ」と解釈している。（しかし）もし（聖人が）道の精妙なところについて、知らず行うことができれば、つまり凡人と変わらなず、どうして聖人と呼ぶことができようか。この「至」とは、「道の根本を尽くしたあとのところ」のことであり、「所不知不能」とは、重要ではないことについていうのである。聖人は、おおもと、根本のところ、本来まったく欠けるところがないので、ただ古今の歴史の事変や、礼樂制度などだけは、学ぶ必要があるのである。」 徐禹録

〔注〕

(1) 「陳問」 朝鮮古写本は記録者名を「淳」と作っており、陳淳のことと考えられる。「陣問」は、卷一八、卷八七、卷一三三にも見える。

(2) 「合下」 入矢・古賀『禪語辞典』(一四〇頁)「すぐに、さっそく、即座に。俗語の副詞。道忠和尚は「直下」の義なりという。「当下」よりも語気は急。」卷一四、三八条に既出。

(3) 「體段已具」 「體段」の語は『語類』においてしばしば用いられるが、『漢語大詞典』では、一、物事のすがた、二、物事の本質、の二つに分ける。ここでは前者の意に理解する。この語は、『論語集注』に見える。『論語』「爲政」第二「子曰、吾與回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也不愚。」集注「愚問之師曰、顔子深潛純粹、其於聖人體段已具。其問夫子之言、默識心融、觸處洞然、自有條理。」これに関する『語類』に、次のものがある。卷二四、一七条、輔廣録「問。李先生謂顔子聖人體段已具。體段二字、莫只是言箇模樣否。曰。然。又問。惟其具聖人模樣了、故能聞聖人之言、默識心融否。曰。顔子去聖人不爭多、止隔一膜、所謂於吾言無所不說。其所以不及聖人者、只是須待聖人之言觸其機、乃能通曉爾。」この記録が正しければ、『集注』の「師」とは、李延平である。また、「體段」の語は、『河南程氏文集』に既に見える。卷九「與呂大臨論中書」「大臨云。既云率性之謂道、則循性而行、莫非道。此非性中別有道也、中即性也。…先生曰。中即性也、此語極未安。中也者、所以狀性之體段。(若謂性有體段亦不可、姑假此以明彼。)如

稱天圓地方、遂謂方圓即天地可乎。方圓既不可謂之天地、則萬物決非方圓之所出。如中既不可謂之性、則道何從稱出於中。蓋中之爲義、無過不及而立名。」

(4) 「略略」「いささか」、「少しばかり」。卷一四、一〇六条、一一三条に既出。

(5) 「勘驗」 調べる、つきあわせて比べ調べる、点検する。『語類』卷一三、黃義剛録(一三三)「看道理、須要就那箇大處看。須要前面開闊、不要就那壁角裏去。而今須要天理人欲、義利公私、分別得明白。將自家日用底與他勘驗、須漸漸有見處。」

(6) 「一過」 ひととおり、一遍。『語類』卷三八、四条、葉賀孫録(三〇七)「問。看論語、及鄉黨之半。曰。覺公看得淺、未甚切己。終了鄉黨篇、更須從頭溫一過。許多說話、盡在集注中。」

(7) 「大本處」「大本」は、『語類』に頻出し、本卷、四一条に既出。
(8) 「如中庸言、及其至也、雖聖人有所不知不能焉」 『中庸章句』第二章「君子之道費而隱。夫婦之愚、可以與知焉、及其至也、雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖、可以能行焉、及其至也、雖聖人亦有所不能焉。」朱注「君子之道、近自夫婦居室之間、遠而至於聖人天地之所不能盡、其大無外、其小無內、可謂費矣。然其理之所以然、則隱而莫之見也。蓋可知可能者、道中之一事、及其至而聖人不知不能、則舉全體而言、聖人固有所不能盡也。侯氏曰、聖人所未知、如孔子問禮問官之類、所不能、如孔子不得位、堯舜病博施之類。」
(9) 「人多以至爲道之精妙處」 このような解釈を代表するものとしては、例えば、『禮記』「中庸」孔疏「及其至也雖聖人亦有所不知焉者、

言道之至極、如造化之理、雖聖人不知其所由。故云及其至也雖聖人亦有所不知焉。」

(10) 「至只是道之盡處」『語類』卷六三、六〇条 (IV 1533) 「或問。聖人不知不能。曰。至者非極至之至。蓋道無不包、若盡論之、聖人豈能纖悉盡知。伊川之說是。」

(11) 「大本大根」『語類』卷一一一、沈憫錄 (VIII 2938) 「只看聖人所說、無不是這箇大本。如云、天高地下、萬物散殊、而禮制行矣。流而不息、合同而化、而樂興焉。不然、子思何故說箇天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。此三句是怎如此說。是乃天地萬物之大本大根、萬化皆從此出。」

(12) 「古今事變、禮樂制度」『論語』「述而」第七「子曰、我非生而知之者、好古、敏以求之者也。」集注「生而知之者、氣質清明、義理昭著、不待學而知也。敏、速也、謂汲汲也。尹氏曰、孔子以生知之聖、每云好學者、非惟勉人也、蓋生而可知者義理爾、若夫禮樂名物、古今事變、亦必待學而後有以驗其實也。」

(13) 「寅」底本、万曆本、和刻本は、記録者を「寅」としているが、『語録姓氏』には、「寅」の名を持つものはないので、成化本、朝鮮整版本が「萬」と作るのが適當である。すなわち記録者は徐寓である。また、朝鮮古写本が「淳」と作るのに従えば、記録者は陳淳であり、この条は両者がそれぞれ記録したものと考えられる。これに関し、陳淳の第一次師事期(紹熙元年一一九〇、十一月十八日〜翌二年五月二日)と徐寓の第一次師事期(紹熙元年五月〜翌二年二月十八日)は重なっており、両者同席の事例も既に指摘されている。田中謙二

『朱門弟子師事年攷』一四三、一七〇頁。

64条

子善問物格。曰。物格、是要得外面無不盡、裏面亦清徹無不盡、方是不走作。 恪 以下物格

〔校勘〕

○「以下物格」朝鮮古写本無此四字。朝鮮整版本「物格」作「格物」。

〔訳〕

子善(潘時拳)が、「物格る」について質問した。先生曰く、「物格る」とは、外面が尽くさないとこがなく、修養者の内面も清らかで透徹しないとこがなくなれば、そうしてはじめて横道に逸れないようになる。」林恪録 以下、「物格る」について。

〔注〕

(1) 「子善」子善は、潘時拳の字。潘時拳と林恪の同席例は既に指摘されている。田中謙二『朱門弟子師事年攷』一二二頁。

(2) 「物格」『大學章句』経「物格而后知至」朱注「物格者、物理之極處、無不到也。知至者、吾心之所知、無不盡也。」

(3) 「外面無不盡、裏面亦清徹無不盡」訳では「裏面」を修養者の内面の意に解釈したが、ここでの「外面」「裏面」は以下の「表裏」

と対応する可能性もある。『大学章句』伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」その場合には、「外面_{||}表_{||}粗」「裏面_{||}裏_{||}精」という関係になる。

(4)「走作」横道に逸れること。卷一四、一四三条、一五七条、一五九条に既出。(定、對動而言。初知所止是動底方定方不走作如水之初定)など。一四三条注(2)を参照。

65条

上而無極太極、下而至於一草一木・一昆蟲之微、亦各有理。一書不讀、則闕了一書道理、一事不窮、則闕了一事道理、一物不格、則闕了一物道理。須著逐一件與他理會過。 道夫

〔校勘〕

○「闕了」朝鮮古写本「闕」作「缺」。下同。

○「須著」成化本、朝鮮古写本、和刻本「著」作「着」。

〔訳〕

上は無極・太極から、下は草木や昆虫などの微小なものにいたるまで、全てに理がある。一つの書物を読まなければ、一つの書物の中の道理を欠くことになるし、一つの事を窮めなければ、一つの事の道理

を欠くことになり、一つの物を格さなければ、一つの物の道理を欠くことになる。一つ一つそれらに取り組んで行かなければならない。 楊道夫録

〔注〕

(1)「無極太極」朱子は、『語類』の中で、周敦頤『太極圖説』の「無極而太極」を説明して、次のように説く。卷九四、七条、程端蒙録(VI 2365)「無極而太極、蓋恐人將太極做一箇有形象底物看、故又說無極、言只是此理也。」同、八条、沈僩録(VI 2365)「無極而太極、只是說無形而有理。所謂太極者、只二氣五行之理、非別有物爲太極也。又云。以理言之、則不可謂之有、以物言之、則不可謂之無。」同、一六条、周謨録(VI 2367)「無極而太極、不是太極之外、別有無極、無中自有此理。又不可將無極便做太極。無極而太極、此而字輕。無次序故也。」三浦國雄『朱子語類抄』(三〇四頁〜三〇六頁)、湯淺幸孫『近思録上』(六頁〜一四頁)を参照。

(2)「一草一木」『河南程氏遺書』卷一八、四八条「然一草一木皆有理。須察觀物理、以察己。既能燭理、則無往而不識。」

(3)「須著」「必須」に同じ。「しなければならぬ」。「着」はこの場合、軽い助字ではなく、ネバナラヌの意があるように思われる(三浦前掲書、一五五頁)。卷一四、三二条、六九条、一〇八条、本卷一条等に既出。

(4)「逐一件」「ひとつひとつ」。「逐件」が、卷一四に既出。卷一四、五四条、葉賀孫録「說大學・啓蒙畢、因言、某一生只看得這

兩件文字透、見得前賢所未到處。若使天假之年、庶幾將許多書逐件看得恁地、煞有工夫。」同、八四条、沈憫錄「問。所謂明德、工夫也只在讀書上。曰。固是在讀書上。然亦不專是讀書、事上也也要理會。書之所載者、固要逐件理會。也有書所不載、而事上合當理會者、也有古所未有底事、而今之所有當理會者、極多端。」

(5)「與他理會」「それらに取り組む。」「語類」卷一一七、二二条、黃螢錄(Ⅶ 3812)「問。嘗讀何書。曰。讀語孟。曰。如今看一件書、須是著力至誠去看一番、將聖賢說底一句一字都理會過。直要見聖賢語脈所在、這一句一字是如何道理、及看聖賢因何如此說。直是用力與他理會、如做冤讎相似、理會教分曉、然後將來玩味、方盡見得意思出來。」

66条

叔文問。格物莫須用合内外否。曰。不須恁地說。物格後、他内外自然合。蓋天下之事、皆謂之物、而物之所在、莫不有理。且如草木禽獸、雖是至微不至、亦皆有理、如所謂仲夏斬陽木、仲冬斬陰木、自家知得這箇道理、處之而各得其當、便是。且如鳥獸之情、莫不好生而惡殺、自家知得是恁地、便須見其生不忍見其死、聞其聲不忍食其肉、方是要之、今且自近以及遠、由粗以至精。 道夫 寓錄別出

〔校勘〕

○「如所謂」朝鮮古写本無「所」字。

○「寓錄別出」朝鮮古写本無此四字。

〔訳〕

叔文が質問する。「格物（の実践において）は、内外を合一させる必要がありますね。」（先生が）おっしゃる。「このようにいう必要はない。物が格れば、その内と外は自然と合一されるのである。思うに、天下のあらゆる事をすべて物というが、物の在るところならどこでも、理がないことはない。たとえば、草木や禽獸は、とても微小で卑賤な存在ではあるが、それらにもすべて理があり、〔周禮〕に）「五月には山の南側の木を斬り、十一月には山の北側の木を切る」というが、自らこのような道理を理解し、さらに実際の対処においてもその一つ一つが妥当であれば、それでこそよい。たとえば、鳥や獸の情として、生きることを喜び、殺されることを嫌わないものはいないが、そうであるということを知った上で、さらに実際に「生きているのを見たからには、それが死ぬのを見るに忍びず、声を聞いたからには、その肉を食うに忍びない」というようであって、それでこそよい。つまるところ、近くから遠くに、粗いものから始めて細かいところまで、格物して行きなさい。」 楊道夫録 徐寓録は別に挙げる。

〔注〕

(1)「叔文」「叔文」は、李叔文か。『朱子門人』は、「李叔文、名里未考。諸書不載」とした上で、朱子晩年の弟子と推測する(一一七頁)。『語類』において、他に、卷一八、九条、楊道夫録(Ⅱ 392)「叔文問。

正心誠意、莫須操存否」の発問がある。

(2)「莫須…否」「…する必要がありませんね。」「莫…否」は、「…です
すね」と、同意を求める表現で、卷一四、八五条に既出、注(9)

参照。八五条 呂熹録「又問、明之功、莫須讀書爲要否。」他に、「莫
是…否」も用いられ、既に、卷一四、九五条「蜚卿問。新民、莫是
脩道之謂教、有以新之否。」などと見られる。

(3)「合内外」「合内外」とは、物に即して理を窮め(≡外)、その
理を自己に内面化して実践すること(≡内)の双方が一体的に行わ
れることを指す。後文で朱熹が挙げる例に即して言えば、「自家知
得這箇道理」が外、「處之而各得其當」が内、また「自家知得是恁地」
が外、「須見其生不忍見其死、聞其聲不忍食其肉」が内となる。『大
學或問』「或問。觀物察己者、豈因見物而反求諸己乎。曰。不必然也。
物我一理、纔明彼即曉此、此合内外之道也。」またこれは、『河南程
氏遺書』卷一八「問。觀物察己、還因見物、反求諸身否。曰。不必
如此說。物我一理、纔明彼即曉此、合内外之道也。語其大、至天地
之高厚、語其小、至一物之所以然、學者皆當理會。」による。又、『大
學或問』「蓋有以必窮萬物之理同出於一爲格物、知萬物同出乎一理
爲知至。如合内外之道、則天人物我爲一、通晝夜之道、則死生幽明
爲一、達哀樂好惡之情、則人與鳥獸魚鼈爲一、求屈伸消長之變、則
天地山川草木爲一者、似矣。」なお内外については後出の六九条も
参照。

(4)「且如」「たとえば」。

(5)「草木禽獸、雖是至微至賤、亦皆有理」類似する表現として、

次のものがある。『語類』卷四、二四条、楊道夫録(160)「天下之物、
至微至細者、亦皆有心、只是有無知覺處爾。且如一草一木、向陽處
便生、向陰處便憔悴、他有箇好惡在裏。」

(6)「自家」一人称を表す。接尾辞「家」を伴って人称を表す語法は、
魏晉南北朝期から用いられる。

(7)「仲夏斬陽木、仲冬斬陰木」『周禮』地官「山虞」「山虞、掌山
林之政令、物爲之厲而爲之守禁。仲冬斬陽木、仲夏斬陰木。(注、
鄭司農云、陽木、春夏生者。陰木、秋冬生者、若松柏之屬。玄謂、
陽木、生山南者。陰木、生山北者。冬斬陽、夏斬陰。)」既に本卷
一八条に、同じ趣旨の発言がある。甘節録「古人愛物、而伐木亦有時、
無一些子不到處、無一物不被其澤。蓋緣是格物得盡、所以如此。」

(8)「處之而各得其當」「處」の意味を考える時、『中庸』に関する、
次の朱子の解釈が参考になる。『中庸章句』第二章「唯天下至誠、
爲能盡其性。能盡其性、則能盡人之性。能盡人之性、則能盡物之性。
能盡物之性、則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育、則可以與天
地參矣。」朱注「…人物之性、亦我之性、但以所賦形氣不同而有異耳。
能盡之者、謂知之無不明、而處之無不當也。」これに関して、『語類』
では次の箇所が参考になる。卷六四、五〇条、林枏録(IV 1569)「問。
至誠盡性盡人盡物、如何是盡。曰。性、便是仁義禮智。盡云者、無
所往而不盡也。盡於此不盡於彼、非盡也。盡於外不盡於内、非盡也。
盡得這一件、那一件不盡、不謂之盡。盡得頭、不盡得尾、不謂之盡。
如性中之仁、施之一家、而不能施之宗族。施之宗族、不能施之鄉黨。
施之鄉黨、不能施之國家天下、皆是不盡。至於盡禮・盡義・盡智、

亦如此。至於盡人、則凡或仁或鄙、或夭或壽、皆有以處之、使之各得其所。至於盡物、則鳥獸蟲魚、草木動植、皆有以處之、使之各得其宜。盡性・盡人・盡物、大概如此。」

(9)「各得其當」「適切な状態を保つ」。この表現は、卷一四に既出。

一五四条、潘履孫録「知止至能得。蓋才知所止、則志有定向。才定、則自能靜、靜則自能安、安則自能慮、慮則自能得。要緊在能字。蓋滔滔而去、自然如此者。慮、謂會思量事。凡思天下之事、莫不各得其當、是也。」類似的表現として、「各得其所」(卷二四、三九条、葉賀孫録、同一〇五条、黄卓録など多数)、「各得其宜」がある。

(10)「好生惡殺」「荀子」「哀公」「孔子對曰、古之王者、有務而拘領者矣、其政好生而惡殺焉。」

(11)「見其生不忍見其死、聞其聲不忍食其肉」「孟子」「梁惠王」上「君子之於禽獸也、見其生不忍見其死、聞其聲不忍食其肉。是以君子遠庖廚也。」

(12)「須…方…」「…してはじめて…である」。

(13)「自近以及遠、由粗以至精」同様の表現として、次のものがある。『朱文公文集』卷六四「答姚掾」「人之一身、應事接物、無非義理之所在。人雖不能盡知、然其大端、宜亦無不聞者、要在力行其所已知而勉求其所未至、則自近及遠、由粗至精、循循有序、而日有可見之功矣。」

(14)「寓録別出」ここに「別出」という徐寓録は、次の六十七条のこと。

67条

問。格物須合内外始得。曰。他内外未嘗不合。自家知得物之理如此、則因其理之自然而應之、便見合内外之理。目前事事物物、皆有至理。如一草一木、一禽一獸、皆有理。草木春生秋殺、好生惡死、仲夏斬陽木、仲冬斬陰木、皆是順陰陽道理。(砥録作皆是自然底道理。)自家知得萬物均氣同體、見生不忍見死、聞聲不忍食肉、非其時不伐一木、不殺一獸、不殺胎、不斲夭、不覆巢。此便是合内外之理。寓 砥録略

〔校勘〕

○「未嘗不合」万曆本「嘗」作「常」。

○「砥録作皆是自然底道理」万曆本、和刻本「自然」誤作「智然」。

朝鮮古写本無此十字。

○「不斲夭」成化本、万曆本、和刻本「斲」誤作「妖」。

○「砥録略」成化本、万曆本、和刻本「略」作「畧」。朝鮮古写本無

此三字。朝鮮整版本作「略録砥」。

〔訳〕

質問「格物とは、かならず内と外とが合一しなければならないのですね。」先生「(そもそも)内と外とは、合一しないことはない。物の理がこのようなものであると、自分ではっきり分かったのなら、理のおのずからそうなるというはたらきによって(物に)応ずることになり、そこで内と外の理がびたりと合致するのがわかる。目の前のあらゆる

事物には、至理がある。草木や禽獣のようなものにも、すべて理がある。草木は、春には生じ秋には枯れ、生きることを望み、死ぬことを嫌い、『周禮』に「五月には山の南側の木を斬り、十一月には山の北側の木を切る」というように、これらはすべて、陰陽の道理に従っている。

〔劉砥録では「これらはすべて、自然の道理である」に作る。〕あらゆるものが、氣を同じくし、本体を同じくしていることを、自ら理解するならば、生きているものを見れば死ぬのを見るのに忍びなく、（生き物の）声を聞けばその肉を食べるのに忍びなく、適切な時期でなければ一本の木も切らず、一匹の動物も殺さず、妊娠している動物を殺さず、成熟していない若い動物を殺さず、鳥の巢をひっくり返さない（これらのことが自然にできるようになる）。これこそ内外の理を合一させるということである。〕 徐寓録 劉砥録は省略。

〔注〕

〔1〕「須：始得」「須：始」と呼応して、レぜひ：レしてはじめて―だ。レ絶対：レせねばならない。レこの「得」は、現代語の「行」（よい）にあたる。〕（三浦前掲書、五〇頁）

〔2〕「合内外」前条に既出。

〔3〕「春生秋殺」『後漢書』列傳第三四張敏傳「夫春生秋殺、天道之常。春一物枯即爲災、秋一物華即爲異。」

〔4〕「均氣同體」この語は、既に呂大臨に見える。『宋文鑑』卷七三「克己銘」「凡厥有生、均氣同體、胡爲不仁。我則有己、立己與物、私爲町畦、勝心横生、擾擾不齊。」

〔5〕「非其時不伐一木」『禮記』「月令」「孟春之月、…是月也、命祀祀山林川澤、犧牲毋用牝。禁止伐木、毋覆巢、毋殺孩蟲・胎・夭・飛鳥、毋麝母卵。」

〔6〕「不殺胎、不殀天、不覆巢」『禮記』「王制」「天子諸侯無事、則歲三田。一爲乾豆、二爲賓客、三爲充君之庖。無事而不田、曰不敬。田不以禮、曰暴天物。天子不合圍、諸侯不掩羣。天子殺則下大綏、諸侯殺則下小綏、大夫殺則止佐車。佐車止則百姓田獵。獮祭魚、然後虞人入澤梁。豺祭獸、然後田獵。鳩化爲鷹、然後設罝羅。草木零落、然後入山林。昆蟲未蟄、不以火田。不麝、不卵、不殺胎、不殀天、不覆巢。」卷一四、三八条、葉賀孫録に既出。

68条

知至、謂天下事物之理、知無不到之謂。若知一而不知二、知大而不細、知高遠而不知幽深、皆非知之至也。要須四至八到無所不知、乃謂至耳。因指燈燭在此而光照一室之内、未嘗有一些不到也。履孫 以下知至

〔校勘〕

○「知至」朝鮮整版本誤作「知其」。

○「以下知至」朝鮮古写本無此四字。

〔訳〕

「知至る」とは、天下のあらゆる事物の理について、知が至らないことがない、ということを用いのである。もし一を知って二を知らず、大まかなところだけを知って細かいところを知らず、高遠なところだけを知ってかすかで奥深い所を知らなければ、それらはどれも「知が至った」ものではない。あらゆる所まで、知らないところがなくなつて、そこで「至る」というのである。」そこで、灯燭を指しておっしゃる。「〔知至る〕とは」灯燭がここにあつて、一部屋の中を照らしているが、（光りが）届かないところが少しもないようなものだ。」潘履孫録以下、「知至」について。

〔注〕

(1) 「知高遠」「高遠」を否定的文脈で用いている点が注意される。例えば、『語類』卷三五、四六条、歐陽謙之録(Ⅲ 917)「先生因言。近來學者多務高遠、不自近處著工夫」なども同様の用法である。

(2) 「四至八到」「四方八方」。この表現は、地理書の『太平寰宇記』などでは、周囲との距離を示す言葉として用いられる。朱子より早い用例として次のものがある。李新『跨鼈集』卷二二「與家中孺提舉論優恤戸絶書」「某竊惟戸絶之法、朝廷行之、最爲周密。夫民不幸至於戸絶、倉庫牛馬、屋下地上、器皿毛髮、四至八到一拳之上、皆歸於官。」同義語の「四方八面」は、『語類』に頻出する。本卷八条に「居甫間、格物工夫、覺見不周給。曰、須是四方八面去格」と既出。

(3) 「因指燈曰……」「知至」を議論する際に、燈火を比喩に用いたものは、既に卷一四に見える。卷一四、二四五条、龔蓋卿録「(李德之)

又問。知至而後意識、如何知既盡後、意便能實。先生指燈臺而言、如以燈照物、照見處、所見便實、照不見處、便有私意、非眞實。」この他にも、『語類』において、「燈火」を比喩として用いる例は多い。

69条

知至、謂如親其所親、長其所長、而不能推之天下、則是不能盡之於外。欲親其所親、欲長其所長、而自家裏面有所不到、則是不能盡之於内。須是其外無不周、内無不具、方是知至。履孫

〔校勘〕

- 「不能推之天下」 朝鮮古写本「天下」上有「於」字。
- 「須是其外無不周」 朝鮮古写本無「其」字。
- 「履孫」 成化本「孫」字磨滅。

〔訳〕

「知至る」とは、近親者に親しみ、年長者を敬つても、それを天下のあらゆる人々に推し及ぼしていくことができなければ、それは知を外に向かつて尽くすことができないということである。近親者に親しもうとし、年長者を敬おうとしても、自己の内面において十分でない点があれば、それは知を内に向かつて尽くすことができない

ということである。外的な世界において周到でないことがなく、自己の内面において具わらないものがないようにしてこそ、それではじめて「知が至った」といえる。 潘履孫録

〔注〕

(1)「親其所親、長其所長」『孟子』「離婁」上「孟子曰。道在邇而求諸遠、事在易而求諸難。人人親其親、長其長、而天下平。」集注「親長在人爲甚邇、親之長之在人爲甚易、而道初不外是也。舍此而他求、則遠且難而反失之。但人人各親其親、各長其長、則天下自平矣。」

(2)「不能盡之於外 不能盡之於内」「盡」については『大學章句』「物格而後知至、知至而後意誠。」朱注「知至者、吾心之所知無不盡也。知既盡、則意可得而實矣。意既實、則心可得而正矣。」を、「内」「外」については六六条の「合内外」及びその注を参照。

70条

子升問。知止、便是知至否。曰。知止、就事上說、知至、就心上說。知止、知事之所當止。知至、則心之知識無不盡。 木之

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一四、把本条与卷一四之一六三条合爲一条。

○「子升問」朝鮮古写本「子升」作「子升兄」。

〔訳〕

子升が質問する。「止まるを知る」とは、つまり「知至る」という意味なのですな。(先生が)おっしゃる。「止まるを知る」とは、事についていい、「知至る」とは、心についていう。「止まるを知る」とは、事が当然止まるべきところを知るところであり、「知至る」とは、心の中の知識が、尽くされていないところがないことをいう。 錢木之録

〔注〕

(1)「子升」「子升」は、卷一四、一四六条、一六三条に既出。一四六条注(1) 参照。また、『朱子門人』三四九〜五〇頁を参照。なお、卷一四にみえる「子升」の質問も、いずれも「知止」についての質問である。

(2)「知止就事上說：知事之所當止」『大學章句』経、朱注「止者、所當止之地、即至善之所在也。」

(3)「知至就心上說：則心之知識無不盡」『大學章句』朱注「知至者、吾心之所知無不盡也。知既盡、則意可得而實矣。」

71条

知止、就事上說、知至、就心上說、舉其重而言。 閔祖

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

「止まるところを知るところというのは事柄に即して説いたものであり、知至るといふのは心に即して説いたものである。」といふのは、より重きを置く方を挙げて述べたものである。 李閔祖録

〔注〕

(1)「知止、就事上説、知至、就心上説」前条参照。本条は前条もしくはそれに類する自身の発言に対する補足説明的なものである。前条の発言を李閔祖が聴いていた可能性もある。なお前条筆録者の錢木之と本条筆録者の李閔祖に同席記録のあることに關しては、田中謙二『朱門弟子師事年攷』一〇一頁以下を参照。

(2)「擧其重而言」「知止」も心と無關係ではないし「知至」も「事」と無關係ではないが、より重点の置かれる側面を挙げて言えば、「知止」は「事」について述べたもの、「知至」は「心」について述べたものと言へる、との意。『語類』卷二二、二三條、童伯羽録(II) 〇二「仲思問樂與好禮。曰。無詔無驕、此就貧富裏用功耳。樂與好禮、則大不干事。至此、蓋富亦樂、貧亦好禮、而言貧樂富好禮者、但且因貧富上而擧其重者耳。明道曰。貧而樂、非富而好禮不能、富而好禮、非貧而樂不能。」(参考)『論語』「学而」「子貢曰。貧而無詔、富而無驕、何如。子曰。可也。未若貧而樂、富而好禮者也。」

72条

問。致知之致、知至之至、有何分別。曰。上一致字、是推致、方爲也。下一至字、是已至。(原注)先著至字、旁著人字爲致。是人從旁推至。節

〔校勘〕

○「致知之致」万曆本は「致知之至」に誤る。和刻本もこの誤りを踏襲している。

○「先著至字旁著人字爲致」成化本、万曆本、和刻本は「著」をいずれも「着」に作る。朝鮮古写本は「先看至字旁著人字爲致」に作る。○「是人從旁推至」朝鮮古写本には「從」字がない。

〔訳〕

質問「致知の致と知至の至には、どのような違いがあるのでしょいか。」先生「上の致字は、推致（＝推し極める）の意であり、これから実践に取り組もうという場合である。下の至字は、已に至ったとの意である。(原注)まず「至」字を書き、その旁らに「人」字を書いたものが「致」である。つまり人が傍らから推しきわめて至らしめる、という意味を成すのだ。 甘節録

〔注〕

(1)「上致字、是推致」『大学章句』経、朱注「致、推極也。知、猶

識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。』『大学或問』「致者、推致之謂。如喪致乎哀之致、言推之而至於盡也。」本卷一条「器遠問。致知者、推致事物之理。」四五条「人莫不有知。：但所知者止於大略、而不能推致其知以至於極耳」

(2) 「方爲」「已至」云々 「格物致知」はこれから取り組むべき工夫について述べ、「物格知至」は工夫に取り組んだ結果得られる効験について述べる、との趣旨。『朱文公文集』卷四六「答黃商伯」第四書「程子一日一件事者、格物工夫次第也。脱然貫通者、知至効験極致也。」後出の七三条、七四条も同趣旨。

(3) 「先著至字、旁著人字爲致」『說文解字』(五篇下)には「致、送詣也。从夂从至。」とあり、この注のように「致」を「至」と「人」から成り立つとするような解釈は、『說文解字詁林』所収の諸説を通覧しても検出し得ない。因みに同じく『說文解字』(五篇下)には「夂、行遲曳夂夂也。象兩脛有所躡也。」とある(段玉裁注「楚危切」)。

(4) 「人從旁推至」本卷四五条に「致之爲義、如以手推送去之義。」とある。

73条

格物、只是就事上理會。知至、便是此心透徹。 廣

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物とは、事柄に即して取り組むものに他ならない。知至るとは、(致知の実践によって)この心が透徹することである。 輔廣録

〔注〕

(1) 「事上」「此心」云々 格物・物格を事物や物理と、致知・知至を心と結びつけて論じる用例については以下を参照。『大学章句』経、朱注「物格者、物理之極處無不到也。知至者、吾心之所知無不盡也。」本卷四四条「格物、是物物上窮其至理。致知、是吾心無所不知。」本卷四九条「格物、以理言也。致知、以心言也。」

74条

格物、便是下手處。知至、是知得也。 徳明

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物とは、工夫に取り組む場に他ならない。知至るとは、(工夫の

結果、道理を) 知り得たことである。 廖徳明録

れて断ち切れるかのように、(容易に) 処理できるのだ。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「下手」 手をつける、着手する。 卷一四、一九条、卷一五、三〇条に既出。

〔注〕

(1) 「割得物事」 「物事」は「物」の意の俗語。三浦國雄『朱子語類抄』六二頁。

75条

致知未至、譬如一箇鐵片、亦割得物事、只是不如磨得芒刃十分利了、一錘便破。若知得切了、事事物物至面前、莫不迎刃而解。 賀孫

(2) 「芒刃」 刀のきつさき。賈誼『新書』「制不定」「屠牛坦、一朝解十二牛、而芒刃不頓者、所排擊、所剥割、皆象理解也。」『漢書』卷四八「賈誼」顏師古注「芒刃、謂刃之利如豪芒也。頓讀曰鈍。」なお『新書』と『漢書』所引とでは若干文字の異同が有る。

〔校勘〕

○「一箇鐵片」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「一錘便破」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本

は「錘」を「鍾」に作る。

○「迎刃而解」 万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

(3) 「一錘」 錘は、鍬。一錘はひと鍬、ひと鍬入れる。『宋名臣奏議』卷三五、陳瓘「上徽宗論向宗良兄弟交通賓客」「當此之時、外家之勢、已如合抱之木、九層之臺。豈一手之所能拔、豈一錘之所能平哉。」『張載集』文集佚存「邊議」「千里之防、必由一錘而致堅。江河之廣、必由一勺而浸至。」ここでは一撃、一太刀の意か。

(4) 「迎刃而解」 極めて容易であることの譬え。『晋書』卷三四「杜預」「今兵威已振。譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解、無復著手處也。」卷一四、八〇条に既出。

〔訳〕

知を致して知がまだ至っていない状態とは、譬えて言えば、一枚の鉄片でも物を裁断することはできるけれども、それは、切っ先を十分に鋭利に研いでおきさえすれば一太刀のもとに物を断ち切ることができるのは及ばない、というようなものだ。もしも切実に知り得たなら、事事物物が面前に出来してもその全てを、物の方から刃を迎え入

76条

未知得至時、一似捕龍蛇捉虎豹相似。到知得至了、却恁地平平做將去。然節次自有許多工夫。到後來絜矩、雖是自家所爲、皆足以興起斯民。又須是以天下之心審自家之心、以自家之心審天下之心、使之上下四面

都平均齊一而後可。 賀孫

〔校勘〕

○「諸本異同なし。」

〔訳〕

知が至り得ていない時というのは、まるで龍や蛇を捕まえ虎や豹を捉えようとするかのようなものである（「知にまとまりがなくとりとめがない」。既に知が至り得た時とは言えば、こんなにも平易にやっつけていけるのである。ただしその手順には、自ずと多くの取り組むべき工夫があるのだ。後の（平天下の段階における）契矩を行うに際しては、それが自分自身の行為であっても、その全てがよく民を奮い立たせるのである。その際には、さらには是非とも、天下の人々の心によって自己の心を仔細に推し量り、自己の心によって天下の人々の心を仔細に推し量り、上下四方全ての人々が心をただ一つにする、というようになつてこそよいのだ。 葉賀孫録

〔注〕

（1）「似捕龍蛇捉虎豹相似」「似…相似」は「如…相似」と同じで…のようである」 入矢義高『禪語辞典』一六一頁。

（2）「捕龍蛇捉虎豹」 龍蛇虎豹を手捕りにする。極めて困難なことの譬え。転じて、つかみどころがなく難解なことの譬え。本卷七三条「知至、便是此心透徹」の「透徹」と対極的なあり方。『柳河東集』

卷二一「讀韓愈所著毛穎傳後題」「自吾居夷、不與中州人通書。有來南者、時言韓愈爲毛穎傳、不能舉其辭而獨大笑以爲怪、而吾久不克見。楊子誨之來、始持其書。索而讀之、若捕龍蛇搏虎豹。急與之角而力不敢暇。信韓子之怪於文也。」『張載集』「經學理窟」「周禮」「周禮、惟太宰之職難看。蓋無許大心胸包羅、記得此、復忘彼。其混混天下之事、當如捕龍蛇搏虎豹。用心力看、方可。故議論天下之是非易、處天下之事難。」

（3）「恁地」このように、このような。「如此」と同じ。卷一四、一八条等に既出。

（4）「平平」平易である、平易に、易々と。『書經』「洪範」「無偏無黨、王道蕩蕩。無黨無偏、王道平平。」蔡沈伝「蕩蕩、廣遠也。平平、平易也。」『語類』卷一一七、四六条、訓陳淳（VII 2825）「先生曰。天下萬物當然之則、便是理。所以然底、便是原頭處。今所說、固是如此。但聖人平日、也不會先說箇天理在那裏、方教人做去。只是說眼前事、教人平平恁地做工夫去、自然到那有見處。」

（5）「做將去」「將去」は「…していく」卷一四、六条「逐段子耕將去」卷一四、一条「此譬如人起屋、是畫一箇大地盤在這裏。理會得這箇了、他日若有材料、却依此起將去。」等に既出。

（6）「節次」順序次第。卷一四、一三条「大學如一部行程曆、皆有節次。」同、一六〇条「恰如今年二十一歲、來年二十二歲、自是節次如此來」等に既出。

（7）「到後來契矩、…皆足以興起斯民」『大学章句』伝一〇章「所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民

不倍、是以君子有絜矩之道也。」朱注「興、謂有所感發而興起也。：絜、度也。矩、所以爲方也。」八条目の中で平天下は最後に位置する為に「到後來」と述べた。

(8)「斯民」この民、民。『孟子』「萬章」下「天之生斯民也、使先知覺後知、使先覺覺後覺。予、天民之先覺者也」

(9)「使之上下四面都平均齊」『大学章句』伝一〇章「是以君子有絜矩之道也」朱注「是以君子必當因其所同、推以度物、使彼我之間各得分願、則上下四旁均齊方正、而天下平矣。」同上「所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右、此之謂絜矩之道。」朱注「此覆解上文絜矩二字之義。如不欲上之無禮於我、則必以此度下之心、而亦不敢以此無禮使之。不欲下之不忠於我、則必以此度上之心、而亦不敢以此不忠事之。至於前後左右、無不皆然、則身之所處、上下四旁長短廣狹、彼此如一、而無不方矣。」

77条

鄭仲履問。某觀大學知至、見得是乾知道理。曰。何用說乾知。只理會自家知底無不盡、便了。 蓋卿

〔校勘〕

○「鄭仲履問」朝鮮古写本はこの下に「曰」字有り。

〔訳〕

鄭仲履がお尋ねした。「私が思うに、『大学』の知至るとは、『易経』にいう）乾知の道理のことですね。」先生「どうして乾知などを持ち出す必要が有ろう。ただ自分の知るところをすっかり尽くすように取り組めば、それでよいのだ。」 襲蓋卿録

〔注〕

(1)「鄭仲履」『朱子門人』頁三四一。本巻四条に既出。

(2)「乾知」『易経』「繫辭上伝」「乾道成男、坤道成女。乾知大始、坤作成物。」以下の注釈から明らかのように、孔穎達は「乾知」の知を知るの意に解釈し、朱熹は「知る」の意に解釈している。孔穎達正義「乾知大始者、以乾は太陽之氣、萬物皆始在於氣、故云知其大始也。坤作成物者、坤は地陰之形、坤能造作以成物也。初始无形、未有營作、故但云知也。已成之物事可營爲、故云作也。」朱熹本義「知猶主也。乾主始物而坤作成之。承上文男女而言乾坤之理。蓋凡物之屬乎陰陽者、莫不如此。大抵陽先陰後、陽施陰受。陽之輕清未形而陰之重濁有迹。」本条において鄭仲履は「乾知」の知を知るの意に解釈した可能性もある。

78条

知至、如易所謂極深。惟深也、故能通天下之志、這一句略相似。能慮、便是研幾。如所謂惟幾也、故能成天下之務、這一句却相似。 夔孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

○「知至、如易所謂極深」朝鮮整版本卷末「考異」に「至、恐止。

當與十四卷三十九板木之録同」とある。十四卷三十九板木之録とは

卷一四、一六三条を指す。なお注(一)を参照のこと。

○「略相似」万曆本、和刻本は「略」を「畧」に作る。

〔訳〕

「知至る」というのは、『易』に所謂「深を極める(＝奥深い道理を極める)」のようなものである。「(極めるところが)深いが故にこそ、

天下の人々の心志を(啓蒙して)物事に通曉せしめることができる」、

この一句にほぼ近いだろう。「能く慮る」というのは、「幾を研く(＝

幾微をつまびらかにする)」である。所謂「つまびらかにするところが

幾であるが故にこそ、天下の務めを成し遂げることができる。」、この

一句の方が近いだろう。林夔孫録

〔注〕

(1)「極深…研幾」『周易』「繫辭上伝」「夫易、聖人之所以極深而研

幾也。唯深也、故能通天下之志。唯幾也、故能成天下之務。」朱熹

本義「研、猶審也。幾、微也。所以極深者、至精也。所以研幾者、

至變也。」『語類』卷七五、六〇条、黄榦録(V 1233)「問。繫辭言、

惟深也、故能通天下之志。又言、以通天下之志。此二通字、乃所以

通達天下之心志、使之通曉、如所謂開物之意。曰。然。」この一節

は卷一四、一四六条に既出。なお本条では「知至」と「極深」、「能慮」

と「研幾」を結びつけて論じているが、卷一四、一六三条、錢木之

録では「知止」と「極深」、「能慮」と「研幾」を結びつけて論じて

いる。「如易所謂惟深也、故能通天下之志、此似知止。惟幾也、故

能成天下之務、此便是能慮。」因みに「知止」と「知至」の関係に

ついては本卷七〇条、七一条を参照。

(2)「能慮、便是研幾」卷一四、一五一条「慮、是研幾。」「大学或問」

「能慮則隨事觀理、極深研幾、無不各得其所止之地而止之矣。」

79条

問。定靜安慮得與知至意誠心正是兩事、只要行之有先後。據先生解、

安定慮得與知至似一般、如何。曰。前面只是大綱且如此說、後面却是

學者用力處。去偽

〔校勘〕

○「據先生解」万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

〔訳〕

質問。「定靜安慮得と知至り意誠にして心正しとは、まさにそれぞ

れ別個の営みであつて、その実践に際しても手順に先後があるべきで

す。先生のお考えに拠れば、安定慮得と知至るとは同じようなものだ、

という考え方に対しては、いかがでしょうか。」先生「前のもの(安

定慮得)はただ(定から得に至る)その過程の大筋がこのようなものであることをとりあえず述べたのであり、後の方(物格知至)は学ぶ者が工夫に取り組むべきところを述べたのである。 金去偽録

〔注〕

(1)「定靜安慮得」『大学章句』経「知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。」

(2)「知至意誠心正」『大学章句』経「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正。」

(3)「是兩事」「知止定靜安慮」と「物格知至」の関係については以下を参照。『大学章句』経、朱注「物格知至、則知所止矣。意誠以下、則皆得所止之序也。」「大学或問」「知止云者、物格知至、而於天下之事、皆有以知其至善之所在、是則吾所當止之地也。能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。」「語類」卷一四、一五七条「或問定靜安慮四節。曰。物格知至、則天下事事物物皆知有箇定理。…(以下略)」

(4)「行之有先後」前注所引からも明らかのように、「格物致知」を実践した結果(「物格知至」として「知止」以下が実現するとされているから、「物格知至」が先、「定靜安慮得」が後ということになる。なお以下の条に拠れば、「物格知至」↓「知止定靜安慮得」↓「意誠心正」という先後関係になる。『語類』卷一四、一七四条「知止至能得、是說知至意誠中間事。」ただし「意誠心正」以下を「得」(得其所止)のプロセスとする条もある。卷一五、一三九条「格物致知、

是求知其所止。誠意正心修身齊家治國平天下、是求得其所止。物格知至、是知所止。意誠心正身修家齊國治天下平、是得其所止。」

(5)「據先生解」先生のお考えに拠れば、『語類』卷二九、一二二条、輔廣録(II 756)「據先生解、曾點事煞高。」

(6)「安定慮得與知至似一般」「知止」と「知至」の関係述べた条としては本卷七〇条、七一条がある。「一般」は「同じ」。

(7)「前面：後面」『大学』経文における排列は「知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。」が先で八条目の記述はそれより後ろに来るので、「前面」「後面」という。

80条

致知、不是知那人不知底道理、只是人面前底。且如義利兩件、昨日雖看義當爲、然而却又說未做也無害。見得利不可做、却又說做也無害。這便是物未格、知未至。今日見得義當爲、決爲之、利不可做、決定是不做、心下自肯自信得及、這便是物格、便是知得至了。

此等說話、爲無恁地言語、册子上寫不得。似恁地說出、却較見分曉。
植 以下物格知至

〔校勘〕

○「心下自肯自信得及」朝鮮古写本には「自肯」の二字なし。

○「以下物格知至」朝鮮古写本にはこの六文字なし。

〔訳〕

致知というのは、人が誰も知らないような道理を知ろうというのではなく、ただ自己の面前にあるもの（＝卑近な道理）に過ぎないのだ。

例えば義と利という二項を例にとれば、義（正義、道義）はまさに行うべきであると昨日認識したにも関わらず、（今日になると）まだ行わなくともまあいいだろう、等と言う。利（私利の追求）は行ってはならないと認識しながら、（今日になると）行ってもまあいいだろう等と言う。これはまさに、物にまだ格らず知がまだ至っていないからに他ならない。今日、義は行うべきであると認識したからには、断固としてこれを行う、利は行うべきではないと認識したからには、決してこれを行わない、その心中にあつても自らの意志に根ざし、自ら（かくあるべしと）信じ切る、それでこそ物格るであり、それでこそ知が至り得たと言えるのだ。

この手の話は、そのような内容に関わる（先聖の）言葉がないので、私も書物には記し得なかったのだが、こんな風に言葉に出して言ってみることで、少しは明瞭になっただろう。 潘植録 以下物格知至

〔注〕

（1）「那人不知底道理」「人面前底」「底」は現代中国語の「的」と同じで「…の」「…のもの」。「那」は現代中国語の「哪」と同じで「どんな」「どの」。

（2）「義利」「義利」対拳の例としては以下を参照。『論語』「里仁」「子曰。君子喻於義、小人喻於利。」朱注「喻、猶曉也。義者、天理之

所宜。利者、人情之所欲。」『孟子』「梁惠王」上「孟子見梁惠王。王曰。叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎。孟子對曰。王何必曰利。亦有仁義而已矣。」

（3）「決定是」きつと、必ず。卷一四、一四四條等に既出。

（4）「心下」心のうち、心中。卷一四、一四一條に既出。

（5）「自肯」自発的に、自らの意志に根ざして。『論語』「憲問」の「為己」「為人」で言えば「為己」に相当する。『語類』卷一七、四八條、楊道夫録（II 88）「行夫問。爲己者、無所爲而然。曰。有所爲者、是爲人也。這須是見得天下之事實是己所當爲、非吾性分之外所能有、然後爲之、而無爲人之弊耳。：又如人做一件善事、是自家自肯去做。非待人教自家做、方勉強做。此便不是爲人也。」

（6）「信得及」信じ切る。卷一四、五條、卷一五、五一條に既出。

（7）「爲無恁地言語」典拠とすべき經書や先儒の語がない、という意味か。

（8）「册子上」「册子」は書物。『語類』卷一一、六二條、甘節録（I 86）「看書、不可將自己見硬參入去。須是除了自己所見、看他册子上古人意思如何。」

81條

問。物格窮理之初、事事物物也要見到那裏了。曰。固是要見到那裏、然也約摸是見得。直到物格知至、那時方信得及。 寓

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。なお朝鮮古写本卷二八「敬之間此章」条の末尾に本条が収録されている（参考）参照。

○「事事物物」万曆本、和刻本は「事々物々」に作る。

○「寓」朝鮮古写本（卷二八）は記録者名を欠く。

〔訳〕

質問。「格物窮理に取り組み始めた当初においても、やはり事事物物に関してもそこまで認識することが必要なのでしょうか」先生「もちろん、そこまで認識することが必要だが、しかし（工夫の当初にあつては）やはりそのあらましを認識できるに過ぎないのだ。物格り知至るの段階になってこそ、その時にこそ（自己の認識した内容を）信じ切ることができるのだ。 徐寓録

〔注〕

(1) 「到那裏」文字通り「そこに至る」「そこに到達する」の意であるが、文脈によつては「那裏」は具体的な場所を指す指示代名詞というよりは「然るべきところ」「然るべきレベル」といった意味を表す場合があるように思われる。卷一四、一三三条「問、大學之靜與伊川靜中有動之靜、同否。曰、未須如此說。如此等處、未到那裏、不要理會。」『語類』卷三一、六六条、林賜録（Ⅲ 158）「問顔子樂處。曰。顔子之樂、亦如曾點之樂。但：點之樂、淺近而易見。顔子之樂、深微而難知。點只是見得如此、顔子是工夫到那裏了。從本原上看、

方得。」禪籍に頻出する「其中」等の用法に類するか。筑摩書房、禪の語録『趙州録』卷中（二三九頁）「云、其中事如何。師唾地。」同、卷中（三〇三頁）「問。衆機來湊。未審其中事如何。師云。我眼本正、不說其中事。」同、卷中（三二五頁）「問。如何是祖師的的意。師涕唾。云。其中事如何。師又唾地。」入矢義高『禪語辭典』「其中」「そこ、このところ。場所をいう。禪家ではこの語をもつて、究極のもの、本来的なものを意味させることが多い。同義語として「箇中」「彼中」「箇裏」「那邊」がある。「こちゅう」と読むならわし。」

(2) 「約摸」「約莫」と同じで「約」「大概」「おおよそ」「あらまし」高適「自淇涉黄河四首」第三首（『唐百家詩選』卷三）「約莫三十年、中心無所向。」（高適『高常侍集』卷三所収や『全唐詩』卷二二二所収は「釣魚三十年」に作る）。『語類』卷九、五五条、葉賀孫録（I 156）「這道理、若見得到、只是合當如此。如竹椅相似。須着有四雙脚、平平正正、方可坐。若少一雙脚、決定是坐不得。若不識得時、只約摸恁地說、兩雙脚也得、三雙脚也得。到坐時、只是坐不得。」『語類』卷一八、一二二条、葉賀孫録（II 423）「某常說道、天下事無他、只是箇熟與不熟。若只一時恁地約摸得、都不與自家相干、久後皆忘却。只如借得人家事一般、少間被人取將去、又濟自家甚事。」

(3) 「直到物格知至」「直到」は「：になつて」「：になつて」

(4) 「那時方信得及」関連する語句として本卷五一条「若見得親切、自然信得及。」が有る。

〔参考〕

『語類』卷二八、二五条、徐寓録(Ⅱ 714)「敬之間此章」条の末尾にも本条と全く同一の文が収載されている。

82条

守約問。物格知至、到曾子悟忠恕於一唯處、方是知得至否。曰。亦是如此。只是就小處一事一物上理會得到、亦是知至。賀孫

〔校勘〕

○「守約問」朝鮮古写本は「守約」を「李守約」に作る。

〔訳〕

守約がお尋ねした。「物格り知至というのは、曾子が唯はという一言のもとに忠恕を悟った、という境涯にまで到達してこそ、知が至り得たと言えるのではありますまいか。」先生「まあそうだ。しかし些細な事柄について一事一物に即して十分に取り組むこともまた、やはり知至るなのだ。葉賀孫録

〔注〕

(1)「守約」李閔祖、字守約。『朱子語録姓氏』所収。

(2)「曾子悟忠恕於一唯」『論語』「里仁」子曰。參乎、吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道、忠恕而

已矣。」

(3)「就小處一事一物上理會得到」曾子の「唯」や「一貫」の話柄を好んで口にすることが日常卑近な努力をなおざりにして高踏的な悟境を志向する弊害に陥ることを警戒する気持ちが朱熹にはあった。そこで、いきなり一貫を話題にすることを戒めたり、曾子はこの「唯」に先だつて実は格物致知を実践し尽くしていたのである、等と説いたりもするのである。『語類』卷二七、二条、楊道夫録(Ⅱ 669)「問一貫。曰。恁地汎看不濟事。須從頭子細、章章理會。夫子三千門人、一旦惟呼曾子一人而告以此、必是他人承當未得。今自家却要便去理會這處、是自處於孔門二千九百九十九人頭上、如何而可。」同、三一条、李方子録(Ⅱ 670)「曾子已前是一物格、一知至。到忠恕時、是無一物不格、無一知不至。」同、三四条、甘節録(Ⅱ 673)「曾子零碎處盡曉得了、夫子便告之曰。參乎。吾道一以貫之。他便應之曰。唯。」

83条

或問。物格而后知至一句、或謂物格而知便至。如此、則與下文而后之例不同。曰。看他文勢、只合與下文一般說。但且謂之物格、則不害其爲一事一物在。到知、則雖萬物亦只是一箇知。故必理無不窮、然後知方可盡。今或問中却少了他這意思。

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一五は本条を収録しない。

〔訳〕

ある者がお尋ねした。「物格りて后に知至るの一句について、物格りて知便ち至るといふ言ひ方をする場合もあるようです。しかしこのような言ひ方をする、下文の而后といふ文例とも一致しません。」先生「その文勢を見るならば、やはり下文と同様に説くべきだ。とりあえず物格るとだけ言った場合には、(その格物の対象が)一事一物であつたつてさしつかへはない。しかし知となると、万物(に関わる知識)であつても、ただ一箇の知なのだ。それ故に必ずやあらゆる理を窮め尽くした後であつてこそ、知は初めて尽くされるのだ。今『大學或問』中にはそのような趣旨に関する注記が欠落している。

〔注〕

(1) 「或謂物格而知便至」類似の表現は朱熹自身にも若干は見られる。『語類』卷一九、八四条、楊驥録(II-七二)「讀論語、須將精義看。先看一段、次看第二段、將兩段比較孰得孰失、孰是孰非。又將第三段、比較如前。又總一章之說而盡比較之。其間須有一說合聖人之意、或有两說、有三說、有四五說皆是、又就其中比較疏密。如此、便是格物。及看得此一章透徹、則知便至。」「中庸或問」二〇章「蓋擇善所以明善、固執所以誠身。擇之之明、則大學所謂物格而知至也。執之之固、則大學所謂意誠而心正身修也。」

(2) 「下文而后之例」『大學章句』経において「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后天下平。」のように八つの各条目が全て「而后」で結ばれていることを指す。

(3) 「看他文勢、只合與下文一般說」「一般」は「同じ」の意。「物格而知便至」よりも「物格而后知至」の方が表現として妥当であるということ。「物格而知便至」には、格物が実現すれば致知も同時に実現するとの語氣が有り、格物致知を連続的一体的に捉えることになる。一方、「而后」を間に挟んで「物格而后知至」とすれば、格物と致知とを区別した上で段階的漸進的に工夫が進行するとの語氣が生ずる。ただし本卷四九条、林恪録では「又云。致知格物、只是一事。非是今日格物、明日又致知。」と格物致知の連続性一性性が強調されており、本条とはややトーンが異なる。この点について清の陸隴其は以下のように述べている。『松陽講義』卷一、大學之道章、古之欲明節「語類載朱子致知格物之說不同。林恪所記、則云。致知格物、只是一事、非是今日格物、明日又致知。又有一條不知何人所記、則云。或謂物格而知便至、如此則與下文而后之例不同。曰。看他文勢、只合與下文一般說。此二條、應以林說爲正。」

(4) 「物格、則不害其爲一事一物在。到知則雖萬物亦只是一箇知。故必理無不窮、然後知方可盡。」同じ趣旨で「物格」と「知至」を對比したものととして以下を参照。『朱文公文集』卷四六「答黃商伯」第四書「經文物格、猶可以一事言。知至、則指吾心所可知處、不容更有未盡矣。」一事一物に即しての「格物」を累積した結果、豁然貫通するのが「致知」であるから、このように対比される(『大學

章句』伝五章参照)。

(5)「不害其爲一事一物在」「在」は文言の「焉」と同じで断定の語氣を表す句末の助詞。三浦國雄『朱子語類抄』六七頁。卷一四、一五條に既出。

84条

大學物格知至處、便是凡聖之關。物未格、知未至、如何殺也是凡人。須是物格知至、方能循循不已、而入於聖賢之域、縱有敏鈍遲速之不同、頭勢也都自向那邊去了。今物未格、知未至、雖是要過那邊去、頭勢只在這邊。如門之有限、猶未過得在。

問。伊川云、非樂不足以語君子、便是物未格、知未至、未過得關否。曰。然。某嘗謂、物格知至後、雖有不善、亦是白地上黑點。物未格、知未至、縱有善、也只是黑地上白點。伯羽 以下論格物致知誠意是學者之關

〔校勘〕

- 「循循不已」万曆本、和刻本は「循循」を「循々」に作る。
- 「都自向那邊去了」朝鮮整版本卷末「考異」「向、一作尚」
- 「雖是要過那邊去」朝鮮古写本は「雖」を「多」に作る。
- 「非樂不足以語君子」朝鮮古写本は「語」を「爲」に作る。
- 「以下論格物致知誠意是學者之關」朝鮮古写本にはこの校注なし。

〔訳〕

『大學』の「物格り知至る」というところは、凡か聖かの関門である。物にまだ格らず、知がまだ至っていない時には、どうしたってやはり凡人なのだ。是非とも物に格り知が至るべきであって、その上でこそ手順を踏んで実践を怠らなければ、聖賢の域に入ることにおいて、敏鈍遅速の相違があるにせよ、大勢としてはすっかりあちら側(＝聖賢の域)に向かつて進んでいるのだ。今、物にまだ格らず、知がまだ至っていないのであれば、たとえあちら側へと通過しようとしても、大勢としてはただただこちら側(＝凡人の域)にある。門に敷居が有るようなものであって、やはりまだそこを通過してはいないのだ。

質問「伊川が、楽しむのでなければ君子というものを語るには足りない、と言っていますが、これはつまり、物にまだ格らず、知がまだ至っていない間は、まだ(凡聖の)関門を通過してはいない、ということなのでしょうか。」先生「そうだ。私はかつて次のように言ったことがある、物に格り知が至った後は、たとえ(その人に)不善があったとしても、それは白地の上の黒い点のようなものだ。物にまだ格らず、知がまだ至っていない間は、たとえ(その人に)善があったとしても、それはやはり黒地の上の白い点に過ぎないのだ。」童伯羽録 以下は、格物致知誠意が学ぶ者にとっての関門であることを論ずる

〔注〕

- (1)「凡聖之關」「關」は分かれ目、関門。
- (2)「如何殺」「如何殺」の用例は『語類』ではこれのみであり、俗

語辞典の類にも未収録だが、文脈から仮に「いかにあろうとも」の意に解釈しておく。「殺」(sai)は「煞」(sai)に通ずる。『漢語大詞典』の「煞」の項には「副詞。極、甚。」の語義や「代詞。啥、什麼。」の語義を挙げ、後者の用例として『紅樓夢』第六回「這是什麼東西。有煞用處呢。」を引く。本条における「殺(Ⅱ)煞」は「什麼」の義を持つものと見ておきたい。なお『西山讀書記』卷二「大學」所引は「如何殺」を「縱如何」と言い換えている。「物格知至處、是凡聖闕。物未格、知未至、縱如何、亦是凡人。」因みに「如何煞」の用例としては『語類』卷一一、三一条、黄卓録(Ⅶ 2721)に「不知當初立法如何煞有不公處。」とあり、この場合の「如何煞」は「いかばかりか」の意であろう。

(3) 「頭勢」 形勢、大勢の意。『朱文公文集』続集、卷一「答黃直卿」
「辭免人、度今已到。不知所請如何。頭勢如此、又非前日之比。只得力辭。」

(4) 「循循」 順序正しく、手順を踏んで。『論語』「子罕」
「夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。」朱注「循循、有次序貌。」

(5) 「都自」 全て、全く。「自」は「已自」や「本自」の「自」と同じで、音節を整えるのみの用法。本卷五一条の「已自」、五二条の「本自」を参照。

(6) 「如門之有限」 門限は「闔」や「闔」と同義で、門の開閉部分の下部と地面との間に横にさし渡された木製または石造の敷居。門の内外を隔てる境界線を為す。『後漢書』卷一〇上「皇后紀」上「登建嬪后、必先令德、内無出闔之言。」注「闔、門限也。禮記曰。外

言不入於闔、内言不出於闔也。」(『礼記』は「曲礼」上、但し「闔」を「梱」に作る)。同上「上考詩書、有虞二妃、周室三母、修行佐德、思不踰闔。」注「闔、門限也。左傳曰。婦人送迎不出門、見兄弟不踰闔。」(『左伝』は僖公二十二年)。『語類』卷七三、五五條、萬人傑録(V 1853)「又如門限然、在外者不得入、在内者不得出。」

(7) 「猶未過得在」 「在」は句末の助詞。文言の「焉」に同じ。

(8) 「非樂不足以語君子」 『河南程氏遺書』卷一七(伊川先生語)、六九條「説先於樂者、樂由説而後得、然非樂則亦不足以語君子。」この語は『論語集注』「学而」の「學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。」の朱注にも「程子曰」として引かれる。

(9) 「白地上黑點」「黑地上白點」 類似の表現は後出の本卷八七条にも見える。

85条

格物は夢覺關。(原注)「格得來是覺、格不得只是夢。」誠意是善惡關。(原注)「誠得來是善、誠不得只是惡。」過得此二關、上面工夫却一節易如一節了。到得平天下處、尚有些工夫。只爲天下濶、須著如此點檢。又曰。誠意是轉關處。又曰。誠意是人鬼關。(原注)「誠得來是人、誠不得是鬼。」夔孫

〔校勘〕

○「只爲天下濶」劉氏伝経堂叢書本を含めて諸本は全て「濶」を「闊」に作り、呂留良本のみが「濶」に作る。

○「須著如此點檢」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「又曰。誠意是轉關處」朝鮮古写本には「又曰」の二字がなく、かつ「誠意是轉關處」以下を改行して別の条としている。

〔訳〕

格物は夢か覚かの関門である。(原注)「格ることができれば覚、格ることができなければ夢でしかない。」誠意は善か悪かの関門である。

(原注)「誠にすることができれば善、誠にすることができなければ悪でしかない。」この二つの関門を突破できれば、それ以下の工夫も一節ごとに容易になっていく。平天下の段階に至っても、なお取り組むべき工夫がある。天下は広大なのだから、是非ともそのように一々点検していくべきである。

又言われた。「誠意は転換点である。」又言われた。「誠意は人か鬼かの関門である。(原注)「誠にすることができれば人、誠にすることができなければ鬼だ。」林夔孫録

〔注〕

(1)「過得此二關」格物と誠意を二大関門とする。後出の本卷一四八条には「大學一篇却是兩箇大節目。物格知至是一箇、誠意

修身は一箇。才過此二關了、則便可直行將去。」とある。

(2)「上面工夫」「上面」は前、前の、以前の。ただしこの「上面工夫」とは文脈から考えると正心乃至平天下、即ち格物誠意より以後の工夫を意味するように思われる。「上面」は或いは「下面」の誤記か。

(3)「一節易如一節」一節ごとに容易になっていく。「一A某如一A」の形で、「一Aごとに某になっていく」の意。卷二四、一七三条に「如人飲酒、終日只是喫酒。但酒力到時、一杯深如一杯。」とある。同条の注を参照。

(4)「人鬼關」黄幹の「朱子語類門目」(『語類』卷首)に「鬼神、其別有三。在天之鬼神、陰陽造化、是也。在人之鬼神、人死爲鬼、是也。祭祀之鬼神、神示祖考、是也。三者雖異、其所以爲鬼神者則同。」とあるが、ここに言う「鬼」とは、そのような朱子学的鬼神概念の埒外にある、単なる罵倒語、「鬼子」に近いものである。陸游『劔南詩藁』卷二〇「北窗病起」「一飢可忍萬緣輕、況復幽窗疾漸平。更事天公終賞識、欺人鬼子漫縱橫。」因みに本卷八九条に「論誠意、曰。過此一關、方是人、不是賊。」とある。即ち本条における「鬼」は八九条における「賊」に相当する概念であり、「人でなし」という程の意であろう。

『朱子語類』卷一五(1~85条)、訳注担当者

1~14条

小笠 智章

15	23	焦
24	29	中
30	38	純
39	50	宇佐美文理
51	59	孫路易
60	70	福谷彬
71	85	古勝亮
		中純夫

(二〇一二年一〇月三日受理)

(うさみ ぶんり 京都大学大学院文学研究科准教授)

(おがさ ともあき 京都大学高等教育研究開発機構非常勤講師)

(こがち りょう 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(しょう こん 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(そん るい 岡山大学言語教育センター准教授)

(なか すみお 京都府立大学文学部教授)

(ふくたに あきら 京都大学大学院文学研究科修士課程)